

京都府遺跡調査概報

第 6 冊

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
 - (1)大内城跡墳墓
 - (2)後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳
 - (3)洞楽寺古墳
 - (4)山田館跡
 - (5)洞楽寺2・3号墳
 - (6)城ノ尾城館跡
 - (7)ヶシヶ谷城館跡
2. 青野遺跡第6・7次
3. 青野遺跡第8次
4. 中山城跡
5. 古殿遺跡
6. 下畑遺跡
7. 土師南遺跡

1983

序

昭和56年4月に当調査研究センターが発足し、本年度は2年目の事業を実施しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることの考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和57年度は27件の調査を受託しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されてはいはずはありません。一つでも多くの遺跡が開発事業との調和を見いだして、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

昭和57年度は関係者の理解を得て広隆寺跡出土の梵鐘鋳造遺構の模型を作成し展示することになりました。また、福知山市大道寺の経塚から出土したお経の巻物をときほぐして表装することもできました。当調査研究センターでは、このように遺跡や遺物の保存のためあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努める所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は年度ごとに調査結果を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸いです。

この調査概報をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎天下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 2. 青野遺跡第6・7次 3. 青野遺跡第8次
4. 中山城跡 5. 古殿遺跡 6. 下畑遺跡 7. 土師南遺跡

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡			日本道路公団 大阪建設局	伊野 近富 小山 雅人 岩松 保
(1) 大内城跡墳墓	福知山市大字大内小字平城	昭56.12. 8 } 昭57. 7.28		
(2) 後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳	福知山市大字大内小字後正寺	昭57. 6.26 } 昭57.12. 8		
(3) 洞楽寺古墳	福知山市大字大内小字坪田	昭57. 6.26 } 昭57.12.10		
(4) 山田館跡	福知山市大字大内小字大内山田	昭57.12. 6 } 昭58. 3.31		
(5) 洞楽寺2・3号墳	福知山市大字大内小字坪田	昭57.10. 1 } 昭57.10.30		
(6) 城ノ尾城館跡	福知山市大字宮小字城ノ尾	昭57.12.12 } 昭58. 3.31		
(7) ケシヶ谷城館跡	福知山市大字宮小字ケシヶ谷	昭58. 3. 4 } 昭58. 3.15		
2. 青野遺跡第6・7次	綾部市青野町西吉美前	昭55. 3. 4 } 昭57. 7.12 } 昭57. 7.12 } 昭57.11.18	京都府土木建築部	増田 孝彦 小山 雅人
3. 青野遺跡第8次	綾部市青野町西吉美前・上ふけ	昭57. 7.12 } 昭57.10.20	建設省近畿地方建設局	小山 雅人
4. 中山城跡	舞鶴市字中山一ノ丸	昭57.12. 8 } 昭58. 2.22 } 昭58. 3.31	京都府土木建築部	竹原 一彦
5. 古殿遺跡	中郡峰山町字古殿	昭57. 7. 1 } 昭57.10.30	京都府教育委員会	戸原 和人
6. 下畑遺跡	与謝郡野田川町字三河内	昭57. 7.22 } 昭57.10. 1	京都府教育委員会	竹原 一彦
7. 土師南遺跡	福知山市字土師小字南町	昭57. 7.22 } 昭57. 9.16	京都府教育委員会	竹原 一彦

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和57年度発掘調査概要	1
(1) 大内城跡墳墓	4
(2) 後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳	14
(3) 洞楽寺古墳	36
(4) 山田館跡	48
(5) 洞楽寺2・3号墳	57
(6) 城ノ尾城館跡	58
(7) ケシヶ谷城館跡	63
2. 青野遺跡第6・7次発掘調査概要	67
3. 青野遺跡第8次発掘調査概要	81
4. 中山城跡発掘調査概要	91
5. 古殿遺跡発掘調査概要	97
6. 下畑遺跡発掘調査概要	105
7. 土師南遺跡発掘調査概要	119

挿 図 目 次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

第 1 図	調査地付近遺跡分布図	2
第 2 図	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡と新発見遺跡	4
(1)大内城跡墳墓		
第 3 図	墳墓 SX 300 全体図	5
第 4 図	墳墓 SX 300 個々図	6
第 5 図	大内城変遷図	8
第 6 図	出土遺物実測図(1)	9
第 7 図	出土遺物実測図(2)	10
(2)後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳		
第 8 図	後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳地形図	14
第 9 図	後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳トレンチ配置図	15
第 10 図	小屋ヶ谷古墳墳丘測量図	16
第 11 図	小屋ヶ谷古墳石室実測図	17
第 12 図	小屋ヶ谷古墳墳丘土層実測図	19
第 13 図	小屋ヶ谷古墳石室内遺物出土状況図	20
第 14 図	後正寺古墓 塚 1・3 の葺石検出平面図	22
第 15 図	後正寺古墓 塚 1・3 土層図	23
第 16 図	集石遺構実測図	24
第 17 図	後正寺古墓出土遺物実測図	25
第 18 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(1)	26
第 19 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(2)	28
第 20 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(3)	30
第 21 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(4)	32
第 22 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(5)	33
第 23 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(6)	34
第 24 図	小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(7)	35
(3)洞楽寺古墳		
第 25 図	調査位置図	36

第 26 図	調査地測量図	38
第 27 図	墳丘断面・石室平面図	39
第 28 図	SX 10断面図	41
第 29 図	SX 6 実測図	42
第 30 図	中世墓 SX 7・SX 8	43
第 31 図	SK 3 実測図	43
第 32 図	SX 9 平面実測図	44
第 33 図	出土遺物実測図	45
(4)山田館跡		
第 34 図	山田館跡地形図	48
第 35 図	土塁状隆起集石実測図	49
第 36 図	遺構配置図	50
第 37 図	蔵骨器・埋納土器出土状況図	51
第 38 図	集骨・集石遺構実測図	53
第 39 図	山田館跡出土遺物実測図	54
(6)城ノ尾城館跡		
第 40 図	城ノ尾城館跡平面実測図	59
第 41 図	城ノ尾城館跡出土遺物	62
(7)ケシケ谷城館跡		
第 42 図	ケシケ谷城館跡測量図	63
青野遺跡第 6・7 次		
第 43 図	調査地位置図	67
第 44 図	第 6 次調査地平面実測図	70
第 45 図	弥生時代中期の遺物	73
第 46 図	古墳時代前期の遺物	74
第 47 図	7 世紀の遺物	74
第 48 図	石剣実測図	75
第 49 図	第 7 次調査地平面実測図	76
第 50 図	A トレンチの出土遺物	77
第 51 図	B トレンチの出土遺物	78
青野遺跡第 8 次		
第 52 図	調査地と周辺の遺跡	82

第 53 図	調査地区平面図	83
第 54 図	旧河道断面実測図	86
第 55 図	竪穴式住居跡 SB 8205	87
第 56 図	SB 8205・SB 8202 出土遺物	88
中山城跡		
第 57 図	中山城跡と周辺の城館跡	92
第 58 図	中山城跡概略図	93
第 59 図	調査地平面図	94
第 60 図	SX 02平面図	95
古殿遺跡		
第 61 図	調査地位置図	97
第 62 図	調査地トレンチ配置図	99
第 63 図	第 1 トレンチ遺構検出状況図	100
第 64 図	第 3 トレンチ遺構検出状況図	102
第 65 図	木製四脚机	103
第 66 図	注口土器	103
下畑遺跡		
第 67 図	調査地位置図(1)	105
第 68 図	調査地位置図(2)	107
第 69 図	調査地平面図	108
第 70 図	SE 01 平面図及び立面図	109
第 71 図	出土遺物実測図	111
第 72 図	SE 01 内出土木製品実測図	114
土師南遺跡		
第 73 図	調査地位置図(1)	119
第 74 図	調査地位置図(2)	120
第 75 図	調査地平面図及び柱状断面図	121
第 76 図	出土遺物実測図	122

図 版 目 次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1)大内城跡墳墓

- 図版第1 (1)SX 300 全景(西から) (2)SX 300 半掘状況(南から)
図版第2 (1)SX 300-E・F(北から) (2)SX 300-H 敷石除去状況(南から)
図版第3 (1)SX 300-F 検出状況(東から) (2)SX 300-F 火葬骨埋納状況(東から)
(3)SX 300-A 検出状況(南から) (4)SX 300-A 蔵骨器検出状況(東から)
図版第4 (1)SX 300-L 検出状況(西から) (2)SX 300-L 半掘状況(西から)
(3)SX 300-L 蔵骨器(北から) (4)SX 300-A 鏡
図版第5 (1)SX 300-F 蓋 (2)SX 300-F 蔵骨器
(3)SX 300-A 蓋 (4)SX 300-A 蔵骨器

(2)後正寺古墳・小屋ヶ谷古墳

- 図版第6 (1)小屋ヶ谷古墳遠景(東から) (2)小屋ヶ谷古墳石室内崩落石検出状況
図版第7 (1)小屋ヶ谷古墳石室全景 (2)小屋ヶ谷古墳石室内遺物検出状況
図版第8 後正寺古墳・小屋ヶ谷古墳出土遺物
図版第9 小屋ヶ谷古墳出土遺物
図版第10 小屋ヶ谷古墳出土遺物 鉄器
図版第11 小屋ヶ谷古墳出土遺物 馬具
図版第12 (1)小屋ヶ谷古墳出土遺物 馬具 (2)小屋ヶ谷古墳出土遺物 装身具

(3)洞楽寺古墳

- 図版第13 (1)洞楽寺古墳発掘調査前全景(南東から) (2)横穴式石室完掘後(南から)
図版第14 (1)SX 7・8 検出状況(東から) (2)SX 8 検出状況(東から)

(4)山田館跡

- 図版第15 (1)土壘状隆起集石検出状況 (2)丹波焼大甕(A)出土状況
図版第16 (1)土師器鍋(C)出土状況 (2)瀬戸灰釉陶器(H)出土状況

(5)洞楽寺2・3号墳

- 図版第17 (1)洞楽寺2号墳試掘状況(北から) (2)洞楽寺3号墳試掘状況(南から)

(6)城ノ尾城館跡

- 図版第18 (1)調査地北部 SB 01・SB 03・SC01(南から) (2)調査地南部(北東から)

青野遺跡第6・7次

- 図版第19 (1)62 L 06(S) 遺構検出状況(北から) (2)62 N 11(S) (北から)
図版第20 (1)62 N 11(S) SB 8111~SB 8116 ほか(南から)
(2)SK 8111・SK 8112・SK 8113 ほか(南西から)
図版第21 (1)62 O 12(S) (南から) (2)62 T 18(S) 遺構検出状況(北から)
図版第22 (1)A トレンチ(東から) (2)SB 8201(北東から)
図版第23 出土遺物

青野遺跡第8次

- 図版第24 調査地航空写真(上が東)
図版第25 (1)第3 トレンチ(北から) (2)S B 8205(北東から)
図版第26 出土遺物

中山城跡

- 図版第27 (1)中山城跡遠景(北西から) (2)調査前状況(南東から)
図版第28 (1)SX 02(北から) (2)堀切り(北から)

古殿遺跡

- 図版第29 (1)第1 トレンチ全景(西から) (2)SD 02 堰検出状況(東から)
図版第30 (1)暗渠施設 SX 08 検出状況①(西から)
(2)暗渠施設 SX 08 検出状況②(東から)
図版第31 (1)第2 トレンチ下層遺構検出状況(東から)
(2)SD 21 土器出土状況(東から)

下畑遺跡

- 図版第32 (1)調査地全景(北東から) (2)SE 01 遺物出土状況①(南東から)
図版第33 (1)SE 01 遺物出土状況②(南東から) (2)SE 01 全景(南東から)
図版第34 出土遺物(1)
図版第35 出土遺物(2)

土師南遺跡

- 図版第36 (1)第1 トレンチ(西から) (2)第3 トレンチ南壁セクション

付 表 目 次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

付表 1	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表	3
付表 2	大内周辺の新発見遺跡	3
付表 3	遺物観察表	12



1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和57年度発掘調査概要

はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査は、昭和54年度から福知山市大字大内山田、同長田に至る約15km区間に限って開始された。昭和54・55年度の調査については、日本道路公団大阪建設局の委託により、京都府教育委員会が事業主体となって実施したが、56年度以降は、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続して行っている。

昭和53年に行われた分布調査によって9遺跡が確認され、その後5遺跡が追加確認された。概要は付表1と第1・2図を参照されたい。

今年度はこれらの遺跡の内、^{おおうちじょうあと}大内城跡墳墓、^{ごしやうじ}後正寺古墓、^{とうらくじ}山田館跡、^{じやうの お}洞楽寺古墳、城ノ尾城館跡を発掘調査し、洞楽寺2号墳・同3号墳、ケシケ谷城館跡を試掘調査した。

調査期間については下記のとおりである。

大内城跡墳墓	昭和56年12月8日～昭和57年7月28日
後正寺古墓	昭和57年6月26日～12月8日
洞楽寺古墳	昭和57年6月26日～12月10日
山田館跡	昭和57年12月6日～昭和58年3月31日
洞楽寺2号墳	昭和57年10月1日～10月15日
洞楽寺3号墳	昭和57年10月17日～10月30日
城ノ尾城館跡	昭和57年12月22日～昭和58年3月31日
ケシケ谷城館跡	昭和58年3月4日～3月15日

現地調査は、調査課主任調査員 辻本和美、同調査員 伊野近富・小山雅人・岩松 保・藤原敏晃が担当した。また、調査に際しては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・福知山市教育委員会社会教育課・同市史編さん室・同企画調整室・福知山史談会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得た。また、地元宮・大内地区の方々には有形無形の助力を賜りました。記して謝意を表します。なお、発掘調査参加者^(注1)と協力者にも幾多の苦勞をかけたことを記しておきます。(伊野 近富)

位置と環境

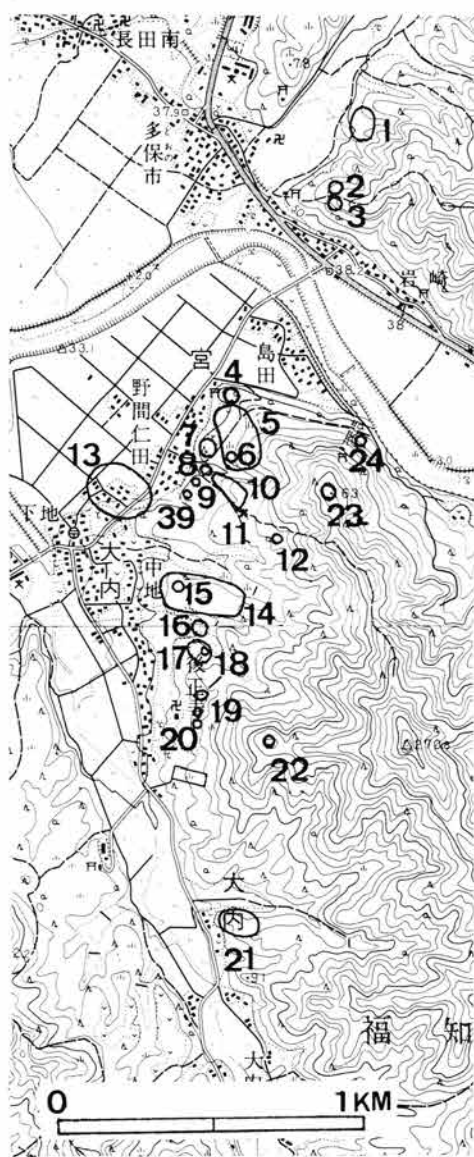
調査地は福知山市東南部に位置する。歴史的環境は前年度に報告したところであり、今回

付表1 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	年代	所在地	備考
1	多保市城跡	城跡	中世	福知山市大字多保市	前年度確認遺跡
2	岩崎古墳	古墳	古墳	〃 〃	他に2基存在か
3	岩崎古墓	古墓	江戸	〃 〃	他に1基存在か
4	城ノ尾城館跡	集落跡 城館跡	弥生～中世	〃 大字宮小字城ノ尾	本年度調査 今回報告
5	宮遺跡	集落跡 古墓	弥生～中世	〃 〃小字城ノ尾ほか	昭和54～56年度調査
6	城ノ尾古墳	古墳	古墳時代後期	〃 〃 〃	昭和54年度調査
10	ケンケ谷城館跡	集落跡か 城館跡	弥生～中世	〃 〃小字ケンケ谷	本年度試掘調査
14	大内城跡	城館跡	弥生～中世	〃 大字大内小字平城	昭和55～56年度調査
	大内城跡墳墓	古墓	中世	〃 〃 〃	本年度調査 今回報告
16	後正寺古墳 小屋ケ谷古墳	古墓 古墓	古墳時代後期～中世	〃 〃小字後正寺	本年度調査 今回報告
17	後青寺跡 後青寺古墳	城館跡 古墳	古墳時代後期～中世	〃 〃小字後青寺ほか	昭和56年度調査
20	洞楽寺古墳	古墳	古墳時代後期	〃 〃小字坪田	昭和57年度調査
18	洞楽寺2号墳	古墳か		〃 〃 〃	昭和57年度試掘調査
19	洞楽寺3号墳	集落跡か	古墳時代後期	〃 〃 〃	〃
21	山田館跡	古墓	中世	〃 〃小字大内山田	本年度調査

付表2 大内周辺の新発見遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	所在地	備考
22		古墳	古墳時代	福知山市大字大内小字庵戸	昭和57年6月踏査 横穴式石室か
23		古墳	古墳時代	〃 大字宮小字トチ谷他	昭和58年2月踏査 墳頂部に「元一宮神社 趾」の石碑あり
24		古墳	古墳時代	〃 大字宮小字トチ谷	昭和58年3月踏査 横穴式石室
39	奥谷古墓 (仮称)	古墓	中世	〃 大字大内小字奥谷	昭和58年3月 土地所有者芦田弘氏発見



第2図 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡と新発見遺跡

土坑 (S X300-M) を掘り終え調査を終了した。なお昭和 57 年 9 月 18 日に関係者説明会を開催し、同年 10 月 2 日に高槻史談会 (於高槻市市民会館)、昭和 58 年 1 月 8 日に埋蔵文化財研究会 (於京都府立勤労会館) で調査の概要を発表した。

当遺跡は中世社会の研究に重要な資料を提供すると考えられるので、昭和 58 年度に本格的な整理作業を行い本報告書を刊行する予定である。

の横にある円墳で、標高 70m 前後の丘陵腹に立地している。径 12m・高さ 1.2 m の横穴式石室墳と思われる。39 奥谷古墓は六人部地方唯一の前方後円墳である男塚古墳に南接した丘陵端にある。土地所有者の芦田弘氏が開墾作業中に発見したものである。現地は 3 基ほどのマウンドが集合し、ひとつの区画を形成している。マウンドは拳大の石を 20~30cm 積み上げて造っている。この 2 か所から丹波系壺と須恵質の甕片および骨片が出土した。土器の形態から鎌倉時代の墓と思われる。

以上のように踏査の回数を増やすにしたがって新発見遺跡が増加している。今後も鋭意努力して正確な遺跡分布状態を把握しなければならない。(伊野 近富)

(1) 大内城跡墳墓 (S X300)

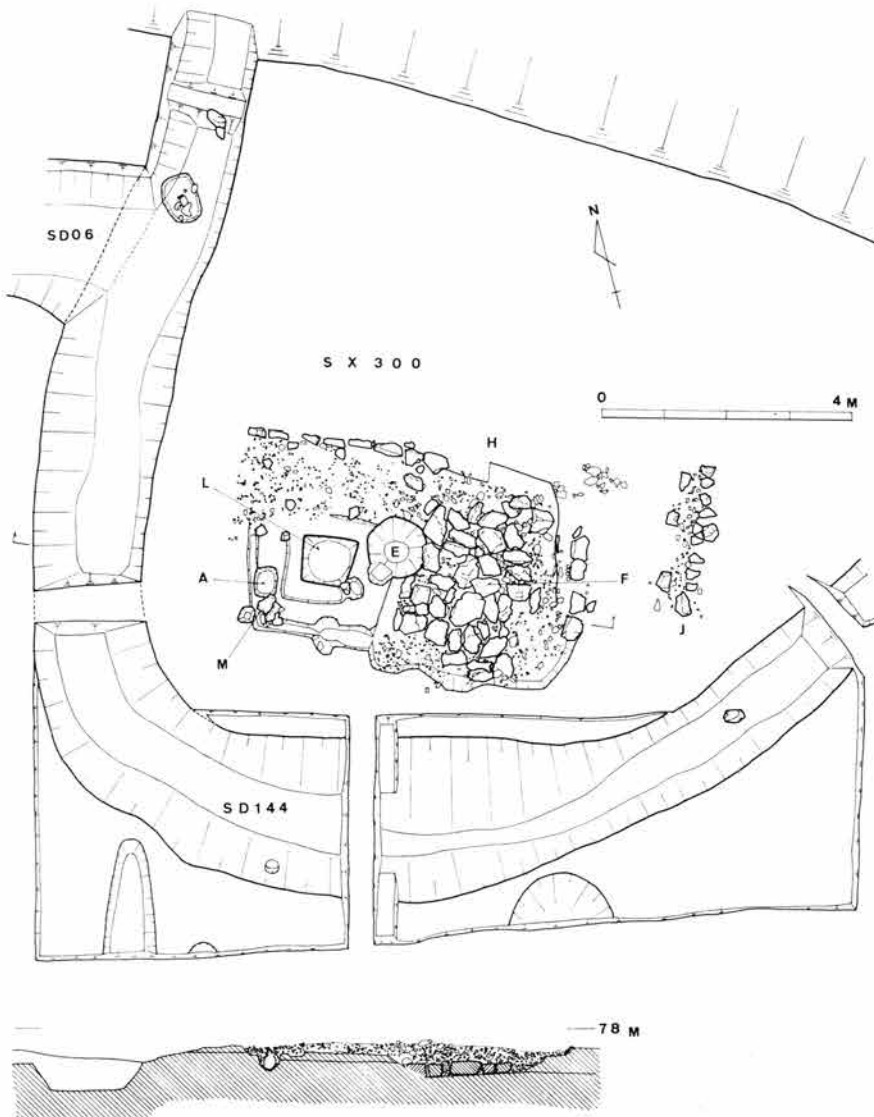
1. 調査の経過

前年度の概報で墓 2 と報告したが、今回は S X300 と呼称する。遺構は予想以上に良好な状態で検出された。今年度は中央に埋置された丹波系大甕 (S X300-E) を掘ることから始めた。そしてもっとも古い段階に埋置された常滑系壺 (S X300-L) と

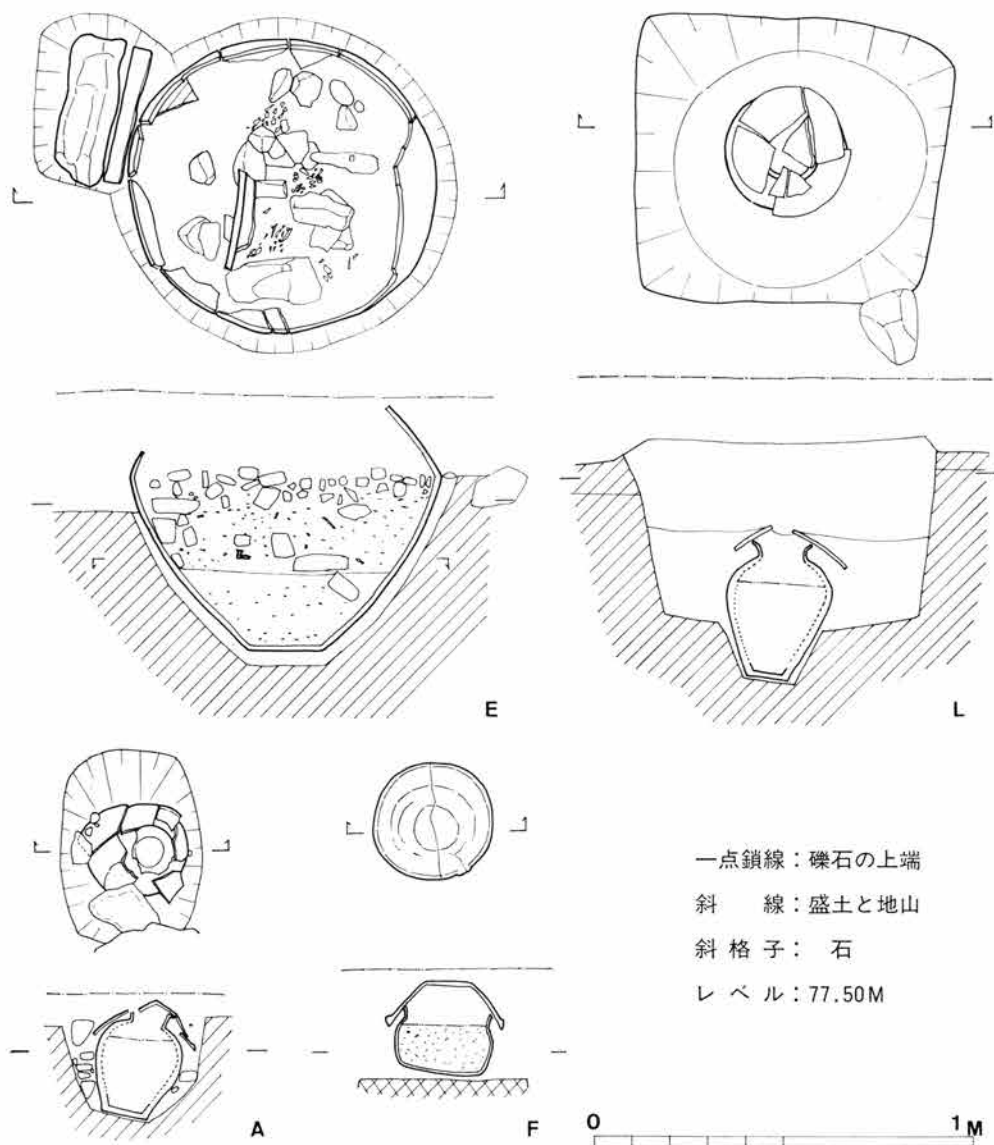
2. 検出遺構

前年度報告済みのもも含めて検出した遺構の概要を説明する。

墳墓の調査はまず表土剥ぎから始めた。厚さ数cmの腐植土を除くと、東西6.5m・南北3.5mの範囲にわたって鶏卵大の円礫が積まれていた。円礫の間からは土師器鍋片などが出土した。またこの段階で集石部分を区画する溝SD144も検出した。この状態で空中写真撮影を行った。その後集石を除去する作業を始めた。集石の厚さは西部で約20cm、東部で約40cmで



第3図 墳墓 SX300 全体図



第4図 墳墓 SX300 個々図

あった。墓域は大きく2区画に分かれる。西部は北辺に10cm×25cmの石を立て並べ、中央部は幅20cm程度の溝を四角に掘り、中に方形土壇をもつ。この区画にA・L・Mの3基の墓が造られていた。東部は西部より一段低く造られた3.5mの方形を呈する区画をもつ(H)。東西両辺に20cm×40cm程度の石を一列に敷き並べ、方形区画内部には30cm×40cm程度の平石を敷き並べる。この平石直上には2か所(北部と南部とに1か所ずつ)黒色土が30~40cmの範囲に置かれており、この近辺から鉄釘数本が出土した。また中央の集石中には墓1基(F)が

造られていた、この2区画の接する所にもっとも大きな墓Eが造られている。

個々の墓の内容は次のとおりである。

Aは、隅丸方形の掘形をもつ墓である。掘形の規模は長さ50cm・幅35cm・深さ30cm。黄褐色土の埋土である。蔵骨器はやや北東に傾いた格好で埋められていた。須恵器三耳壺を使用しており、口縁部が少々破損していたのみで遺存状態は良好であった。壺は丹波系のすり鉢を使用していたが、これは幾つかに割れた状態で発見された。蓋の数cm上が集石の上面である。骨は壺の肩部くらいまで入れてあった。また焼けて歪んだ鏡片2枚（同一個体）も一緒に入れてあった。

Eは、円形の掘形をもつ墓である。径90cm・深さ70cm、墓壇の断面はすり鉢状を呈する。蔵骨器は丹波焼系の大甕で、肩部より上はほとんど破損しており、その一部は内部に転落していた。この他、上半分には円礫が多数流れ込んでおり、中国製褐釉壺片も混入していた。また下半分には骨が入れられ、瀬戸灰釉小壺と土師器皿1点も検出した。蓋は検出されなかった。板を使用したものか。甕の上半分の破片はかなり小片であり、幾度となく破壊されたらしい。

Fは、他の蔵骨器が穴の中に埋置されていたのに対し、集石の中に埋置されていた。なおすぐ下には平石があり、むしろ平石の上に据え置いたと考えた方が自然である。蓋としては須恵器ねり鉢が使用されていた。いずれも完形である。

Lは、層位としてもっと古い段階のもので、一辺約80cmの方形掘形を掘り、その中央に完形の常滑焼系壺を置き、蓋は須恵器甕・壺の底部を一部割り取ったものを転用していた。掘形の下半分には黒色土を入れ、蓋より上には約20cmの厚さで黄褐色土を入れていた。

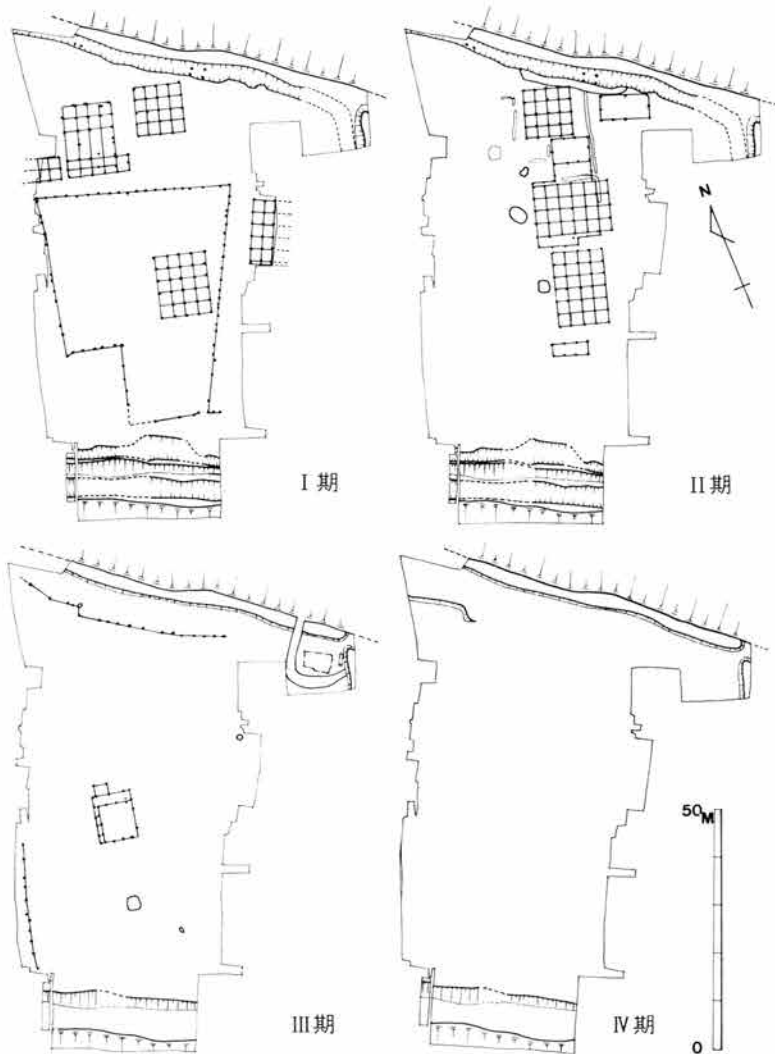
Mは、楕円形の土壇の中に黒色土と若干の骨片と銅片を入れた墓である。長さ40cm・幅30cm・深さ20cm、レンズ状の底部となっている。なお土壇の上には30cm×40cm程度の平石が2個置かれていた。

以上の墓が造られた順序を復原すると、第1段階は墓域を約20cmの厚さに盛土し、この段階でHを造る。これに伴う蔵骨器は不明だが、須恵器鉢片や越前焼系壺片などが検出されており、それらが蔵骨器であった可能性がある。また、2か所で黒色土が集中して認められ、鉄釘もあったことから木製容器が存在したらしい。第2段階は西部の区画を造り、この中央にLを埋置する。Lの周囲には溝が掘られており、この結果方形土壇状を形成している。付近から五輪塔片（火輪）が発見された。第3段階は2つの区画を統合した形でEを造り、この段階で溝（SD 144）を掘り、結界を完了している。第4段階はA・F・Mを埋置し、すべての造墓行為を完了している。出土遺物から第1・2段階が平安時代末期頃、第3段階が鎌倉時代後期、第4段階が南北朝時代頃と思われる。なおEからは数体分の火葬骨が検出さ

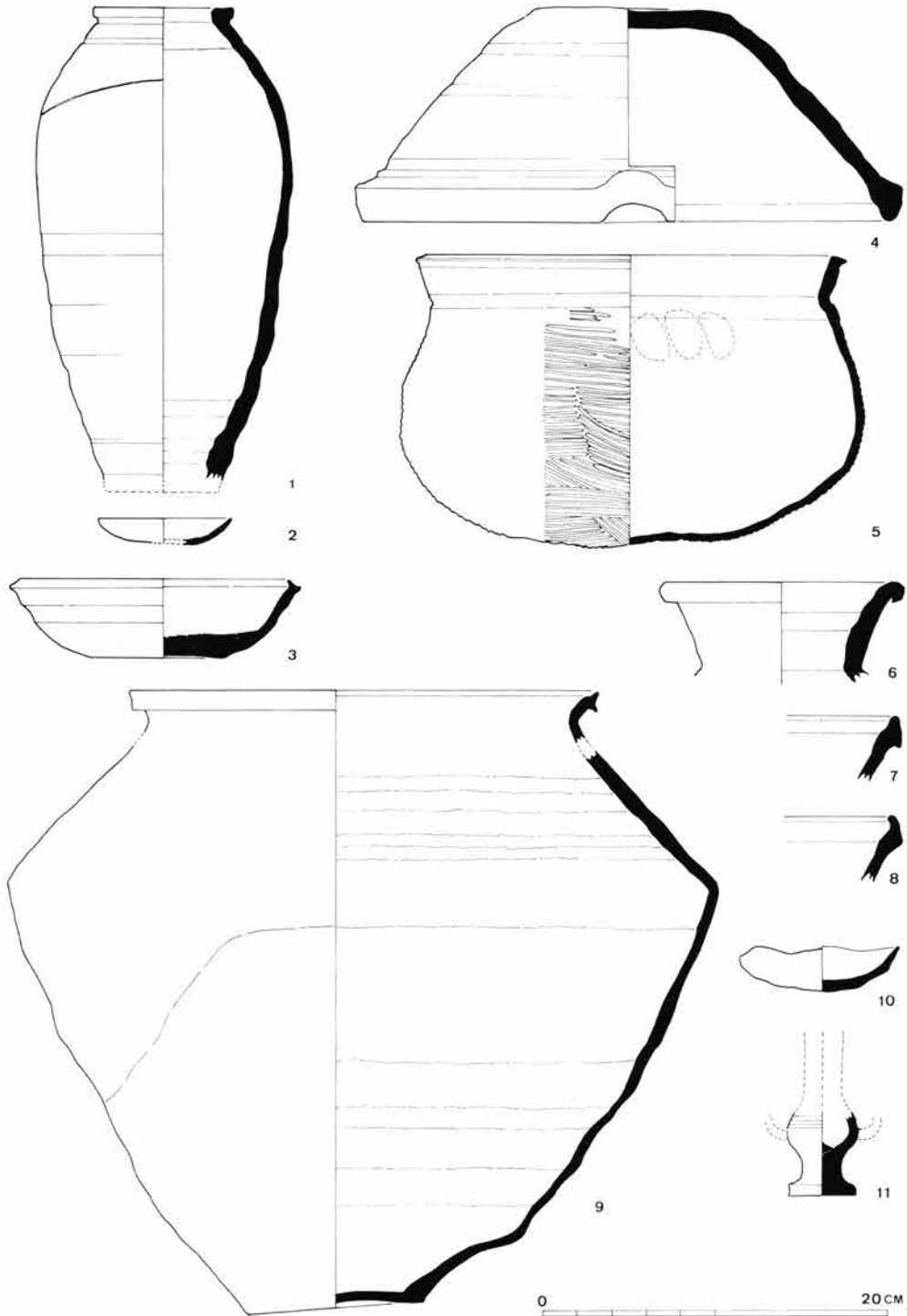
れたが、他は、すべて一体分ずつを納めたと思われる。

3. 墳墓の造営者

主たる造営時は大内城にはほとんど人は居住しておらず、墓所の色合いが濃い。ただ平安時代末期の城館を踏襲して使用していることから大内城経営者の系統は断絶していないと言えそうである。平安時代末期の大内城周辺は、本家八条院，領家平頼盛という当代きっての有力者の荘園（六人部荘^(注3)）であり、その後も大覚寺統に伝領され、一定の系譜をたどるこ

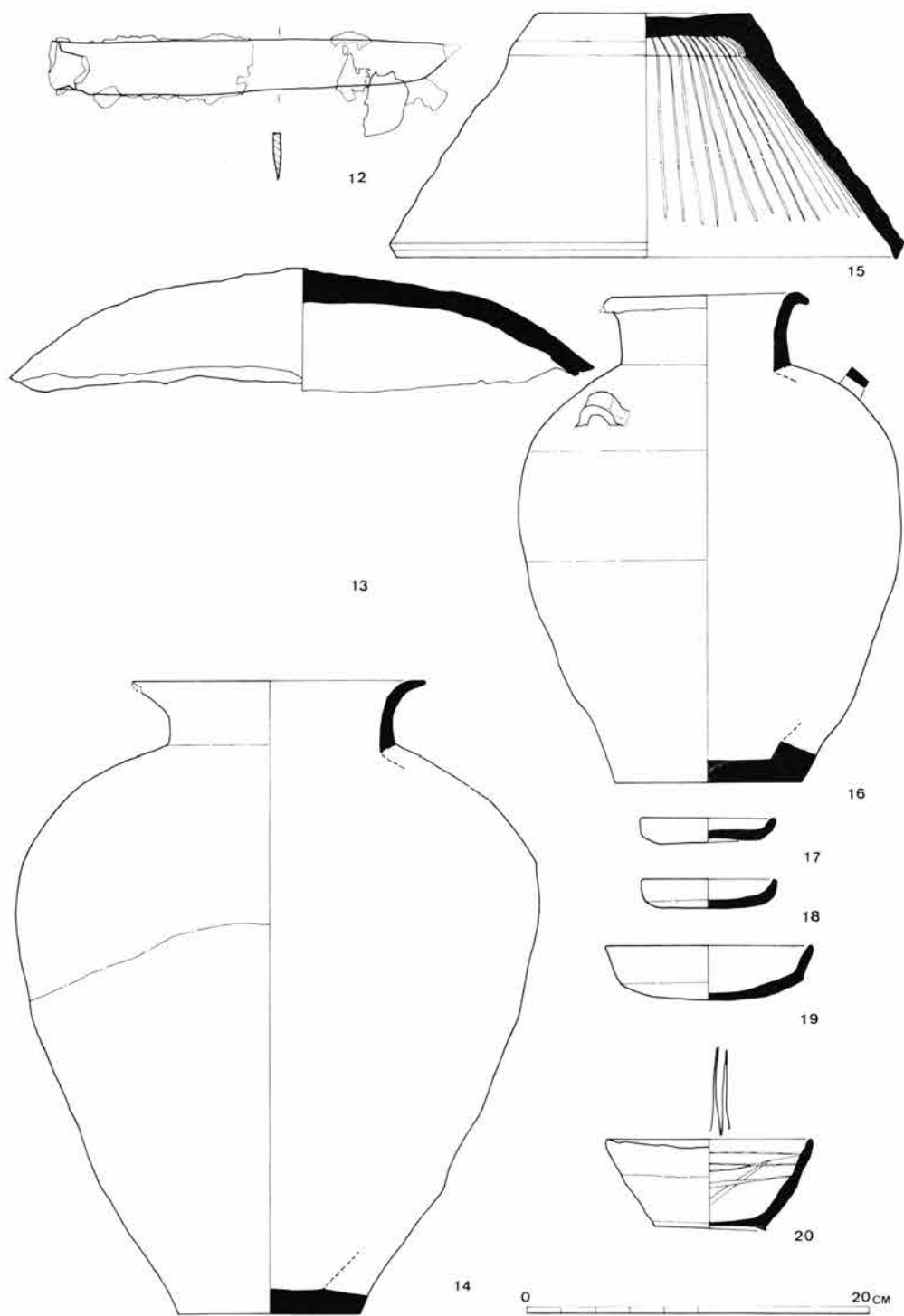


第5図 大内城変遷図



第6図 出土遺物実測図(1)

- | | | |
|------------------|---------------|----------------|
| 1. 中国製褐釉壺 | 2・10. 土師器皿 | 3. 瀬戸灰釉おろし目皿 |
| 4・7・8. 須恵器鉢 | 5. 土師器鍋 | 6. 越前系壺 |
| 9. 丹波系甕 | 11. 瀬戸灰釉花瓶 | S X-300-F; 4・5 |
| S X300-E; 1・9~11 | S X300集石; 6~8 | S X300; 2・3 |



第7図 出土遺物実測図(2)

- | | | | | |
|-----------------|---------------|----------|----------|-----------------|
| 12. 鉄刀 | 13. 須恵器甕片 | 14. 常滑系壺 | 15. 丹波系鉢 | 16. 須恵器三耳壺 |
| 17~19. 土師器皿 | 20. 瓦器杯 | | | S X300-A; 15・16 |
| S X300-L; 12~14 | S B131; 17~20 | | | |

とができる。安定した伝領の上に成り立った荘園の政所というのがもっとも可能性の高い推定である。

近年の発掘調査によって六人部周辺の中世墳墓形態が知られてきた。それによると蔵骨器は土師器鍋を使うことが一番多く（蓋は須恵器ねり鉢）、わずかに丹波焼系壺や瀬戸灰釉瓶子を使用する程度である。また副葬品はほとんど皆無と言って良い。これに対して当遺跡は種々の蔵骨器を使用し、また副葬品も鏡や鉄刀のあることから、前者の造墓グループとは相違している。従って当遺跡の造営者は大内村や宮村と呼ばれた広い地域を統轄した人物たちの墓と言えよう。このことから荘官の墓地と考えるのがもっとも可能性がある。

4. ま と め

以上のように平安時代末期から南北朝時代にかけての墓であることが判明した。墓の特徴は次のとおりである。

(1)石で方形区画を設定し、その中に数基の火葬墓を造営している。

(2)蔵骨器の器形は、壺・甕・鍋と様々であるが、生産地は丹波地方がほとんどで均質性をもっている。

(3)副葬品はほとんどないが、近隣の同時代墓と比べると、規模が大きく上層階級の墓と考えられる。

(4)食器類を使用する墓前祭はほとんど行われていない。

また墓の被葬者については次のように考えられる。

(1)前代からの敷地を踏襲しており、六人部荘の荘官の系統下にあるらしい。

(2)但し、前代のように中国製陶磁器を多量に保有するような経済力は持ちあわせておらず、より小規模化した在地の土豪クラスの勢力を保有していたらしい。

なお末尾となりましたが、墳墓の全体像を知るために私有地部分も調査することとなり、この調査に御理解を示された西舩 貢氏と芦田 弘氏に深く感謝します。

(伊野 近富)

付表3 遺物観察表

器種	器形	番号	法量 (cm)		形態の特徴	成形技法の特徴	備考
			口径	器高			
磁器	壺	1	8.2	(27.4)	◦長胴。 ◦肩部に波状文(沈線)。	◦ロクロなで。 ◦下半は粗雑に処理。	◦胎土、粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、外面は暗褐色。 ◦中国製褐釉壺。
土師器	皿	2	7.8	1.6	◦器壁は薄い。	◦指おさえて全体の形をつくる。	◦胎土、良。 ◦焼成、軟。 ◦色調、淡褐色。
		10	9.2	2.6	◦口縁部の器壁は薄い。 ◦底部は部厚い。	◦指おさえ。	◦胎土、粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、赤褐色。 ◦S X300-Eの内部に入れられていた。
		17	8.0	1.4			◦胎土、良。 ◦焼成、軟。 ◦色調、淡茶褐色。
		18	7.8	1.6			
		19	12.2	3.2			
	鍋	5	23.6	16.8	◦口縁端部は台形。 ◦外側に少し突出する。	◦体部外面は横方向の叩き。 ◦体部内面には2~3cm大の円形のくぼみあり。 ◦叩き板の内あて。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、橙褐色。
陶器	皿	3	15.6	4.6	◦内底面には篋状道具によるVの字状の沈線が格子目状にある。	◦ロクロなで。 ◦底部は回転糸切り。	◦胎土、やや粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、釉は黄緑色。 ◦素地は黄褐色。 ◦古瀬戸灰釉おろし目皿。
	壺	6	13.2	6.0	◦口縁端部は外側に折れ曲げる。 ◦口縁部内面は凹凸が目立つ。	◦ロクロなで。	◦胎土、粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、暗赤褐色。 ◦越前系壺。
	甗	9	27.0	35.8	◦口縁端部は上下に突出する。 ◦体部はくの字状に屈折する。	◦ロクロなで。 ◦底部は篋で成形。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、釉は濃緑色。 ◦外面下半は暗赤褐色。 ◦丹波焼系。
	瓶	11		(5.0)	◦体部外面に3条の沈線あり。 ◦把手が付くと思われる。	◦ロクロなで。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、釉は黄緑色。 ◦素地は灰白色。 ◦古瀬戸灰釉小瓶。
	壺	14	17.2	37.0	◦口縁部は直立して後外面へ弓なりとなる。	◦底部は篋で成形。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、釉は濃緑色。 ◦素地は暗赤褐色。 ◦常滑焼系。 ◦完形。

器種	器形	番号	法量 (cm)		形態の特徴	成形技法の特徴	備考
			口径	器高			
	鉢	15	29.2	14.4	◦内面には1本1本篋で条痕を入れる。下から上へ。	◦ロクロなでの後、丁寧なでを全体に施す。 ◦底部は篋で成形。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、外面は暗褐色。内面は白っぽい暗褐色。 ◦丹波焼系。 ◦1/2残存。
須恵器	鉢	4	30.4	12.4	◦口縁部は厚い。	◦ロクロなで。 ◦底部は篋で成形。	◦胎土、粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、灰色。 ◦兵庫県三田市あたりが生産地か。 ◦完形。
		7		(3.8)	◦口縁部内面に若干のくぼみあり。	◦ロクロなで。	◦胎土、粗。 ◦焼成、堅。 ◦色調、暗灰色。 ◦東播系。
		8		(3.8)			
	甕	13	(34.4)	(7.2)	◦底部片のみ。意図的に丸く割り取る。	◦外面、叩き。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、外面黒灰色。内面灰白色。 ◦瓦器に近い。
	壺	16	11.0	28.6	◦口縁部は直立して後外側へ折れ曲がる。 ◦三耳。	◦外面は縦方向の磨き。 ◦底部は篋で成形。	◦胎土、良。 ◦焼成、堅。 ◦色調、灰色。 ◦ほぼ完形。口縁端部が一部欠損。
瓦器	杯	20	12.0	5.2	◦高台は低く、断面は三角形。	◦内面に粗い磨き。 ◦内底面にジグザグの粗い磨き。	◦胎土、良。 ◦焼成、軟。 ◦色調、黒灰色。断面は灰白色。
鉄器	刀子	12	長 23.2	幅 0.4	◦先端は欠損。 ◦柄の部分は折れ曲がる。		◦錆化著しい。

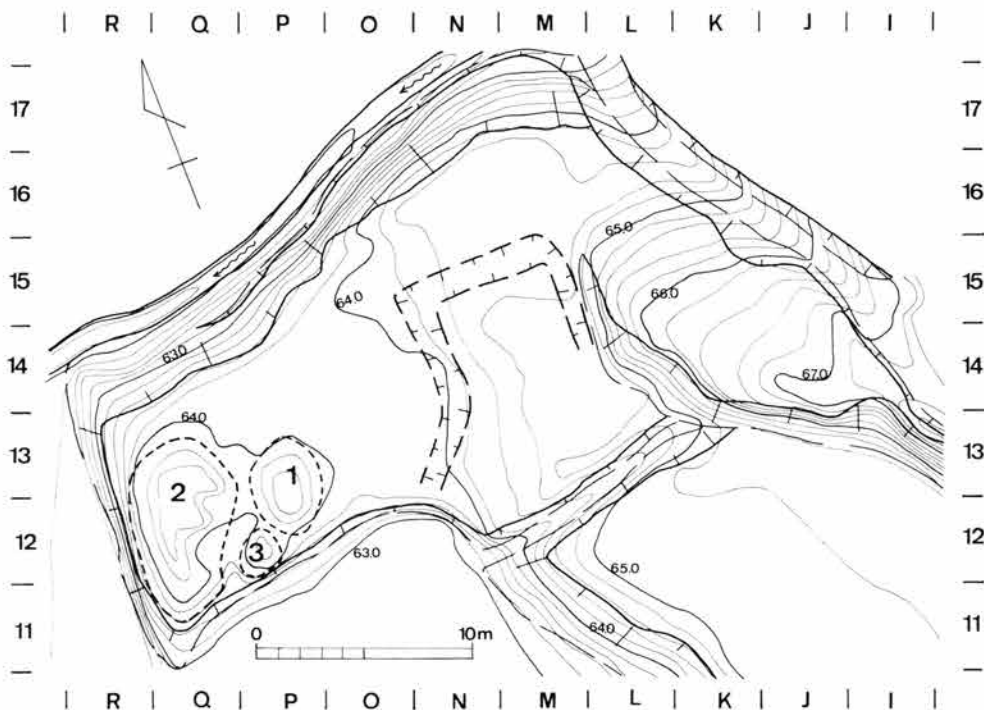
(2) 後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳

1. 遺跡の立地 (第8図)

本遺跡は福知山市大字大内小字後正寺にある。北には大内城^{ひらいじょう}跡のある台地、南には後青寺跡・後青寺古墳のある台地があり、本遺跡は両台地に挟まれた谷地の微高地上に立地する。南北両台地との比高差は、約10mを測る。

本遺跡のある微高地は、山の尾根が東から西に伸びるその先端部に形成されており、尾根を巡る等高線に沿って約15m×40mの平坦面が北から南に開けている。この平坦地の西・南側は、1m程低くなっており、現在田畑として利用されている。北側には小さな谷川が流れている。

調査着手前の現地の状況は、平坦地の西端に高さ約50cmの塚が3基あった。いずれも表土下に礫石が散見され、礫石中に陶器片・五輪塔片が挟まっていた。これらの状況や大内城跡・後青寺跡との地理的な関連から中世の遺跡、特に中世墓と推測した。加えて、平坦地の中央部に若干の凹みがコの字形に巡っており、墓に伴う「拝所」的な建物の存在を予想して調査に着手した。^(注4)

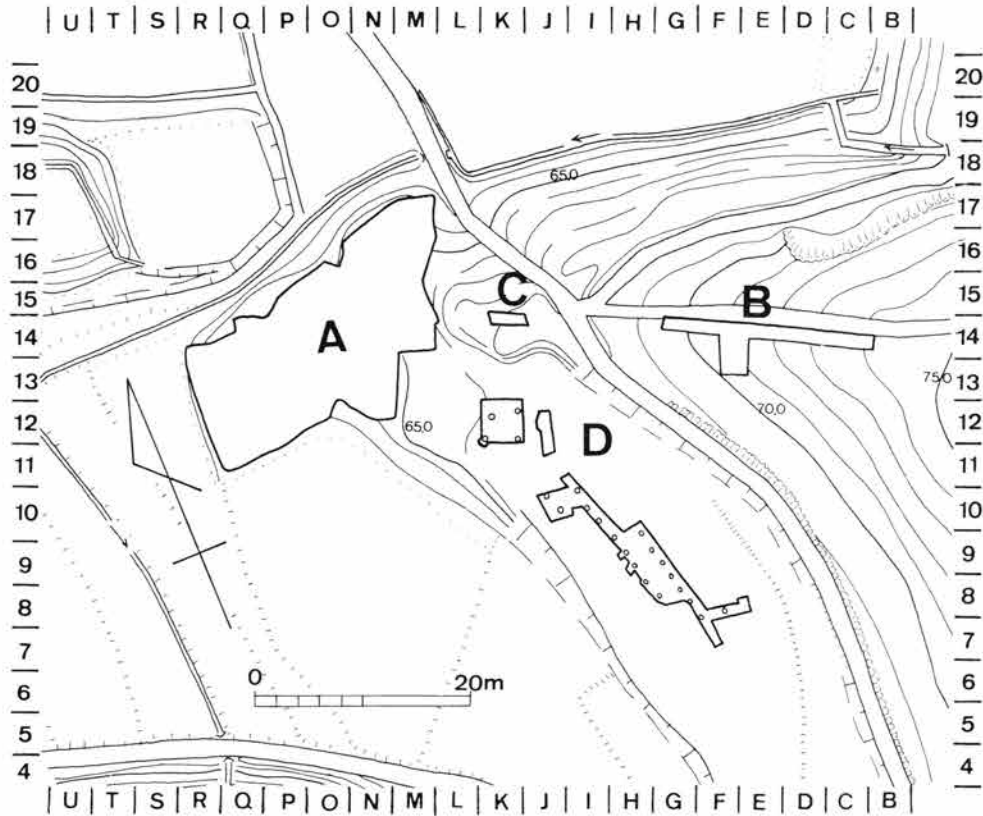


第8図 後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳地形図

2. 調査の経過 (第9図)

まず、現地で観察できたコの字形の凹みを横断するトレンチの設定と、3基の塚の表土剥ぎ・礫石の検出から着手した。トレンチは、土層の観察、遺構・遺物の有無を確認し、順次調査面を広げていった。その結果、平坦地からは、台地上の北辺に沿って集石遺構が3基以上検出できたが、当初予想した建物跡はなかった。塚は、平面実測・断面実測を終えすべて取りはずした。3基の塚が並ぶ中央には、近世の土塚が7基あった。この周囲を掘り下げていくと、横穴式石室を主体部にもつ古墳が埋もれていることがわかったので、併せて調査を行った。この古墳の名称は、この付近の谷名をとり「小屋ヶ谷古墳」と命名した。つまり、後正寺古墓と小屋ヶ谷古墳は同地にありながら、上層と下層の遺構によりその名称が異なるのである。(以上A区)

石室の検出と併行して、東側の尾根上にB・C調査区を南東の平坦地にはD調査区を設けた。B・C区は古墳の有無を確認するため、D区は遺構を確認するためのものである。



第9図 後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳トレンチ配置図

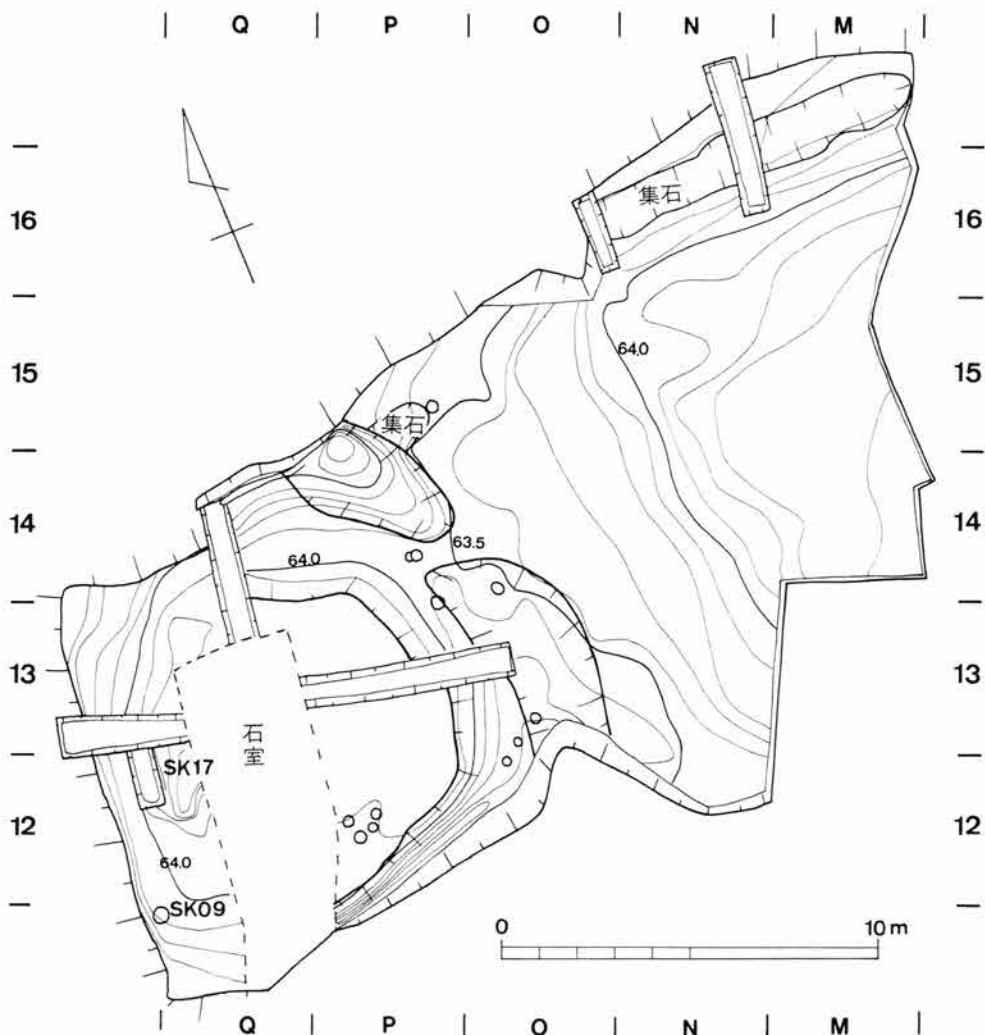
3. 検出遺構

(1) 小屋ヶ谷古墳

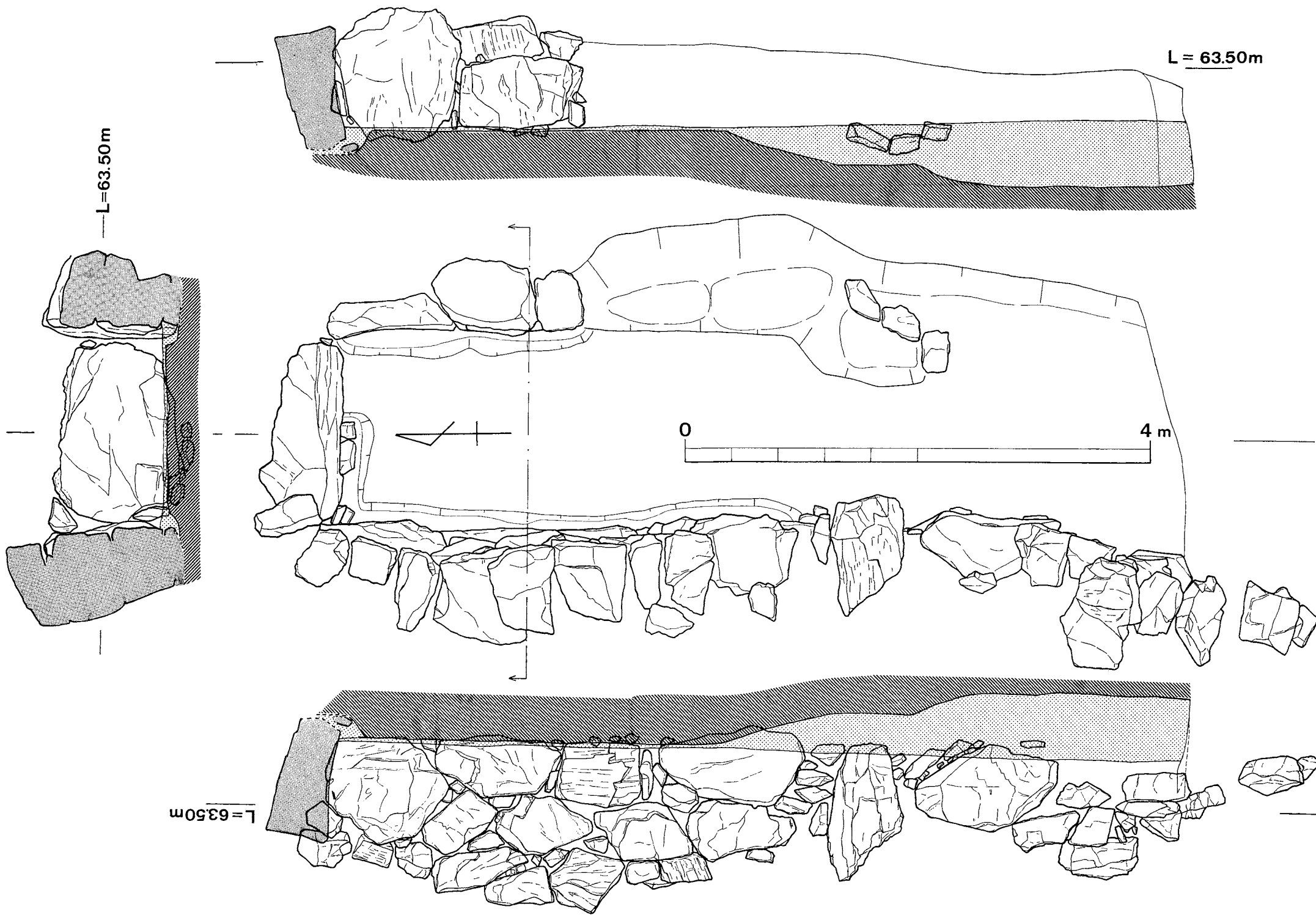
小屋ヶ谷古墳は先述のように、調査地の西端の塚群下層で検出したものである。この古墳と塚との間には、淡褐色土が挟まっており、両遺構はこの淡褐色土で分離される。

① 墳丘 (第10図)

墳丘の残りは悪く、約50cmの封土しか残っておらず、上部は消失している。西・南側は田畑の開墾・耕作により、北側は水路により削平を受けて現形を留めていない。墳丘東側はやや残りがよく、幅約2mの周溝が残存している。周溝の東北部は途切れて立橋をなしている。



第10図 小屋ヶ谷古墳墳丘測量図



第11图 小屋ヶ谷古墳石室实测图

石室中心部と周溝との長さから、径12m内外の円墳に復元できる。

② 内部施設 (第11図)

内部構造は横穴式石室で、石室自体の残りは悪い。東側壁の玄室から羨道にかけて、基底石までの石が抜き取られていたが、その抜き取り痕を検出できた。玄室と羨道の境には30cmの袖部があったことが復元できる。一方、西側壁の玄門部はわずかながら段をつけて組まれているが、袖であるのか否か判断し難い。一応、両袖式と考えておく。

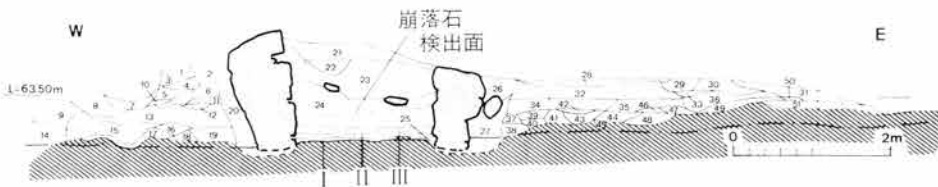
玄室長軸は、ほぼ磁北と平行しているが、羨道の軸線はやや北東に振れている。

天井石や側壁上部の石材が、抜き取られたり崩落したため、石室は本来の高さを留めていない。また、閉塞石や外護列石はなく、南側封土の残りが悪いため羨門は確認できなかった。以上のことを考慮して、石室各部の長さを掲げると、玄室長4.36m・玄室奥壁部幅1.38m・玄門部幅1.07m (推定)・玄室高1.30m以上・羨道長3.0m (現存)・羨門付近幅1.27m (推定)・羨道高1.07m以上である。

基底石には、上積みの石よりやや大きめの0.7~1.3mの石を用いており、奥壁は特に大きな一枚の石で構築している。石室横断面で見ると、上部が下部より若干開いて、逆八の字形を呈している。石材はすべてチャートで、この付近に産するものである。

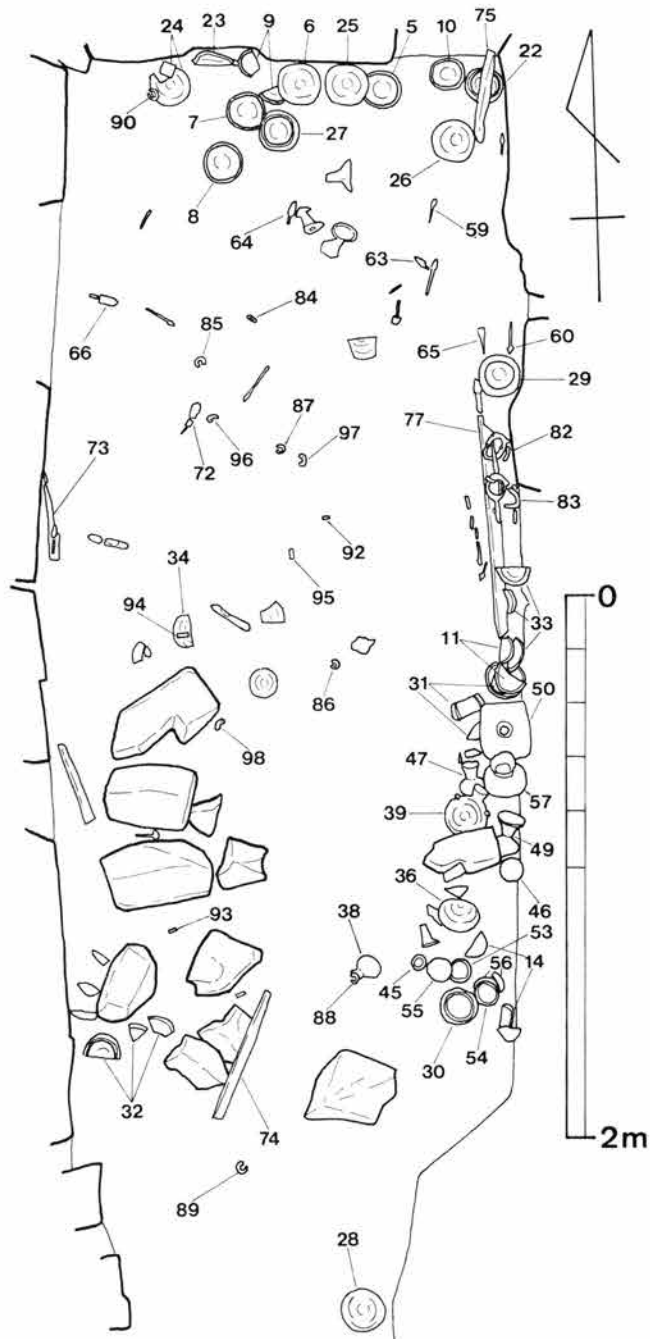
③ 占 地

古墳は、先述のように自然丘陵が東から西に緩やかに傾斜する先端に造築されている。石



第 12 図 小屋ヶ谷古墳墳丘土層実測図

- | | | | |
|-------------------|---------------------|--------------------|------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 2. 茶褐色土 (やや黄色) | 3. 黄褐色土 | 4. 茶褐色土 |
| 5. 茶褐色土 (やや汚れている) | 6. 淡黄褐色土 | 7. 淡黄褐色土 | |
| 8. 暗褐色砂質土 | 9. 茶褐色砂質土 (やや赤色) | 10. 茶褐色土 | |
| 11. 黄褐色砂質土 | 12. 淡黄褐色土 | 13. 黄褐色土 | 14. 茶褐色砂質土 |
| 15. 黄茶色土 | 16. 暗茶色土 | 17. 褐色土 | 18. 淡黄褐色土 |
| 19. 黄褐色砂質土 | 20. 黄褐色粘質土 (礫を多く含む) | | |
| 21. 褐色土 (やや黄色) | 22. 茶褐色土 | 23. 褐色土 (粘質) | |
| 24. 褐色土 | 25. 褐色粘質土 (貼り土) | 26. 暗黄褐色粘質土 | |
| 27. 暗淡色土 | 28. 黄褐色土 (やや赤色) | 29. 暗黄褐色土 | |
| 30. 暗黄褐色粘質土 | 31. 暗褐色土 | 32. 黄褐色土 (やや茶色) | |
| 36. 黄褐色土 | 37. 淡黄褐色土 | 38. 淡黄褐色土 (やや赤色) | |
| 39. 淡黄褐色土 | 40. 黄褐色土 (砂っぽい) | 41. 淡褐色土 | |
| 42. 黄褐色土 | 43. 黄褐色土 (砂っぽい) | 44. 黄褐色土 (やや汚れている) | |
| 45. 黄褐色土 | 46. 黄茶色土 | 47. 茶褐色土 (砂粒多) | |
| 48. 茶褐色土 (砂っぽい) | 49. 茶褐色砂質土 | 50. 暗茶褐色土 | |
| 51. 黄褐色土 | | | |



第13図 小屋ヶ谷古墳石室内遺物出土状況図
(番号は実測図のものと一致)

室のある付近では、旧地形の丘陵の南北幅はかなりせばまっており、玄室は丘陵上に位置しているが、羨道は尾根筋の南側傾斜地に築かれている。羨道の石組を行う前に、厚さ最大57cmの盛土を行い、玄室と同レベルに整地している（第11図）。

玄室部は、4m×4mにわたって地山を10cm程度掘り凹めて平らにし、基底石を据えるところには、さらに20cm程度の深さの壇を掘っている（第12図）。

④遺物出土状況（第13図）

石室自体は、上述のように残りはよくなかったが、石室内遺物の遺存状態は概してよかった。石室内からは、須恵器・土師器・鉄器・装身具や棺台が見つかった。骨は全く検出されなかった。

遺物は玄室内のほぼ全域にわたって検出できたが、完形品ないしそれに近いもの出土地点は、次の4地点に大別できる。

- (i) 奥壁に接して出土した須恵器の一群（5・6・7・8・9・10・22・23・24・25・26・75）
- (ii) 玄室西南部の棺台付近のもの（32他）
- (iii) 玄室東側壁中央部の馬具（82・83）、須恵器（29）、鉄鎌（60・65）などの一群
- (iv) 玄室内南東部の須恵器・土師器（11・14・30・31・33・36・38・39など）

石室内の遺物出土面は4面あり、下層からI～Nとすると、(i)群はI面、(ii)・(iii)群はII面、(iv)群はIII面で検出した。最上層の遺物検出面であるN面からは、77の鉄刀・38の提瓶など完形に近いものが出土しているが、崩落石検出面と一致しているので、後世の攪乱のものと判断した。

(i)～(iv)群は、完形品が多くまとまりをもつこと、一つの群は複数の出土面にまたがって検出されていないことなどから、副葬や後片づけの位置を比較的留めているものと思われる。

(2) 後正寺古墳

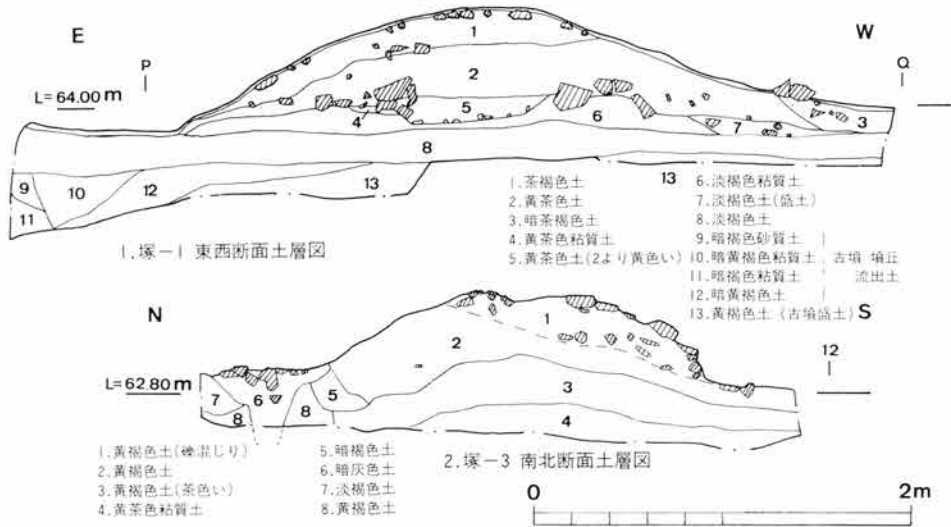
①塚群・土壇群

現地形で見てとれた3基の塚には、1～3のナンバーをつけた（第8図）。

塚1は南北4.6m・東西3.8mと南北に長い楕円形をしており、68cmの高さをもつ。表土を剥ぐと、ほぼ全面に10～40cm大の自然石が葺かれていた（第14図）。この塚は、淡褐色土層の上に造られたもので、淡褐色粘質土の上面に10～40cm大の石を置き、黄茶色土・茶褐色土を盛り上げている。明瞭な内部施設はなかったが、第15図-1の土層5（黄茶色土）が落ち込んでいた。盛土中から骨片や蔵骨器の出土はなく、葺石の間や表土中から寛永通宝が6枚出土した。



第14図 後正寺古墓 塚1・3の葺石検出平面図



第15図 後正寺古墓 塚1・3土層図

塚2はA区の西端にあり、南北8.8m・東西4.8mの細長いものである。塚1と同じく、表土下には自然石が全面に覆われていた。この塚は、下層の小屋ヶ谷古墳の西側壁に沿って盛土されたものである。内部施設はない。盛土内から寛永通宝が出土した。

塚3は、塚1と一部重なっており、塚1より新しくつくられたものである。表面に石が葺かれていたが、塚1とは異なり内部には石がなく、盛土のみであった(第14・15-2図)。

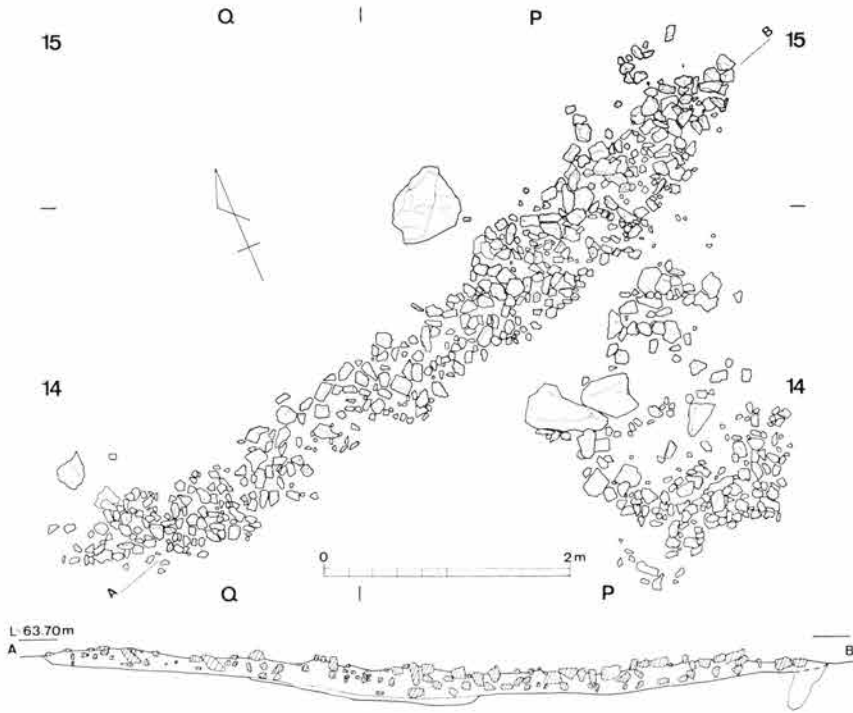
これらの塚群の中央にある凹地と塚2の斜面より、計7基の土塚を検出した。このうち3基は12Q区の塚2の斜面に、4基は13Q区にあり、後者のものは上部に礫を敷きつめ、内部にも多くの礫がつまっていた。12Q区の3基の土塚は、出土土器片より近世のものである。また13Q区の土塚内よりも寛永通宝1枚が出土した。

以上の3基の塚と7基の土塚は近世に築かれたものである。その性格はよくわからないが、銭を置いたりしているので、詣でる対象(詣り墓)として築かれたものと推定される。

②SK17と中世埋納土器(第10図)

塚2の下層より0.78m×1.8m・深さ26cmの土塚を検出した。時期を決定しうる遺物の出土はなく、炭と焼土が混じっていた。この土塚直上には、20cm×30cmの石を6個立て並べた石列があった。SK17は、古墳の墳丘を掘り込んだもので、上述の塚2とは関連がない。

さらに、塚2の東側(12Q区)の削平された斜面の表土近くから、瓦器椀(2個体以上)・黒色土器椀(1個)・須恵器ねり鉢(2個)・皇宋通宝などの宋銭(13枚)が埋納された状態で検出された。掘形は削平されているため検出できなかった。塚2造営以前のものである。この遺構は、SK17とは約2m隔たっているが、この土塚以外に埋納の対象がない。SK17



第16図 集石遺構実測図

の上部構造(列石)・焼土や炭の出土・埋納土器などから、この遺構は土塚墓とそれに関わるものと考えられる。

③集石遺構 (第10・16図)

A区においては、台地の北辺に沿って3か所以上の集石遺構が見つかった。

第16図は15P区・14P区・14Q区で検出された二つの集石遺構である。一つは、長さ6.8m・幅35~45cmの細長いもので、一つは2.2m×2.4mの楕円形をしたものである。断面を見ると、浅く掘り凹めた溝状の掘形の中に石が積みられているのがわかる。底をさらに6cm掘り下げているが、顕著な施設はない。石の間から出土した土器片と、近世の堆積土である淡褐色土層より下層に設けられていたことから、中世の造営と考えている。他に16O・16N・17M区にわたり1か所以上の集石遺構がある。本遺跡近在の洞楽寺古墳では、同様の集石遺構から骨片の出土があるので、本遺跡の当遺構は骨の出土は見なかったが、埋葬に関わる施設と考えられる。^(注5)

④その他

古墳の墳丘西南部に土師皿が多数埋納された土塚がある(SK09)。直径40cm・深さ30cm。

土師皿より南北朝頃のものといえる。周溝内や石室東側にピットが検出されたが、その性格・時期は不明である。

B区は、遺跡東側の尾根筋に1.5m×20mのトレンチを開け、後に東側に2.5m×3.5mの拡張を行った。東西トレンチの最東部から須恵器杯身片1点、拡張部からは、配石と8基のピットが検出され、中国製磁器片・鉄釘・炭化物・焼土が見つかった。土器片より平安(末)頃である。

C区のトレンチは古墳の存否及び土層の観察を行うためのものである。この盛り上がりのうち、50cm～1mが後世の堆積で、地山は東側の尾根から西側の平坦地へと連なる傾斜と一致していた。トレンチ内より須恵器・土師器など数点の土器片が出土したが、古墳の盛土ではないと判断した。

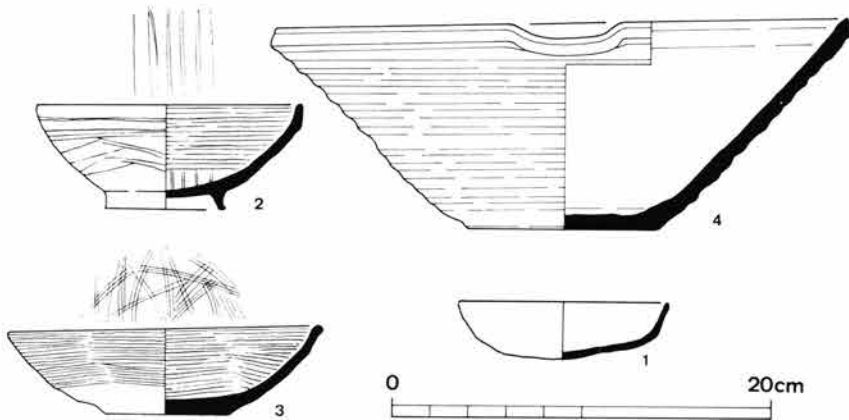
D区は調査地東南部の平坦地のトレンチである。掘立柱建物跡2棟を検出できた。SB01は3間×9間、SB02は1間×1間が確認できた。SB02は、現地形から判断してこの規模以上の建物は建たない。柱穴内より、鉄鎌1・龍泉窯系青磁片・鉄砲玉の出土を見た。中世(末)～近世に属する。

4. 出土遺物 (第17～24図 図版第8～12)

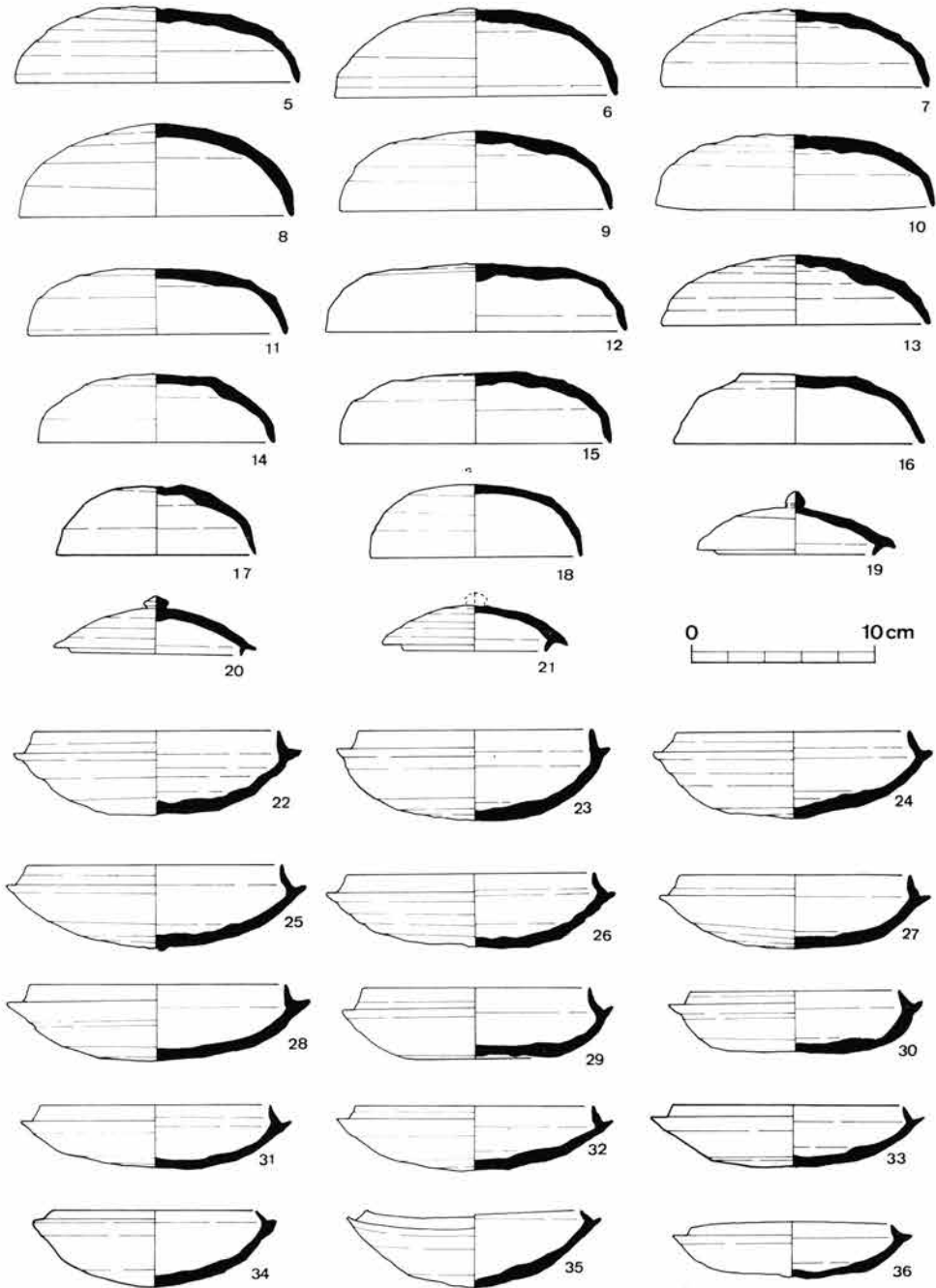
後正寺古墓より、須恵器・土師器・陶磁器片・宋銭・寛永通宝などが出土している。須恵器は大多数が、下層の小屋ヶ谷古墳の攪乱のものである。

第17図-1はSK09出土の土師器皿で、口径10.9cm・器高3.2cm。器形は、いびつである。

第17図2～4は中世埋納土器群で、その出土状況から一括遺物と判断できる良好な資料である。



第17図 後正寺古墓出土遺物実測図



第 18 図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(1)

2は瓦器椀で口径14.0cm・器高5.4cmである。口縁端部が肉厚な丹波型のもので、高台は比較的しっかりとしている。外面には粗く磨きが施されており、内面は丁寧に磨いている。

3は黒色土器椀で、口径16.8cm・器高4.9cm。ロクロによる成形で、底部は回転糸切り痕が見てとれる。外面の体部中央付近より内面全面にかけて丁寧な磨きがなされている。

4は須恵器ねり鉢で、口径30.0cm・器高10.4～11.3cm。全面に淡灰色を呈しているが、口縁端部は黒灰色を呈する。東播系のものである。内面には使用痕が見てとれる。

2～4の土器は、瓦器椀の年代観より平安末（12c後）^(注6)の実年代が与えられる。

小屋ヶ谷古墳より、杯身（16個）・杯蓋（18個）・高杯（2）・甌（3）・平瓶（2）・横瓮（1）・提瓶（3）・無頸壺（1）・無頸壺蓋（1）・甕（1）・蓋（杯身か、2）などの須恵器、椀（4）・長頸壺（1）・高杯（1）などの土師器、管玉（7）・勾玉（3）・金環（7）・小玉（2）などの装身具、馬具（轡2・革金具・鉸具）、鉄鏃（18本以上）、鉄刀（4）、鉄矛（1）などの鉄器が出土している。

杯身・杯蓋（第18図-5～36・第19図-37）は田辺昭三氏の編年^(注7)によるとTK43・TK217に相当する。器形・手法よりそれぞれ6タイプ、7タイプに分類しうる。

杯蓋第18図-5～8の天井部は約 $\frac{1}{2}$ にわたって回転篋削りを施して丸く調整されている。口径に対して器高が高く、全体に「深い」もの。口径14.3～15.2cm・器高4.2～5.0cmである。共にi群内出土のものである。

第18図-9～11は、5～8に比して天井部の丸味がなくなり平坦に仕上げられ、やや浅いものである。口径は14.0～15.0cm・器高3.7～4.3cm。

18図-12は、9～11と形態・手法において同じだが、口径が大きい。口径16.2cm・器高3.7cm。

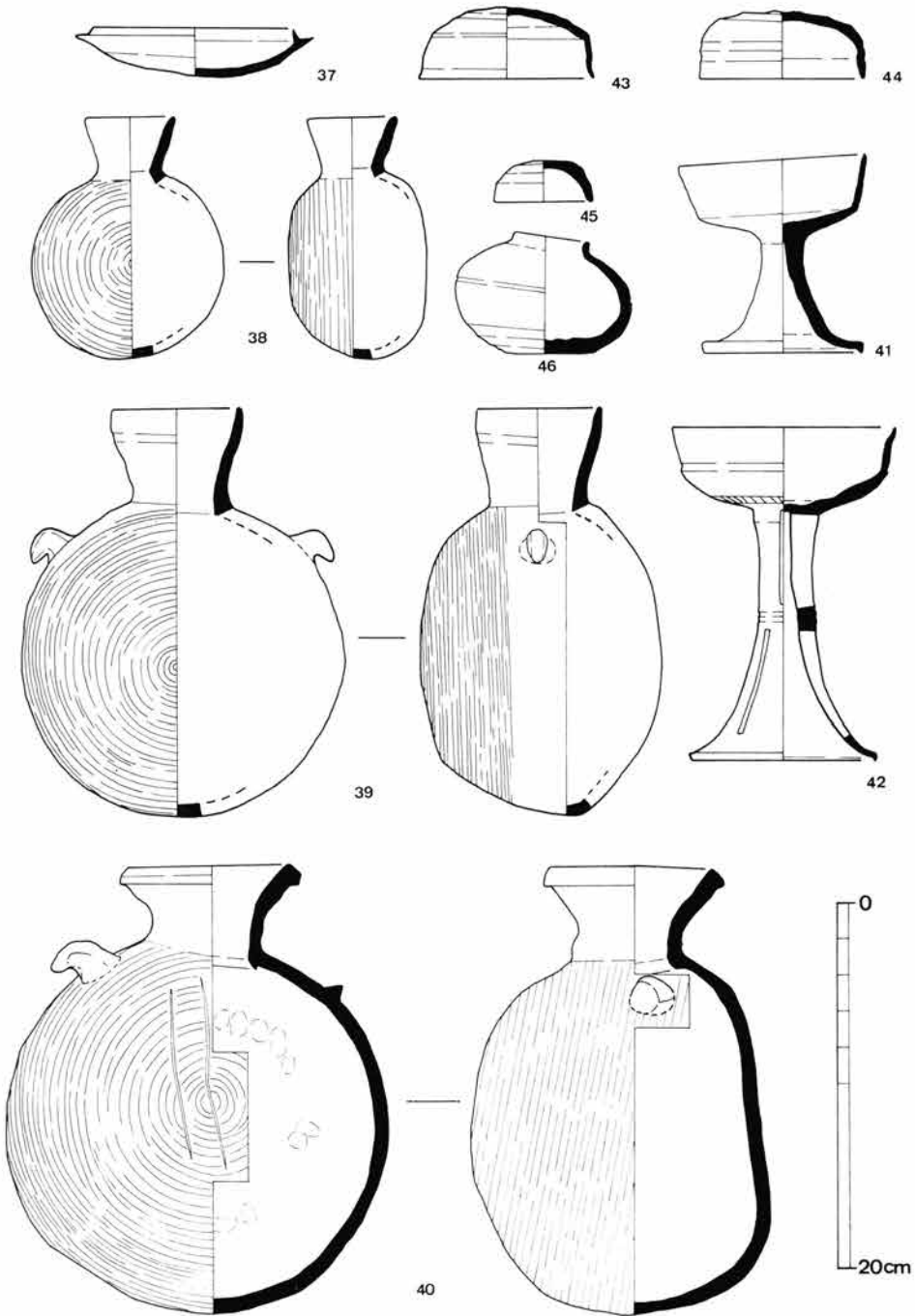
第18図-13・14は、天井部がやや丸く、回転篋削りで調整を行っている。形態は、やや浅い。口径12.8～14.6cm・器高3.7～3.8cm。

第18図-15・16は、天井部が平坦で、調整に篋削りを用いていない。口径11.0～14.1cm・器高3.8～4.3cm。

第18図-17・18は、口径が小さく、篋削りで天井部を仕上げていないもの。17は口径10.9cm・器高3.7cm、18は口径11.5cm・器高3.7cm。

第18図-19～21は蓋にかえりがつき宝珠つまみがつけられるもの。口径7.8～9.3cm・器高2.6～3.4cm。

第18図-22～25は、たち上がり部が上部に大きく突き出し、しかも器高が深いものである。底部は回転篋削り調整を行っている。口径は12.8～13.9cm・器高4.5～4.8cm。



第 19 図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(2)

第18図-26～28は、22～25と比して、器高が浅くなったもので他の要素は同じである。口径12.6～14.8cm・器高4.0～4.2cm。

第18図-29・30は、底部が平らになっているものである。底部はやはり篋削りで、立ち上がりが大きいもの（29）と、やや小さいもの（30）がある。口径は22～28と比べてやや小さい。29は口径12.2cm・器高3.9cm、30は口径11.3cm・器高3.3cm。

第18図-31～33は、立ち上がり部がやや小さいものであり、器高も口径に比してやや低くなり、浅い感じを受けるもの。底部は回転篋削り。口径12.4～12.8cm・器高3.4～3.5cm。

第18図-34・35は、口径に比して器高が高く、深いものである。加えて、たち上がりが極めて小さい。底部の篋削りは省略されている。34は口径11.0cm・器高4.3cm、35はいびつで口径13.9～14.9cm・器高4.4cm。

第18図-36・第19図-37は、たち上がりが極めて小さく、また口径・器高も小さくなり、全体のプロポーションとしては浅いものである。篋削りはなされていない。36は口径10.9cm・器高4.1cm。37は口径10.9cm・器高2.3cm。

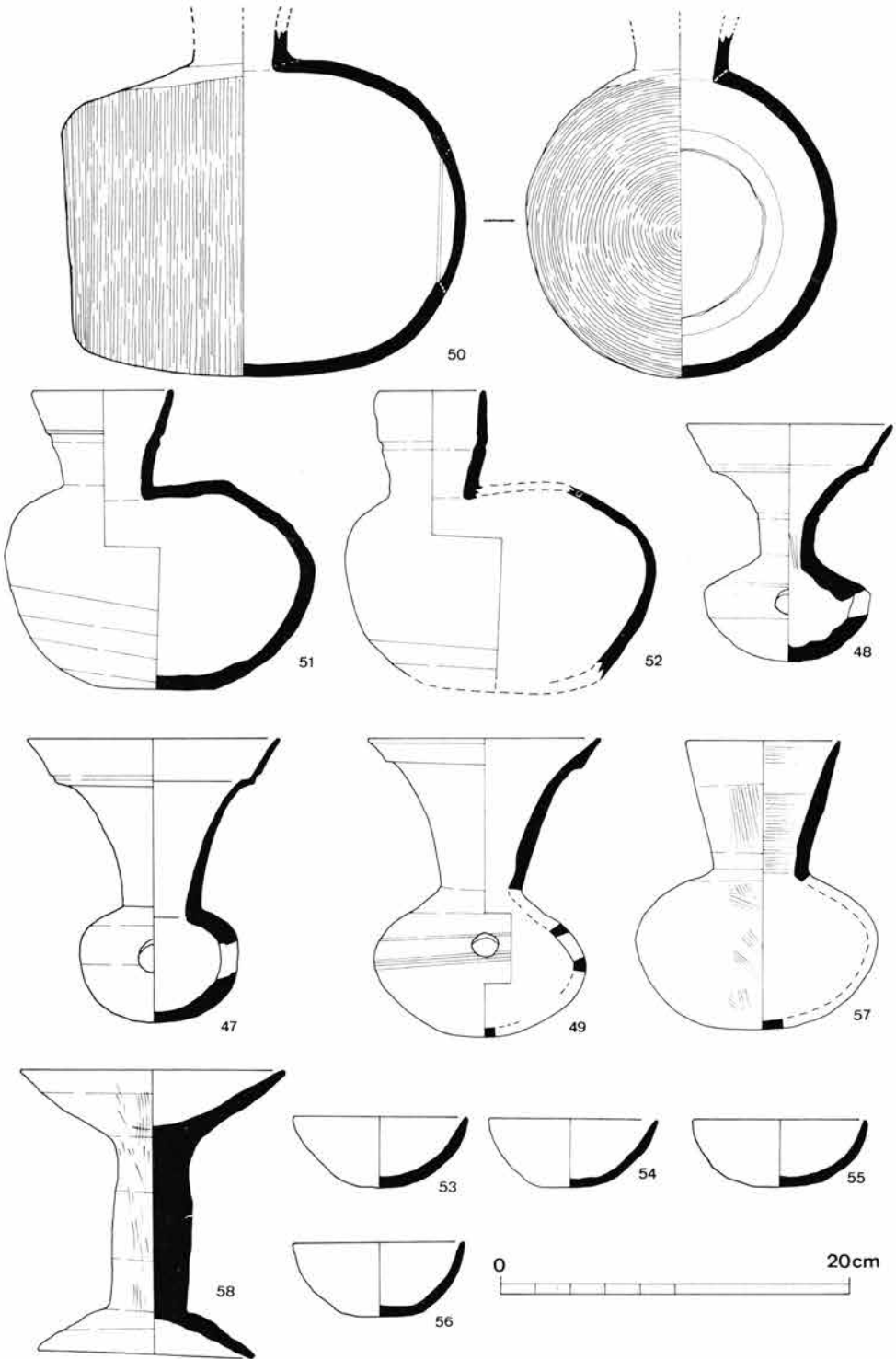
第19図-38・39・40は提瓶で、ほぼ完形に近い形に接合できた。38は口径4.8cm・器高13.1cm・腹径10.5cmと、39・40に較べて小型である。把手はつくられていない。39は口径7.0cm・器高22.3cm・腹径16.1cm、40は口径8.8cm・器高24.8cm・腹径20.6cmで共に鍵状の把手が付けられている。

第19図-41・42は高杯である。41は、短脚のもので口径10.2cm・器高10.5cm、42は、長脚二段すかしのもので口径12.2cm・器高18.2cmを測る。共に約2/3残存している。

第20図-43・44は何らかの蓋と一応考えているが、杯身である可能性もある。43は、口径9.4cm・器高4.0cm、44は、口径8.9cm・器高4.6cmで、共に天井部は回転篋削り調整をしている。

第20図-45・46は、ミニチュア無頸壺と蓋である。共に完形であって、組み合わせあって出土はしていないが、焼成・胎土・色調が類似しており口径もあう。また、壺の頸部には蓋を重ねて焼いたためと思われる赤褐色の帯状の輪がめぐっているので、一組と考えられる。

第20図-47～49は甗である。47は、体部下半が篋状のもので不定方向に削って丸く仕上げている。口頸部はラッパ状に大きく外反する。口径14.6cm・器高16.3cm・最大腹径9.1cm。48は、頸部が直立し、口縁部に向けて大きく開くもので、頸部内面には、頸部をしほり込んだ痕跡が残っている。体部下半は不定方向の篋削りを施し、丸く仕上げている。口径11.8cm・器高13.5cm・最大腹径9.6cm。49は、口頸の形態は47に類似しているが、腹部が張り出ししており口径とほぼ同じである。体部にはところどころ横方向の掻き目が見られ、その上をな



第 20 図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(3)

でて消している。口径13.4cm・器高17.1cm・最大腹径12.1cm。

第20図-50は、横瓮で全体にロクロを利用した搔き目が施されている。口縁部は欠損している。体部と頸部の境は、なでにより搔き目が消されており、体部の調整が行われた後に口頸部が接合されたのがわかる。全長29.6cm・器高14.7cm（現存）・腹径18cm。

第20図-51・52は平瓶で、51は口径8.0cm・全長17.8cm・器高17.1cm、52は口径6.0cm・全長18.0cm・現存器高11.5cmである。

第20図-53～58は、石室内出土の土師器で、総点数6点と須恵器の出土点数と比べてその割合は小さい。53～56は土師器の椀で、すべて第Ⅲ面iv群内のものである。口径は9.7～9.8cm、器高は3.8～5.0cmである。57は長頸壺ではほぼ完形のものである。全体に刷毛目調整で、口縁端部・頸部と体部の接合部は横なでで整えている。口径8.7cm・器高16.6cm・最大腹径13.9cm。58は高杯で、口径15.1cm・器高16.5cm・底径12.4cm・柱径4.5cm。

第21図-59～72は鉄鏃である。すべて有茎のものである。59～62は逆刺つきの三角形形式のもので、尖根式に属する。63は、逆刺のつかない三角形形式である。64～66・72は平根式に属し、66・72は逆刺のつくものである。67～71は細根式の鉄鏃である。^(注8)

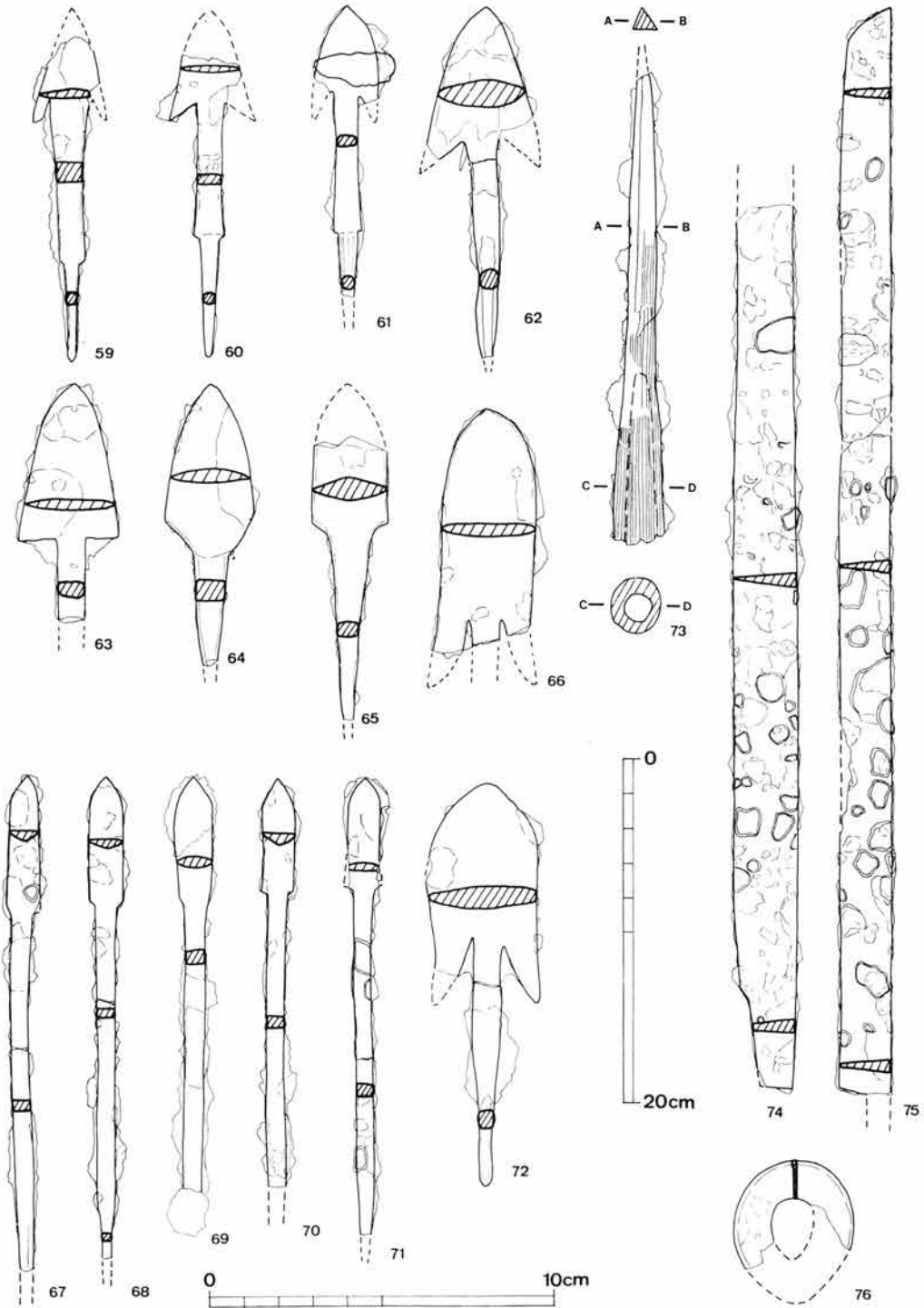
第21図-73は、鉾先であり先端部は残っておらず、また袋部には木質の付着のため、原形を残しているか否かわからない。現存長27.5cmである。断面の刃の部分は三角形をしている。袋部内には木質の痕跡は見出せない。

第21図-74・75、第22図-77は直刀である。すべて平造りのもので、刀身断面は二等辺三角形を呈する。74は先端部がなく、現存長51.6cm・幅3.8cm、刀背の厚さ0.9cmである。75は茎部が残っていない。現存長（刃わたり）63.0cm・幅3.0cm、刀背の厚さ0.7cm。77は最も長大なものである。茎部に不明鉄製品が付着しているが、刀に関連するものか、または長年月の間に銹化して付着してしまったのかかわからない。茎部がここで折損しているか否か確証がない。現存長97.2cm・幅3.6cm・刃わたり81.8cm、刀背の厚さ0.8cm。茎部に目釘穴がつけられている。

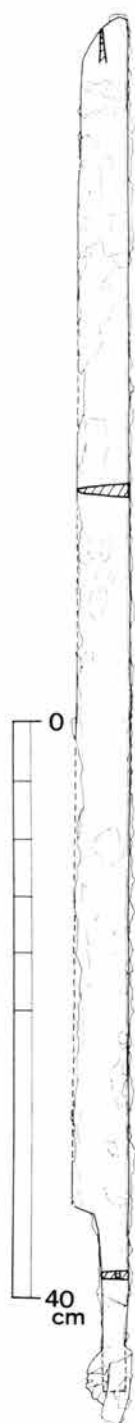
第21図-76は鏝であり、約1/2残存している。これは奥壁の東側、77の直刀の横から見つかったものである。

第23図-78・79・81は鉸具で、78・79は1/2～1/3程度しか残存していないが、鉸具と推定した。81は残りがよいものであり、ほぼ全体がわかるものである。すべて馬具の一部と考えられる。

第23図-80は飾金具で、3.0cm×3.2cm・厚さ0.2cmの鉄板に4本の鉸がとり付けられている。鉸の残りは概して悪く、1本のみがほぼ現形を留めるものと思われる。その鉸は、外方に向



第 21 図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(4)



第22図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(5)

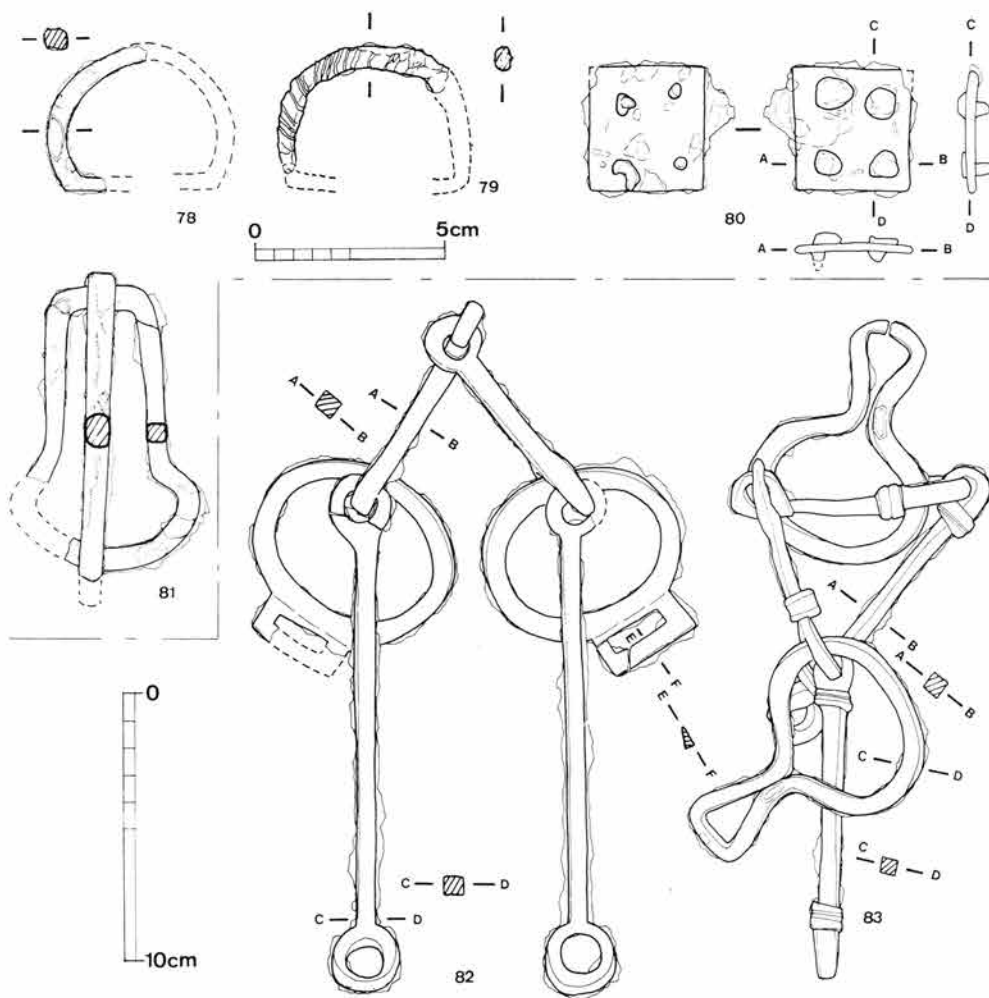
けて曲げられており、装着時の状況を示すものと考えられる。鉾の全長は1.2cmを測る。

第23図-82・83は轡で、共に鉄製素環鏡板のもので、ほぼ完存している。82は長径7.5cm・短径6.6cmの楕円形を呈した鏡板に、1.7cm×3.6cmの長方形をした立間が付付けられている。立間の断面は内側に向かって三角形をなしている。銜は中央の環で連結された二連式であり、その長さ16.3cmを測る。他方の銜の環は鏡板と引手に直接連結されている。引手の長さは18.8cmである。錆化がすすんでおり、引手壺・引手・銜の環のつくり、立間と鏡板の接着は不明である。83は、82より一回り小さい。立間と鏡板は、1本の鉄棒を曲げてつくっている。図の上方にある立間部で鉄棒が途切れているが、これは本来この位置に鉄棒の両端をもってきているのか、長い年月の間に割れてしまったのか不明である。銜の構成や鏡板・引手・銜の連結は、82のものと同じである。83は、環のつくりがよくわかり、鉄棒を曲げて端をそれ自体の鉄棒にまきつけて環をつくるものである。鏡板の長径7.5cm・短径5.5cm・立間の長さ4.5cm・最大幅2.6cm・銜の長さ8.3cm・引手長12.7cmである。

82・83共に錆化しており、使用痕は観察できない。また、これらの轡に皮・布・木等の付着は見られない。

第24図-84～90は金環である。84は径2.9～3.1cmで厚さ0.5cm。85は径2.8cm・厚さ0.8cmで、内側に金箔が残存している。86は直径2.3cm・厚さ0.8cm、87は径2.2cm・厚さ0.75cmで、共に金箔が全面に残存していて、残りが非常によいものである。88は径2.5～2.7cm・厚さ0.8cmで、89は径2.7cm・厚さ0.6cmで、共に内側に金箔が残存している。90は全体に残りが悪く、径2.6～2.8cm・厚さ0.8cmである。この耳飾類は、すべて石室内より出土したが、対になって検出されたものはなく、後世に動かされて原位置を留めているものは少ない。

第24図-91は小玉である。径0.9cm・厚さ0.5cmで、磨滅が著しい。材質は不明である。石室内より、他に一点小玉が出土している。



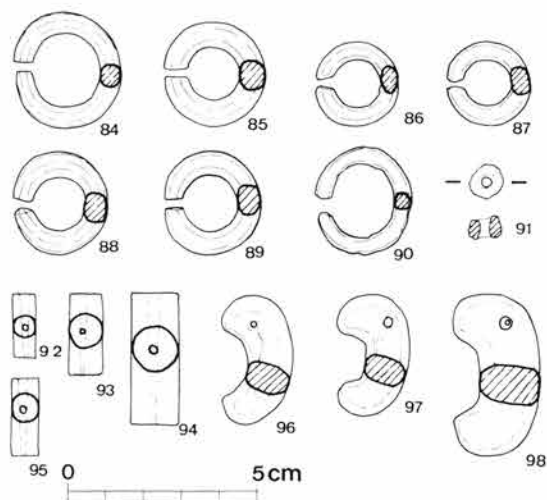
第23図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(6)

第24図-92~94は管玉である。すべて濃緑色の碧玉製のもので、一方より穿孔を行っている。92は径0.6cm・長さ1.7cm, 93は径0.9cm・長さ2.2cm, 94は径1.2cm・長さ3.5cm, 95は径0.7cm・長さ2.0cmである。

5. ま と め

今回の調査により判明した当遺跡の変遷を述べたい。

本遺跡は、弥生式土器や古墳時代前・中期の土器を伴わないことから、小屋ヶ谷古墳の造管が、人的な利用の最初であるといえる。石室内出土の土器より、6世紀(後)に築造が行われ、以後7世紀(前)まで追葬が行われた。次いで、石室内埋土上層中に平安時代(末)の土器



第24図 小屋ヶ谷古墳石室内出土遺物実測図(7)

が埋納されていたことから、少なくともそれまでには石室の破壊が行われたと考えられる。天井石が石室内に落ち込んでいないこと、側壁石の崩落面が、第Ⅲ面と大きなレベル差がないことから、最終の追葬から隔たりのない時期に、天井石や側壁石の一部の抜きとりを契機に、石室内への土砂の流入が一層進んだといえよう。

平安時代(末)には、墳丘の西側に墓が造られ、土器の埋納が行われて

いる。墳丘西側は、検出時と大差のない状態であったと考えられる。東側は、どの程度削平を受けていたかよくわからないが、少なくともまわりと比べて若干の高低差はあったものと思われる。

南北朝～室町頃には、遺跡の北縁に集石が行われ「墓所」的な利用が行われていた。加えて、墳丘西南部のS K09内や、墳丘の東南部に土師器皿の埋納を行っている。

中世(末)～近世においては、遺跡の東南地区に、掘立柱建物が建ち並んでいた。大内城(注9)跡や後青寺跡(注10)との関連から、「山城」の一部としての建物群と考えられる。墳丘はここには、ほとんどまわりの地形からは判別しえないまでに削平をうけ、また周囲の堆積も進んでいた。

近世になると、再び石室の破壊が行われた。今回のものは、前の破壊より徹底したもので、基底石まで抜きとるものであった。そして、その上に当初見られた3基の塚や、土坑を穿ち、現在に至った。

今回の調査により、下層から古墳が検出され、ほぼ全時期にわたり、墓所として利用されていたことがわかった。また、近畿自動車道建設の事前調査だけで、当大内・宮地域では4基の古墳調査が行われたが、古墳後期における群集墳の展開に関して、一つの資料を与えるものとなったと思う。また、今回の報告では、中・近世の資料の整理がほとんど行えなかったが、次回の報告までには、今回の欠を補うものにしたい。(岩松 保)

(3) 洞楽寺古墳

1. はじめに

洞楽寺古墳は、洞楽寺裏の台地端にある円墳である。調査前の地形測量では南北16m・東西14m、墳頂部と西端部の比高差2.5m、同じく東端部との比高差1.5mであった。墳丘の中央部には北東から南西方向に幅4m・長さ7mの盗掘坑が大きくあいていた。

まず、道路基準杭の内の2点（S T A 365+00とS T A 365+20）を軸とし、4mの方形区画を設定した。この軸線は磁北に対して8度東に偏している。南北軸をアルファベット、東西軸を数字で標示し、4m方形区画の南東隅の標示で地区を表わすこととした。この後、墳丘とその周辺の測量を行った。完了後、墳丘の腐植土を除去し、石室内部の崩落土も除去し始めた。

この段階で墳頂部から須恵器高杯(第33図7)が出土した。また石室前庭部東から銀環(第33図16)や須恵器片が出土した。さらに石室内部の崩落土には13・14世紀頃の土師器鍋片が包含されていることが判明し、崩落土中からそれ以外の土器が出土しなかったことから、盗掘坑(実際に盗掘したかは不明)は少なくとも中世以降の所産であることが判明した。横穴式石室の石材は僅かに奥壁下部1石、東側壁の下段2石、西側壁の下段1石が遺存していたのみであった。なお棺台と思われる石が並んだ形で検出され、奥壁沿いに須恵器杯身と蓋が



第25図 調査位置図

原位置のまま発見されたことにより、初期の葬法については一定の情報を得ることができた。

墳丘周辺の調査では、南部で五輪塔の一部や骨片を発見し、南から西にかけて古墳の裾を巡る形で石列も発見した。東側から北側にかけては周濠を確認したが、この埋土上面で時期不明の道を検出した。道は墳丘東部から山へ登り、約50m離れた湧水地点へ続いていることが判明した。道の形状は幅1.2mほどで両端に灰色粘土を埋めた幅30cmほどの溝を掘り、その上に山石（チャート）を敷き並べていた。これは村人が清水を求めるために造作した道であろう。

墳丘の東側、周濠中に中世の焼土坑1基、同北側で中世の墓2基を確認した。

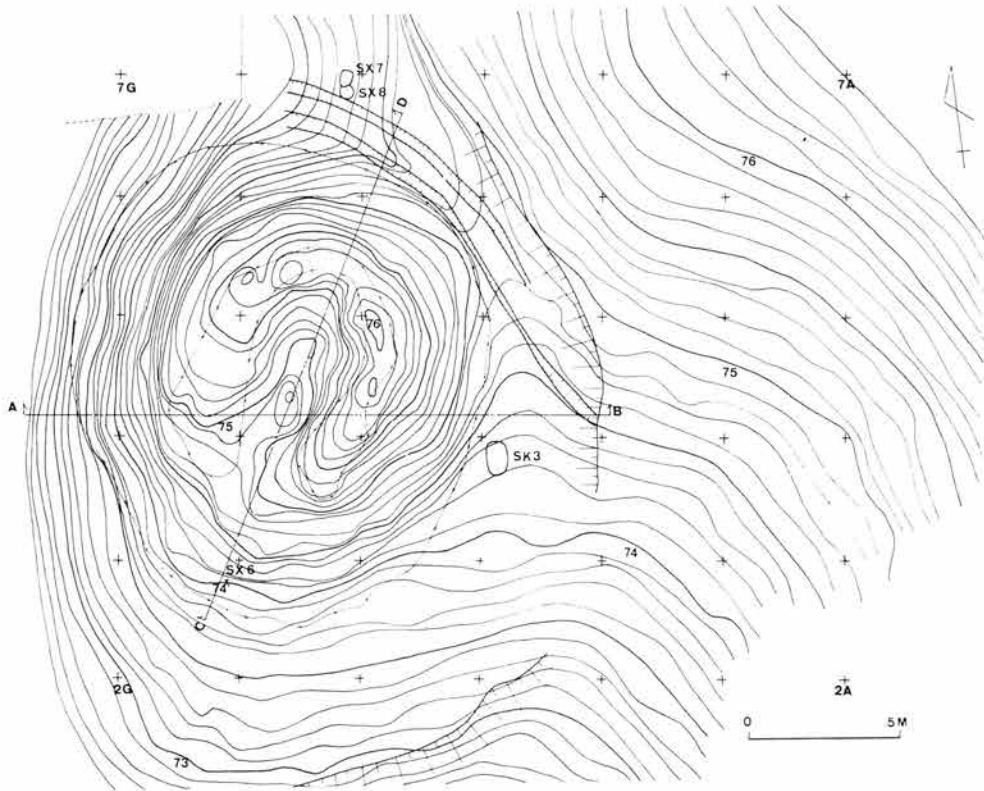
2. 検出遺構

まず古墳に属するものから述べる。横穴式石室は前述のとおり、ほとんど破壊されていた。かろうじて奥壁の幅が1.2mで、壁は2石程度を積んで構築していたことが確認できた。このように遺存状態は良くなかったが、墳丘が高く遺存しており、古墳の構築についてはある程度の推測が可能となった。

古墳は西へ5度傾く緩傾斜地に石室部分と墳丘東部を設定し、墳丘西部は10度傾く地点（台地縁辺）にまで延び、下から見上げると少ない土量で大きく見える造作を行っている。奥壁部分は元来若干高かったようで、地山を約80cmほど掘り下げている。前庭部付近は余り削っていないようである。

地山は一定ではなくシルト質や粘質土が玄室部分にあり、硬い砂質土が羨道部で認められた。以上のように墓地の選定は台地端の若干高まった所に決められた。そして横穴式石室部分は若干削平され、最初の石を据えるため、穴を掘り埋めたことが確認できる。但し、これらの穴は玄室部分のみで、羨道部分は地山の関係から識別が難しく、確認できなかった。

一段目の石を据えた後、封土が外側に盛られた。大体15cm程度の厚さずつ土をつき固めており、石の裏側から墳丘外の方で土は盛られた。特に石室付近はしっかりと土を固めたようであるが、天井石を載せた位置より上は、比較的簡便に土を盛っており、このため周濠が早い時期に埋没したようである。なお墳丘の東部での断ち割りによって、天井石を載せた段階で墳丘の一部に穴を掘り、須恵器甕（完形ではない）を埋納したことが確認できた。これは、石室造作終了時に行われた祭祀遺構（SX10）と言えよう。その後墳頂部まで土を盛り上げたが、この時点で祭祀が行われたかどうかは不明である。前述した墳頂で発見した須恵器高杯は、中村 浩氏編年のI-4・5段階^(註12)で、古墳内遺物とは大きな開きがある。この土器をもって祭祀の執行を言うことはできないが、古墳築造時に土を得るために破壊した先行の遺構があり、これを鎮めるために破壊した遺構の土器を使用した可能性は否定できない。こ



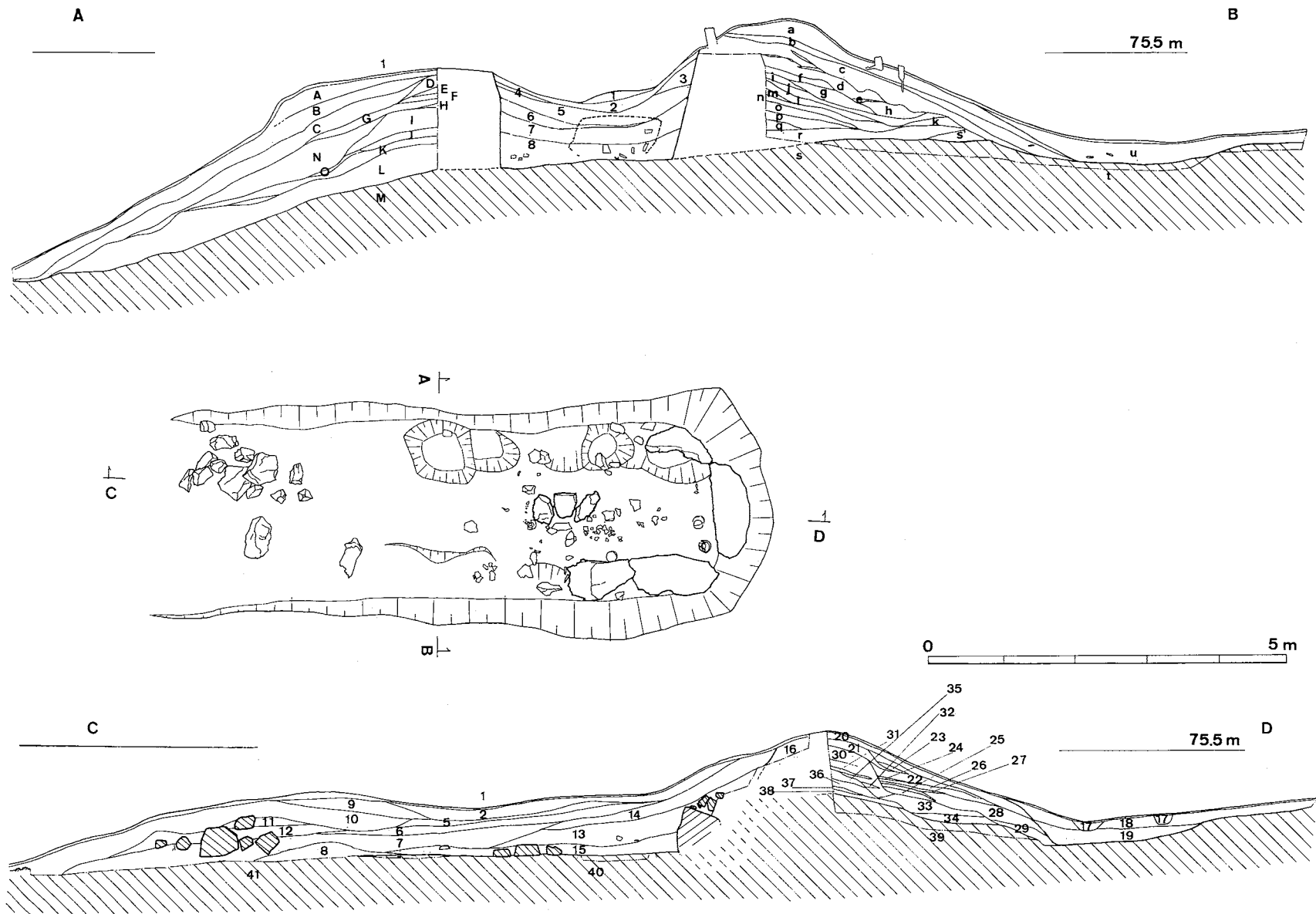
第26図 調査地測量図

これは盛土に不純物（石や土器など）を一切含んでいないことと、古墳の北方20m地点で竪穴式住居跡を検出し、その付近から出土した須恵器は中村編年のⅠ-5～Ⅱ-1段階のもので、古墳に先行してこの地に生活していたことが判明したことによる。これについては洞楽寺2・3号墳の調査の項を参照されたい。

古墳の外形が完成し、いよいよ遺体が安置される。遺物が集中する高さの相違から少なくとも2回の埋葬があったと思われる。

(1) 第1次埋葬

奥壁東部で完形の須恵器杯身が蓋を被せた状態で2個体（第33図5・6）検出された。これは地山直上であり、原位置を保った状態でもあり、第1次埋葬の際の供膳具と考えられる。この同一レベルに棺台と思われる石が3個置かれていた。数が少ないので、かつては奥壁付近にまであったと思われる。棺の東側にも原位置を保った須恵器杯身が1個体発見された。また、棺寄りの所では土師器高杯が2個体（第33図8・9）バラバラになった状態で発見された。これらは位置的に見て棺の中もしくは上に置かれていたものであろう。つまり第1次



第27図 墳丘断面・石室平面図

A—B断面

黄褐色粘質土：A・B（粘性弱）・C（もっとも粘性弱）・a・c・d（白っぽい）・f・h・i，淡褐色粘質土：E・F（桃色斑）・G（粘性弱）・H（白っぽい）・I・L・N（ガラつく），b・g・k・l・n，淡桃色土：D，赤褐色粘質土：J（灰白色粘土斑）・P，e・j・m，淡褐色粘土：K（桃色斑），赤褐色混礫土：M（粘質），暗褐色土：O，淡赤褐色砂質粘土：O，淡赤褐色砂質粘土：O，淡褐色砂質粘土：P・t（地山），青白色粘土：q，赤褐色砂質土：Y，青白色砂質土：S，

C—D断面

腐蝕土：1，暗褐色土：2・12・16・19・20・29，淡褐色粘質土：3～6・14・22（白色土・褐色土斑）・23（やや明るい）・24（褐色土斑）・25（赤褐色土斑）・26・27（白色粘土斑）・28・30・34（白色粘土斑）・36・38（白色粘土斑），黄褐色粘土：7，淡褐色砂質粘土：8・3・15（粘性強），暗黄褐色土：9，黄褐色土：10，黒褐色土：11，灰色粘土：17，淡暗褐色粘質土：18，明褐色粘質土：21，灰褐色粘質土：31・32，淡褐色粘土：33，桃褐色粘土：35・37，赤褐色シルト質粘土：39，青白色粘土：40，赤褐色砂質土：41，

埋葬は奥壁から2.6 mの範囲で行われ、棺の北側と東側に須恵器杯身を配し、棺の中、もしくは上には土師器高杯を置き、供膳具としていたことが判明した。なお棺台の南側で銀環1個、前述した土師器高杯の辺りでも1個検出した（第33図15・17）。これらは大きさが同じなので一対のものであろう。遺体はスペースを考えれば1体のみであったろう。なお奥壁と東側壁との間で先端を上にして鉄鏃2点（第33図11・14）が発見された。靱に入れていたかどうかは不明である。さらに西側でも鉄鏃1本、鉄刀子等が発見された。

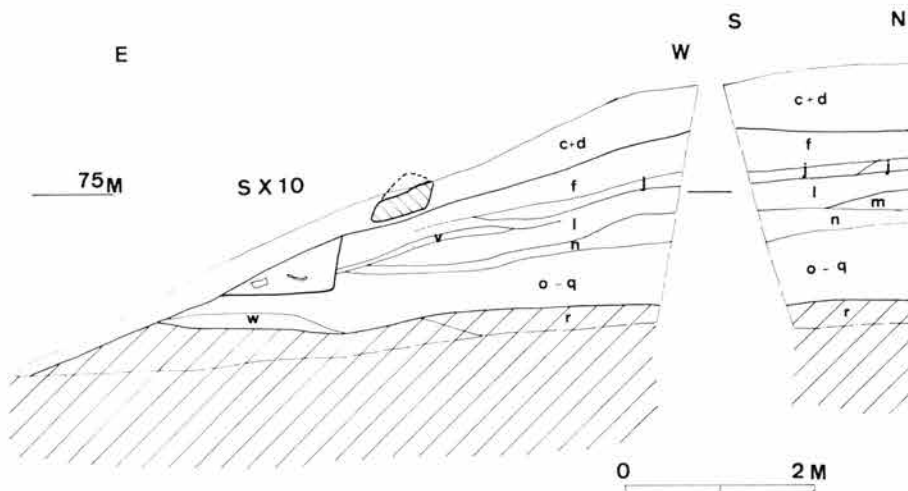
(2)第2次埋葬

棺台の上面から上が第2次埋葬面である。奥壁に近い淡褐色砂質粘土層（第27図土層13）のみがこれに対応する。これより上は中世以降の土層である。出土遺物は原位置を保ったものではなく、第1次埋葬に伴う棺台の南西上面で銀環1個（第33図16）を検出し、奥壁の西南で鉄刀子4片（2振り）を検出した。上記の銀環と対となるものが前庭部東側の表土層から見つかったことから、ほとんどすべてにわたって攪乱されたことが判明した。

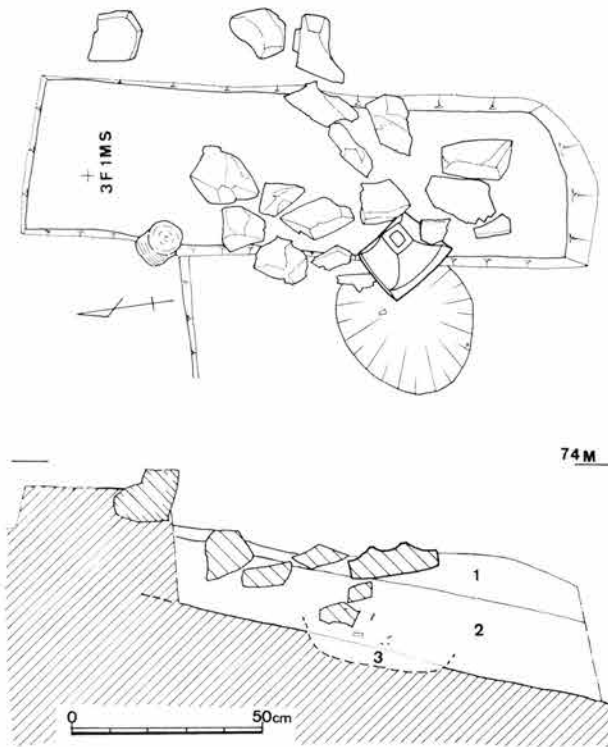
以上のように、第1次埋葬については若干ではあるが原状を復原することができたが、第2次埋葬については、ほとんど原状を知ることができなかった。なお、いずれも骨は数片を拾うことができたのみであった。

(3)前庭部

前庭部には石室から扇状に遺物が散乱していた。特に東側に多く集まっていた。これは石室を破壊した際に内部から投げ出されたもので、特に前庭部で祭祀に伴うものは確認できなかった。



第28図 SX10 断面図



第29図 SX6 実測図

(4)墳丘内

墳丘の東部で検出された祭祀遺構SX10は、図示した断ち割り部の南側50cmにある。土壇は墳頂部で深さ30cm、水平な底面なので周濠側は深さをもたない。埋土は暗褐色土で、中央に須恵器甕を埋納していた。これは、石室の天井石を置いた段階の土層から切り込んでおり、横穴式石室を組み上げた時の所産と言えよう。つまり、これは直接には古墳被葬者及びその家族に関係はなく、石室を組み上げた人々の行為に帰因するものであろう。したがって石の技術

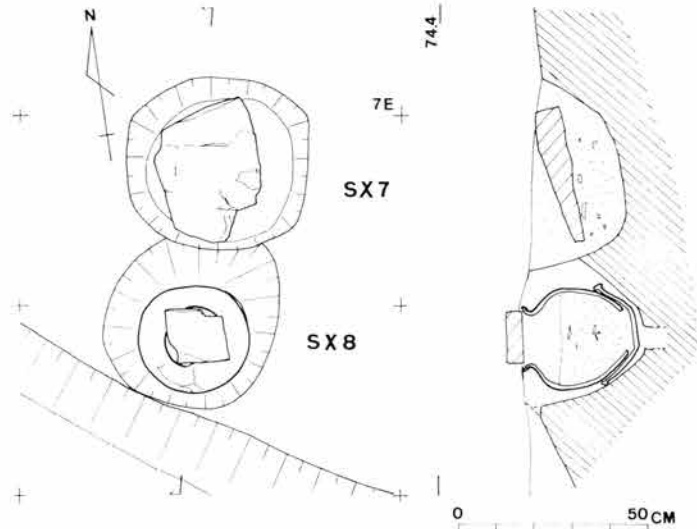
者集団の祭祀跡と考えられる。墳丘の最終封土を盛る段階で、SX10の10cm上でチャート質の石(30cm×15cm)を埋置しているのが判った。この石の頂部は墳丘より突出しており、外から見える状態であった。従って古墳が完成した後も何らかの祭祀の対象物となった可能性も考えられる。

以上が古墳時代に属する遺構の概要である。次に中世に属する遺構について述べる。

墓SX6 前庭部にある墓である。古墳時代の面より30cm上で五輪塔の火輪が、同大のチャート質の石とともに集められており、この下から骨片が検出された。骨片は径37cmの穴を掘り(埋土は灰褐色土)、その中に埋めていた。この火輪に伴うものはSX6の西方2mで見つかった空風輪であるが、他の部分は発見できなかった。五輪塔は小ぶりで、おおよそ室町時代に属すると思われる。付近から須恵器鉢も検出された。

墓SX7・8 図面では表現していないが、この遺構の上面には20～30cm大の石が腐植土を除いた時点で検出された。SX7は円形土壇で、径は45cm・深さ25cmである。埋土は淡褐色土(やや暗褐色気味)で、南下がりに平石を据えていた。この上下に骨(火葬骨であろう)が埋納されていた。北側の地山は黄褐色土、南側のそれは赤褐色土であった。SX8はSX

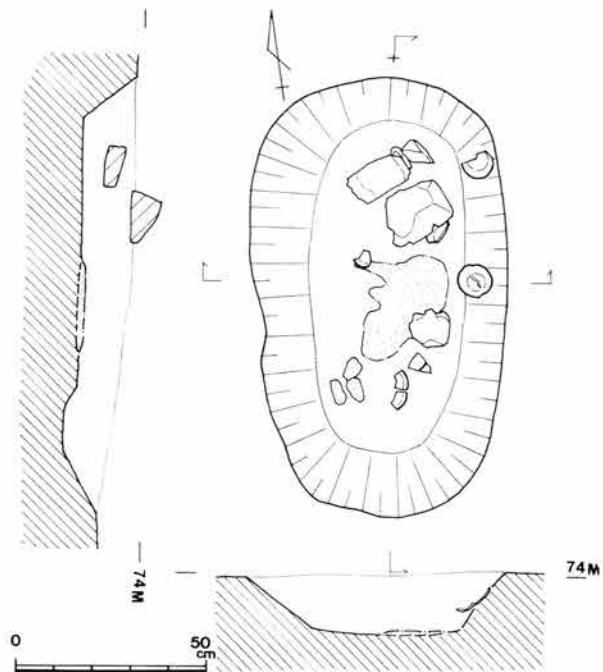
7のすぐ南にある墓で、断面観察によりSX8が古いことが確認できた。楕円形土塚で、長径50cm弱・短径45cm・深さ30cmである。断面はすり鉢状を呈する。須恵器甕が蔵骨器で、底部が欠損しているものを転用したため、下に須恵器鉢を据えている。なお蓋は正方形の平石を使用していた。埋土は淡褐色である。



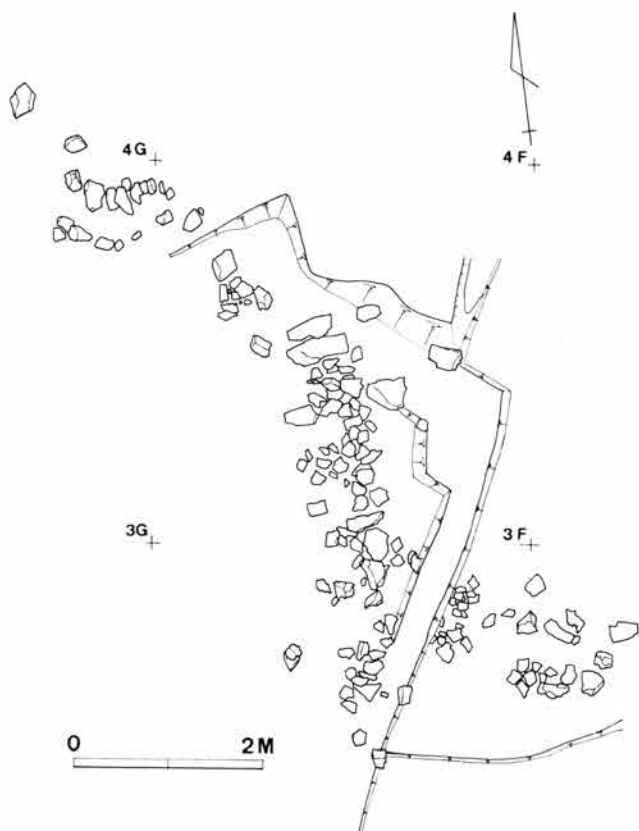
第30図 中世墓 SX7・SX8

焼土塚SK3 墳丘の東周濠内で検出した。隅丸長方形を呈し、長径115cm・短径65cm・深さ13cmである。土塚北部に石2個を置き、この付近に土師器小皿2個を据える。中央には焼土塊3の付近に土師器小皿2個を置く。南部には小焼土塊3の他土師器大皿4片（1個体）を置く。土師器皿は雑なつくりのものばかりである。焼土塚はあるいは遺体を焼いたものか、墓に伴う祭祀跡かであろう。

墓SX9 先述した墓SX6から西側に広がる石列である。墓SX6を起点とし、ほぼ西へ3mほど石列が続き、ここで北に屈折して4m続き、また、北西に折れ4m続いて終わる。幅



第31図 SK3 実測図



第32図 SX9 平面実測図

1 m。散骨がみられる。

時期は遺物の項で述べるが、おおむね鎌倉時代後期から南北朝時代にかけてのものである。

3. 出土遺物

古墳時代に属する遺物は土師器・須恵器・銀環・鉄製利器で、器種は土師器が高杯、須恵器が杯（身と蓋）・高杯・甕、鉄製利器が刀子・鎌である。

以下第33図に図示した遺物を中心に述べる。第1次埋葬に伴うものの内、5と6はセットで検出された。5は器高4.2cm・口径13.2cm、胎土はザラついた粘土で、焼成はあ

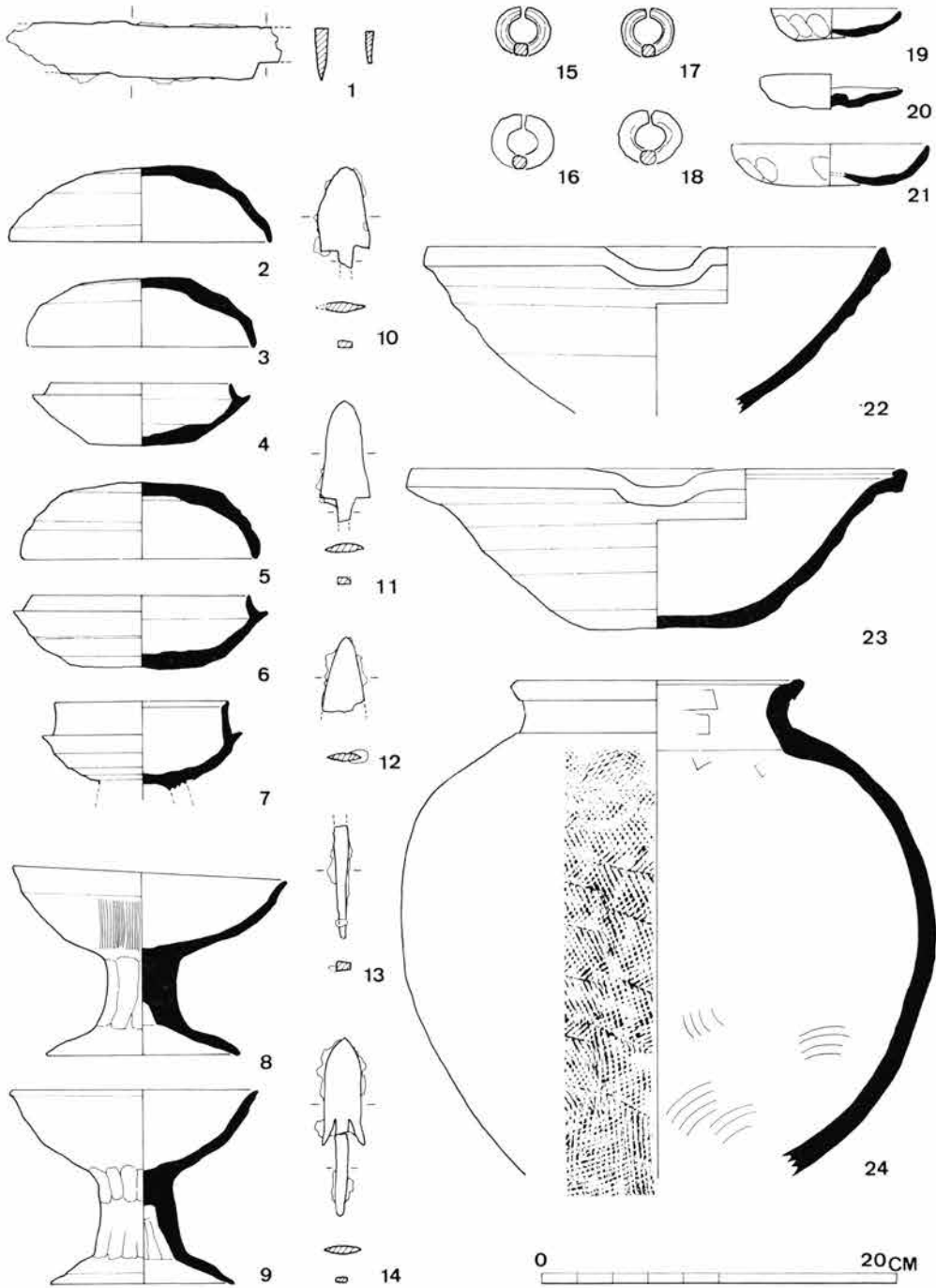
まい。色調は褐色。生焼けの製品である。6は器高4cm・口径12.2cm、胎土は1mm大の白色砂を少し含む。焼成はあまい。色調は光沢のない褐色。これらはいずれも生焼けのもので、同時にセットで焼かれたものであろう。中村編年のⅡ-6段階に相当する。

第2次埋葬に伴うものの内3は、器高3.7cm・口径12.8cm、胎土は1mm大の白色砂をかなり含んでいる。焼成良、色調は青灰色（外面は黒灰色に近いところも半分ある）。外面には点々と窪みがあり、荒れている。銀環は錆化が著しく、外面の銀がほとんどとれている。

概して古墳時代に属する遺物は遺存度が悪く、破片で発見された。破片数は須恵器杯身272・壺16・提瓶46・甕387・高杯13、土師器高杯99・甕42、銀環4、鉄鎌4、鉄刀子2である。

中世に属する遺物は、須恵器・土師器・石製品である。器種は須恵器が甕・鉢、土師器は皿、石製品は五輪塔の空風輪と火輪である。

焼土坑SK3に伴う土師器皿は手づくね痕が明瞭にわかる雑な製品である。19は口径7cm



第33図 出土遺物実測図

第1次埋葬面；2・4～6・8・9・11・14・15・17，第2次以降；1・3・10・12・13・16，墳丘頂；7，前庭部；18・22，SK 3；19～21，SX 8；23・24，鉄刀(1)，須恵器杯身(4・6)・杯蓋(2・3・5)・高杯(7)・鉢(22・23)・甕(24)，土師器高杯(8・9)・皿(19～21)，鉄鍬(10～14)，銀環(15～18)

・器高1.6cm、胎土は良質であるが、焼成はあまい。色調淡褐色（所々黒色及び赤褐色）。20は口径8cm・器高は最大で2cm、胎土は1mm大以下の白色砂を少し含む。焼成はあまい。色調は淡褐色。底面の中央には凸部があるが、成形時にできたものである。かなりいびつな皿である。21は口径11cm・器高2.3cm、胎土は1～2mmの石を含む。焼成ふつう。色調は淡褐色。底部が盛り上がっているのは焼成の具合か。これらはいずれも指おさえ痕が顕著である。分量が小さく、しかも雑に作られていることから、平安京の編年観^(注13)によれば14世紀に属すると言えよう。

墓SX6付近で検出した須恵器鉢は底部を欠いている。口径25.6cm・器高(8.2cm)、胎土は1～2mm大の白色砂を含む。1.5cm×0.5cmの粘板岩片が1点含まれている。焼成良。色調は灰色。口縁部のごく一部が黒灰色を呈する。調整技法は内外面ともロクロなで。内面の下半部は磨滅している。兵庫県魚住窯系の製品であろうか。口縁部の形態から言えば、京大作製の『中世土器様式』^(注14)編年案によれば13世紀後半代と言えよう。この鉢は出土地点から、墓の蓋として使用された可能性がある。

墓SX8の蔵骨器である須恵器甕は、口径16cm・現存高27.6cm、胎土は精良、焼成堅緻、色調は黒灰色である。体部外面はいわゆる綾杉状の叩き目があり、内面は同心円文をほとんどで消している。口縁端部内側には凹線が巡る。底部は蔵骨器に転用する以前に破損したものである。この製品と同種のもは、兵庫県三木市与呂木7号窯、跡部1・2号窯で確認されている^(注15)。また京都府夜久野町の矢谷経塚では、甕の内部に木製の円板が入れられており、これには「応永……」の年号があって1400年前後を下限とする製品であることがわかる。本品は型的に先行するもので14世紀前半代と思われる。

須恵器鉢は、口径28cm・器高9cm、胎土は若干の砂粒を含む。焼成は堅緻。色調は灰色。口縁端部の一部が黒変している。内外面ともロクロなで。内底面が磨滅している。完形。魚住窯系か。口縁端部の屈曲が大きく、先述したSX6の鉢より後行するので、14世紀代の産物と思われる。

4. ま と め

今回の調査は近畿自動車道関係の古墳調査としては、城ノ尾古墳、後青寺古墳、小屋ケ谷古墳に次ぐものである。後青寺古墳は5世紀末～6世紀前半で、木棺直葬墳である。これ以外は横穴式石室墳であるが、遺物の観察によれば、本墳→小屋ケ谷古墳→城ノ尾古墳と重複しながら築造、経営されたようである。これは少数の有力家族墓の変遷とみることができよう。

竹田川を挟んだ対岸である庵戸山には十数基の群集墳があり、家父長層にも優劣を認めることができる。今後、須恵器がどこから運ばれてきたのか、石室の造り方に齊一性がないか等について考えねばならないが、副葬品の差異は大きな視点となり得る。つまり、後青寺古墳は武器、洞楽寺古墳は武器、小屋ヶ谷古墳は馬具と武器、城ノ尾古墳は武器と農工具というように、武器→農工具の変遷が辿れる。現段階では、小屋ヶ谷古墳の段階がもっとも勢力（武威）のあった有様を示している。

おそらくこの段階で六人部地方の階層がはっきりと決定されたのであろう。その後は農業に多くの力を結集したことが知られる。

中世の遺構については、(1)須恵器鉢と甕をもつもの、(2)穴に骨を埋めたもの、(3)石列と散骨、(4)五輪塔と穴に骨を埋めたものというように4種類の形態が認められた。(1)については大内城墳墓にも同様のパターンがあり、ある一定時期、つまり鎌倉時代後期～南北朝初期に限定できるかも知れない。

今回検出できた墓は簡便なものであり、大内城墳墓のような荘官クラスではなく、有力な名主層と言えよう。これが古墳を意識して造立されていることは、中世の土地意識や霊域もしくは墓意識を考える上に重要である。

つまり14世紀頃になると、山林のタブーの地を、ある特定個人のための墓を造るのに使用できるようになったのである。山林の私有化が大きく開始したと考えられはしまいか。

(伊野 近富)

(4) 山田館跡

1. はじめに

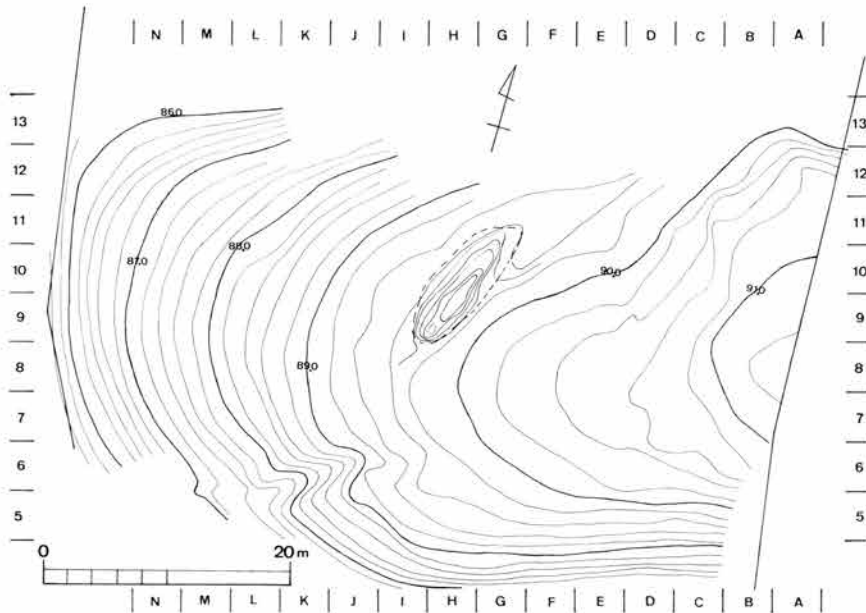
山田館跡は、福知山市大字大内小字大内山田にある。当遺跡は昨年度と今年度、当センターが発掘調査を実施した大内城（平城）跡から、南へ約1kmの丘陵上^{ひらいじょう}にあり、平野部との比高差は約20mを測る。この丘陵は、平坦な台地が東から西に数百mにわたり伸びている。今回の調査は、この丘陵の西端部、東西約45m・南北約25m、発掘面積1,000㎡余りである。

2. 調査経過

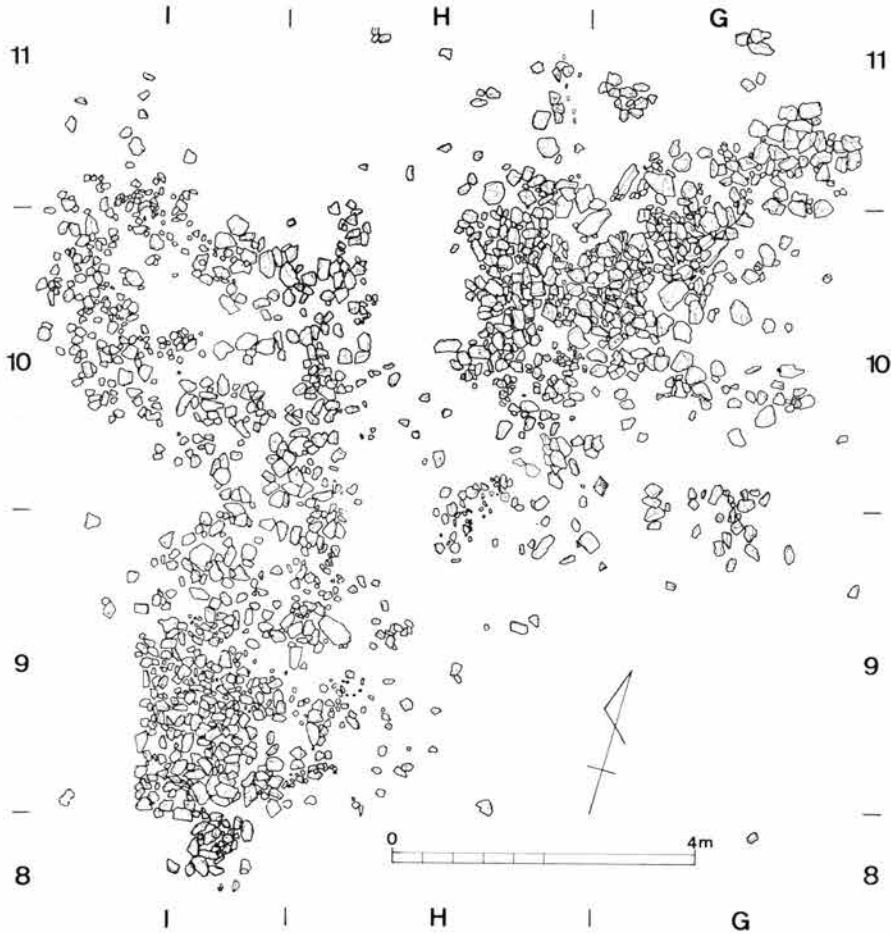
調査着手前の現地は、南北約25m・東西約60mの緩傾斜地のほぼ中央に、高さ約0.5m・長さ約15m・幅約4mの土塁状隆起が、北東～南西に築かれていた（第34図）。この土塁状隆起を土塁と判断し、周囲の平坦地を城館敷地と考えて調査に着手した。

調査はまず、南北にトレンチを設定し、土層の確認と遺構・遺物の検出に努め、順次調査面を広げていった。それと併行して、土塁状隆起の表土を剥いだ。表土の下にはほぼ全面に石が葺かれており、その範囲は西側の平坦地にまで広がっていた（第35図 図版第15-(1)）。この石の実測を終えたのち、石の除去、下部遺構の検出を行った。

今回の調査で検出した遺構は、蔵骨器をもつ火葬墓7（土師器鍋6，瀬戸灰釉菊花文瓶子



第34図 山田館跡地形図



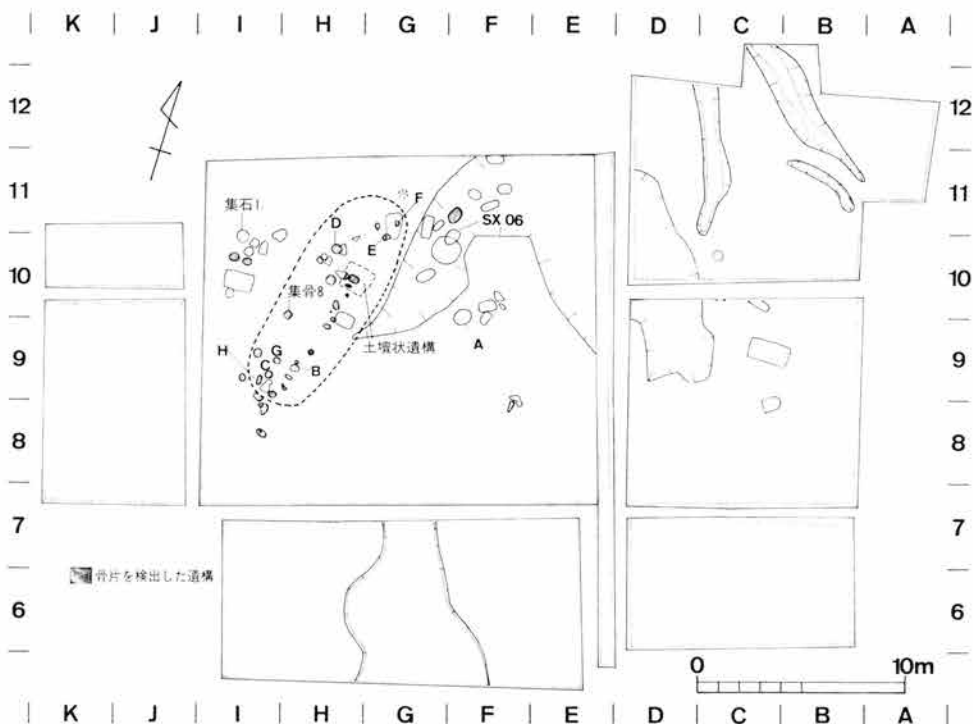
第35図 土壘状隆起集石実測図

1), 丹波焼大甕の埋置1, 集骨・集石遺構30以上, 土塚15以上, 土壇状遺構1以上, 溝3条, 落ち込み2を検出した。建物跡や土壘・堀など, 城館跡に関連する顕著な遺構や遺物はなかった。

3. 検出遺構 (第36図)

土壘状隆起を中心とする石が散乱していた部分の近辺から, 埋置甕(A), 蔵骨器(B~H), 集骨・集石を検出した。以下, 主要なもの概要を示す。

Aは丹波焼の大甕で, 径約70cm・深さ35cmのすり鉢状の土塚の中に据えられていた。この土塚は, 甕の体部中央付近までの深さしかない。体部上半~口縁にかけての破片は甕の内部に落ち込んでおり, 土器片の堆積の上に15cm程度の石が数個載った状況であった。これらの

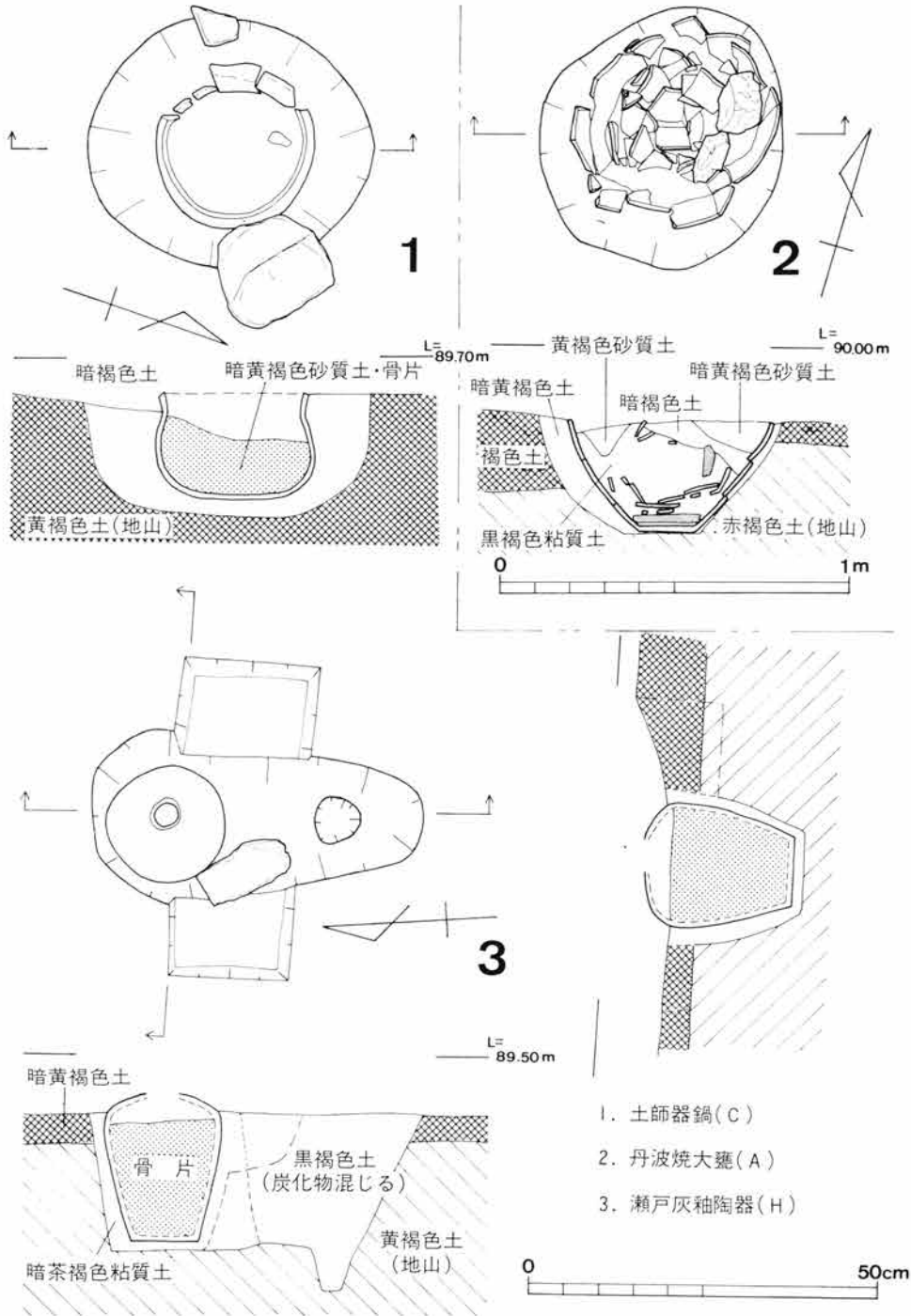


第36図 遺構配置図

ことから、甕の埋め方を復元するとつぎのように考えられる。甕を土壇に据えつけた後、口径部を覆う盛り土がなされた。その際に、有機質の腐りやすい蓋がおかれ、その上に、内部から見つかった石が載せられていた。この石が後に、内側に落ち込んだのであろう。内部底には、厚さ約3cmの平らな石が敷かれており、何らかの物を納めたことが窺われる。埋土中よりは、土器・副葬品・骨片などは全く検出されず、炭化物の小片が数点混じっていたのみである。(第37図-2 図版第15-(2))

Cは、土師器鍋を蔵骨器に転用したもので、内部に火葬骨が納められていたが、副葬品は伴わない。この鍋を覆う蓋はない。恐らく、木質の蓋を用いていたのであろう。上部構造はよくわからず、第35図の石を除去するとすぐに口縁が見えた。Cの鍋には、火を受けた痕跡はなく、未使用のものをを用いている。体部における穿孔はない。鎌倉～南北朝頃に属する。(第37図-1, 図版第16-(1))

B・D・E・F・Gは、Cと同形の土師器鍋を蔵骨器とするものである。内部にはすべて火葬骨が納められていた。D・Eは、土師器鍋を据えた壇の底部に、径約20cm・深さ約10cmの小さな土壇を掘り凹めており、共に微細な骨片が埋土中に混じっていた。これらの土師器鍋のうち、Gは表面に煤が付着していた。土師器鍋を蔵骨器に転用する例は福知山市と兵庫



第 37 図 蔵骨器・埋納土器出土状況図

県に多く見られる。^(注16)

Hは、瀬戸灰釉菊花文瓶子を蔵骨器として使用したものである。内部には骨が納められていたが、副葬品はない。骨片を納めるために、口頸部を打ち欠いてあったが、この部分は出土しなかった。この掘形は、平面での土色の相違が識別できなかつたので、東西方向に断ち割りを行い検出した。当初、長楕円形をした一つの土塚と考えると、瓶子底部のレベルまで掘り切ってしまったが、瓶子の周囲の土（暗黄褐色粘質土）と南側の土（炭化物を含む黒褐色土）との差異から、二つの土塚が重なって設けられていたと判断した。瓶子を埋置した土塚中には、検出面から約10cm下のレベルに長さ13cmの石が、瓶子に接して置かれていた。この石は地山の上に載っていたので、瓶子を納めた土塚は復元線のように段をもつものであったと考えた。一方、南側の土塚は先の土塚に切られていたものと思われる（第37図-3、図版第16-2）。このように、蔵骨器と炭とを近接した二つの土塚に埋める例は、当遺跡と同地区の大内城跡中世墳墓^(注17)や洞楽寺古墳中世墓^(注18)に類例がある。

集石・集骨遺構は、30か所以上見つかったが、検出時に骨片が見られたものを集骨遺構、骨片がなく石のみが集められているものを集石遺構と便宜的に分けたのであって、内部構造による類別ではない。あらためてこの集石・集骨遺構を、その構造から分かつと、以下のように三大別しうる。

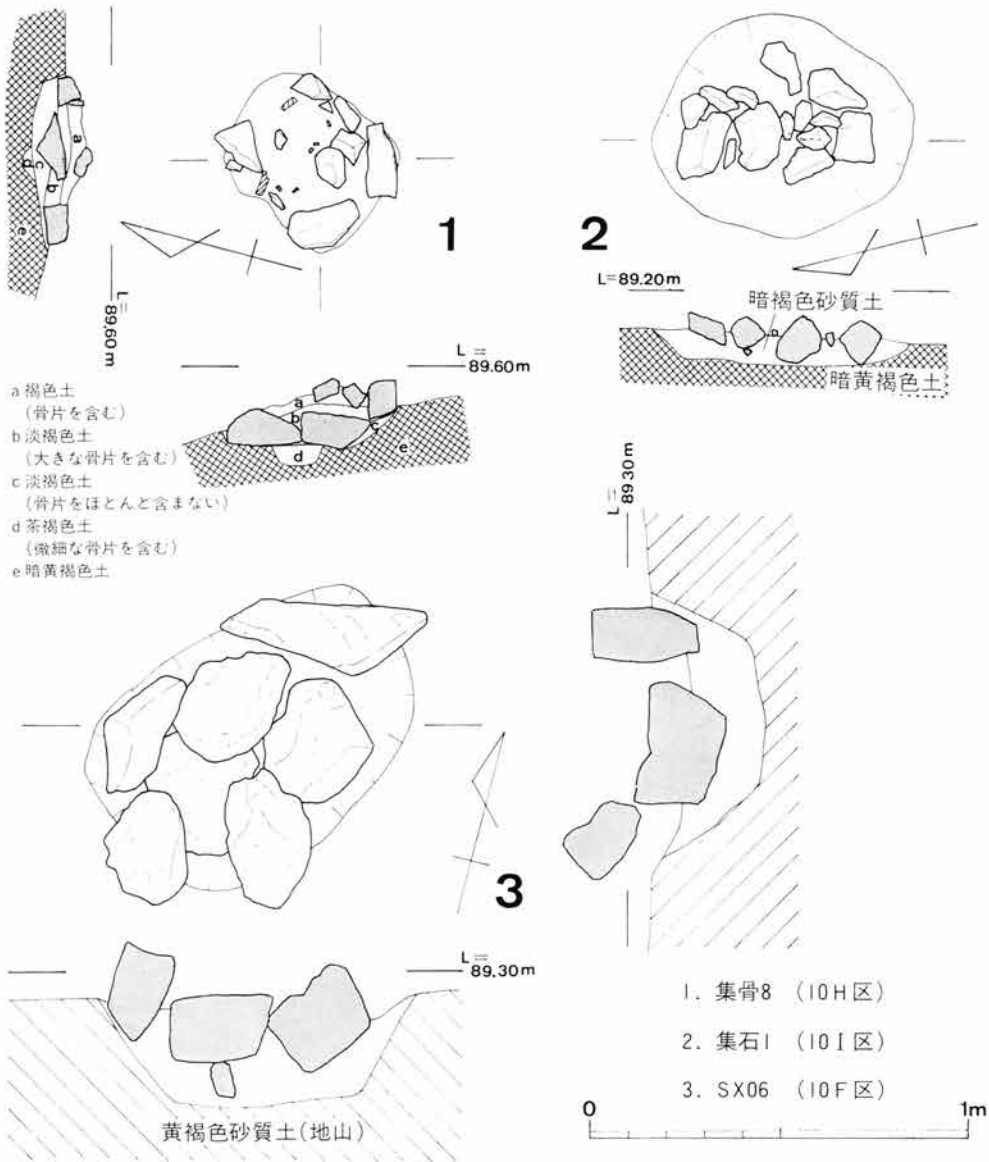
- (1)浅く掘り凹めた土塚に骨のみを埋めるもの。
- (2)土塚中に石が集められ、その内部に骨を納めるもの。
- (3)土塚中に石は集められているが、骨は納められて（遺存して）いないもの。

第38図-1は、(2)タイプのもので、10H区に位置している。35cm×45cm、深さ15cmの隅丸の土塚の底に、径12cm・深さ6cmの小さなピットが穿たれている。土塚中には、20cm程度の石が置かれている。下層の小ピット中には、微細な骨が混じっており、最上層の褐色土中に最も多くの骨が含まれていた。

第38図-2・3は(3)のタイプのものである。2は、10I区にあり、土塁状隆起の西側に位置して検出された。50cm×70cm、深さ10cm足らずの浅い土塚中に、10~20cmの石が置かれている。埋土は砂っぽい暗褐色土であるが、骨片・炭化物・焼土・土器は全くなかつた。

第38図-3は、10F区にある集石遺構である。60cm×90cm、深さ30cmの土塚が、地山を掘り込んでいた。内部には30~40cmの石が埋められていた。この集石遺構が、本遺跡中、最大規模のものである。この遺構の周囲は水はけが悪く、調査時にも水がすぐわき出たために、層位確認はできなかつた。出土遺物はない。

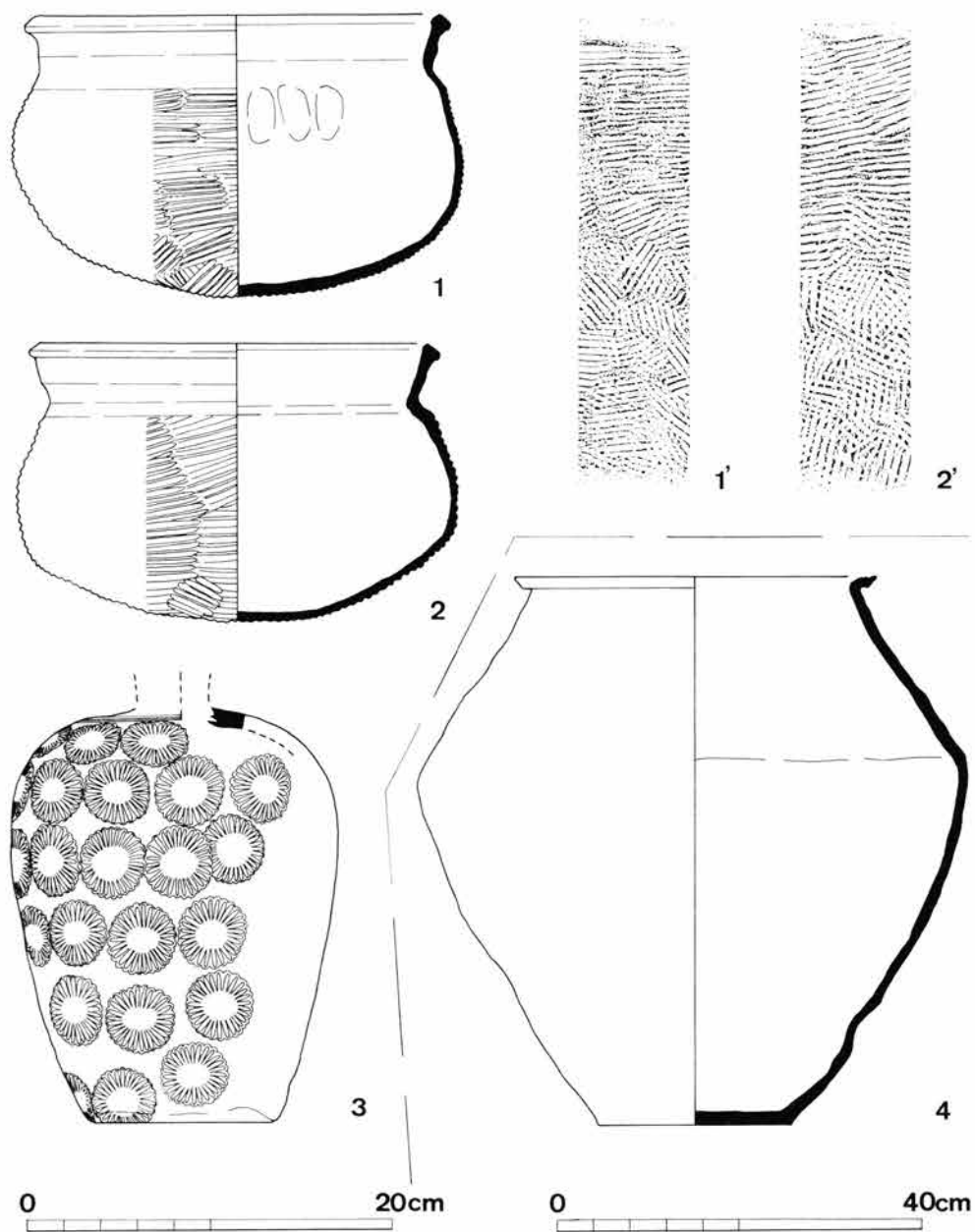
- (1)タイプのもは、径約20cm・深さ10cmたらずの土塚内に、骨が納められているのが典型



第38図 集骨・集石遺構実測図

的なものである。

土壇状遺構は10H区にあり、土塁状遺構の下層にある。すなわち、この土壇状遺構を造設する形で、土塁状遺構がつくられたものである。20~50cm大の石を東西・南北それぞれ3個たて並べ、一辺1.5mの方形土壇をつくったものである。この土壇の中央と南寄り部分に、先の分類の(1)タイプの集骨遺構があった。



第39図 山田館跡出土遺物実測図

1. S X01-C (土師器鍋) 1' S X01-C叩き目拓本
2. S X01-E (土師器鍋) 2' S X01-E叩き目拓本
3. S X01-H (瀬戸灰釉瓶子)
4. S X01-A (丹波焼甕)

4. 出土遺物

本遺跡の出土遺物は、土壘状遺構周辺の集石中に、五輪塔火輪3・風輪片1・空輪片1が挟まっていたのをはじめとし、先述の蔵骨器（土師器鍋6・瓶子1）、甕、土師皿片、瓦器片、須恵器片数点、骨片、炭化物、焼土がある。

第39図-1は、Cの蔵骨器に使用された土師器鍋である。口径22.2cm・最大腹径24.8cm・器高15.5cmである。体部は、全面に平行叩き目が施されており、口頸部は横方向になで調整を行っている。内面体部上部には、指おさえ痕が見られる。明褐色。ほぼ完形。

2は、Eの蔵骨器で、1と同じ形のものである。口径21.1cm・最大腹径24.1cm・器高15.3cmを測る。内面は刷毛で整えたのち、指などで消している。

3は、Hの蔵骨器に転用されていた瀬戸菊花文瓶子で、口頸部を打ち欠いてある。現存高22.9cm・最大腹径17.9cmを測る。外面の菊花文は、径4cmのスタンプで全面を押している。花卉は28枚である。色調は、器壁断面が灰白色、釉は全面につけられており、淡緑色に発色している。鎌倉(後)^(注19)～南北朝に属する。

4は、Aに埋置されていた甕である。口径39.8cm・最大腹径60.0cm・器高60.0cmで、全体に赤褐色～橙褐色をベースに、体部上半～口縁部の外面に付着している自然釉の部分は白灰色を呈している。口縁部は、内傾しながら上方に伸びた頸部が、ほぼ真横に屈曲し、口縁端部内面に一本の沈線が廻るものである。

5. ま と め

今回の調査を含めて、近畿自動車道舞鶴線関係の埋蔵文化財発掘調査において、中世墓の資料は増加している。特に、鎌倉^(注20)～南北朝^(注21)にかけては、宮遺跡や大内城跡中世墳墓といった、良好な資料がある。

宮遺跡は、塚状のマウンドを持ち、単葬墓・副葬品の所有の点で、大内城跡中世墳墓は、多彩な蔵骨器・丹念に造られた外部施設・副葬品の所持などの点から、両遺跡の被葬者は共に一般民衆とは一線を画する層であったことが推定される。

一方、本遺跡のものは、瀬戸灰釉瓶子を別として、日常雑器の蔵骨器への転用が一般的であり、また大多数を占めるのが骨のみを土壘内に埋葬すること（副葬品がないこと）からして、前二者とは類別される「民衆クラス」の墓と考えられる。しかし、当初からこの墓所は「惣墓」的なものであったわけではなく、初めは「土壘」を設けて埋葬するという、極めて特別な取り扱いをなされたものであった。その後、南北方向に土盛りをし、「土壘状隆起」をつくり、そこを中心として埋葬を行うという、「惣墓」的な様相を示している。この変遷は、

個人墓→惣墓への展開の中で位置づけうるものであろう。

加えて、遺構の切り合いがほとんど見られないことは、十分に上部構造——検出した五輪塔を含めて、有機質の墓標の存在を想定せしめるものである。そのことを考慮した上で、墓がいくつかのグループに分かれて集中することは、そのグループ内に緊密な関係があったと言えまいか。例えば、10 I区の一群、B・C・G・Hの一群、D・E・Fの一群などの密集状況は、それぞれに血縁関係があったのではないかと考えられるのである。

今回の調査で骨は30数か所から検出された。各々の遺構より出土した骨の量は、多寡はあるが、各々が一体分の量を埋葬していない。すなわち、一体分とするには、少ない量の骨しか出土しない。といって、一個の人間が、この墓所の所々に分けて埋められたとは考えにくい。これについての解釈は、他所とこの墓所との間の分骨が行われたか、もしくは火葬の際に拾骨を行った結果か、のいずれかであろう。

最後になったが、集石と集骨・土塚について私見を述べたい。第38図1・2に見られるように、どちらも土塚内に石を置いているものであり、構造的には変わらないが、一方は骨が検出され、一方は骨の出土は全くない。すなわち、集石((3)のタイプ)と集骨との差は骨の有無だけであり、骨を埋葬しなかったというより、遺存しなかったと考えるのが妥当だと思われる。B・C・Gのグループにおいて、骨の出土を見なかったのは一か所だけであり、他のものはすべて骨が埋まっていた。墓が密集しているところに、一か所だけ他の何らかの性格の施設をつくったと考えるより、これもまた墓としてつくられたと考える方がよいのではないか。これは、先にも述べた埋葬の際の分骨・拾骨による骨の量差が反映しているのかもしれない。

(岩松 保)

(5) 洞楽寺2・3号墳

1. はじめに

洞楽寺2・3号墳は、当調査研究センター職員が昭和57年6月に行った現地踏査^(注22)で発見したものである。所在地は福知山市大字大内小字坪田である。2号墳は洞楽寺古墳と同じ尾根上の北側に近接している。径6m・高さ0.2～0.5mの円墳と推定した。3号墳は、それらと谷を隔てた北側の尾根上にあり、2号墳とほぼ同規模の円墳と推定した。

2. 調査の概要

試掘調査は、2号墳が昭和57年10月1日～15日まで、3号墳は同年10月17日～30日まで行った。

(1) 2号墳

表土を剥ぐとすぐ地山となった。古墳である可能性はほとんどなくなったが、東部で須恵器や土師器などの遺物が出土する傾向があったので、東へ拡張することにした。その結果、竪穴式住居跡2基以上が発見された。遺物の年代は6世紀代である。その他平安時代から鎌倉時代の遺物も出土した。

以上のとおり、古墳時代後期及び平安時代頃の集落跡が埋没している可能性が大きい。したがって、丘陵平坦地約500㎡を本調査する必要がある。なお、調査地は洞楽寺古墳と近接しており、同古墳北部で発見された中世の墳墓と同様の遺構が発見される可能性のあることを付記しておく。

(2) 3号墳

3号墳のある丘陵は幅狭いやせ尾根ではあるが、見晴らしが良く墳墓の立地に適している。試掘トレンチは幅2m・長さ28mのものを1本あげ、土塚1基を検出した。その後、さらに東に同規模のトレンチをあけた。ここでは土師質（弥生土器の可能性もある）土器片1個が発見された。また幅0.5mの溝状遺構も2条発見された。層序は表土、黄褐色土（厚さ約20cm）、遺構面（黄褐色土の地山）となる。

以上のとおり、古墳の痕跡は認められなかったが、土塚や溝状遺構があることから、方形周溝墓もしくは方形台状墓が埋没している可能性がある。したがって本調査が必要である。調査対象となるのは約500㎡である。(伊野 近富)

(6) 城ノ尾城館跡

1. 調査地概要

宮遺跡や城ノ尾古墳が立地する丘陵の尾根先端部近くのテラス状のゆるやかな傾斜地が今回の調査地である。尾根の先端から平地におりたところが一宮神社で、調査地との距離は約80mを測り、調査地は神社裏山の檜林である。

踏査の段階で、既に約15m×60mの平坦地、それを囲むように土塁状の地形とその内側に沿って空堀状の地形が北・西・南に認められ、東部は現在農道になっている土手があり、中世の城館跡と予想された。^(注23) また、丘陵上方の宮弥生遺跡^(注24)の範囲がこの辺りまで及んでいる可能性もあった。

特筆すべきは、ここからの眺望の良さである。前方の土師川と後方の長田野丘陵の間を国道9号線(旧山陰街道)に沿う長田・多保市・岩崎・池田等の集落を一望のもとに見晴らすことができる。なお、比高は約17mである。

2. 調査内容

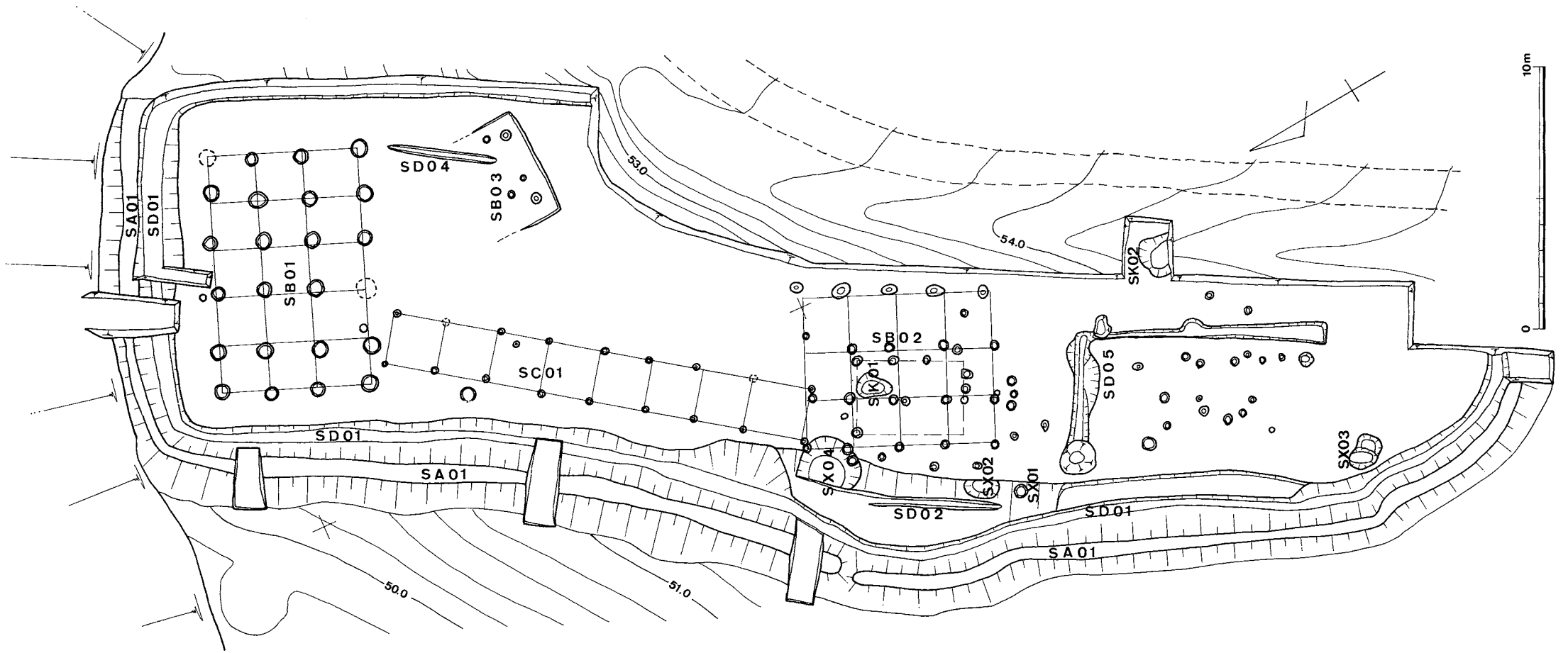
この調査は、現地調査期間と概報執筆時期が重なったため、遺構・遺物の整理検討が殆どできていない。また、下層遺構については全く調査が及んでいないので、来年度に詳報を委ね、本稿では現時点で判明した事実の報告にとどめざるを得ないことを最初にお断りしておきたい。

地形測量後、土塁状地形に囲まれた部分を全面発掘したところ、第40図に示したような諸遺構が検出された。この遺構面は、大半が地山面に一致するが、北端部は後述するS B01を建てるために造成された盛土上面である。この遺構面と表土(腐植土)の間には厚さ10cm程度の旧耕作土の包含層があり、コンテナ3箱分の遺物が出土した。殆どが弥生土器・古式土師器であり、極く少数の瓦器片が混じる程度である。なお、掘削面積は約600㎡である。

(1) 中世の遺構

掘立柱建物跡S B01は、調査地の北端部、最も平坦な部分で検出された。東西5間・南北3間(9.0m×5.4m)の総柱建物に復原できる。柱間距離にはかなりむらがあるが、平均して1.8mである。ピットの形状は、直径50~60cmの円形ないし隅丸方形である。

掘立柱建物跡S B02は、調査地の中央部に位置する。南北4間・東西3間(7.2m×6.0m)のこれも総柱建物が一応考えられるが、東辺のピットがいずれも他のピットと形状・大きさが異なっている点を考慮して、これを柵列と考えれば、4間×2間(7.2m×3.9m)の建物であったかも知れない。



第40図 城ノ尾城館跡平面実測図

S B01とS B02を連結するかのように、2本の平行するピット列S C01が並んでいる。各ピット間距離は1.9mで、7間分検出され、対応する列との間隔も1.9mを測る。推測の範囲を出ないが、渡り廊下のような上部構造をもつものであったかも知れない。

土塁状の地形S A01に関しては、まだ調査が完了していないが、西部の一部は拳大の礫を積み上げた石塁になっている。

S A01の内側に掘られた溝S D01は、総長80数mを測る。北方では、S B01を囲むように「コ」の字形に屈曲し、この建物と無関係でなかったことを示唆している。

(2)下層の遺構

S B01の検出面は盛土上面であり、この盛土と地山との間に、黒褐色土層（厚さ約50cm）を、S D01の壁で観察できる。この層は一部S B01検出面に露頭している部分があり、整面中、弥生～古墳時代前期の土器片が多く出土したが、この層の調査結果は次年度の報告に委ねる。

S B01の南東で、かなり削平された竪穴式住居跡S B03を検出した。南辺と東西両辺の一部を残し、他は削平されている。1辺4m強の小型の規模の住居跡である。埋土から古墳時代初頭の土器片が出土している。

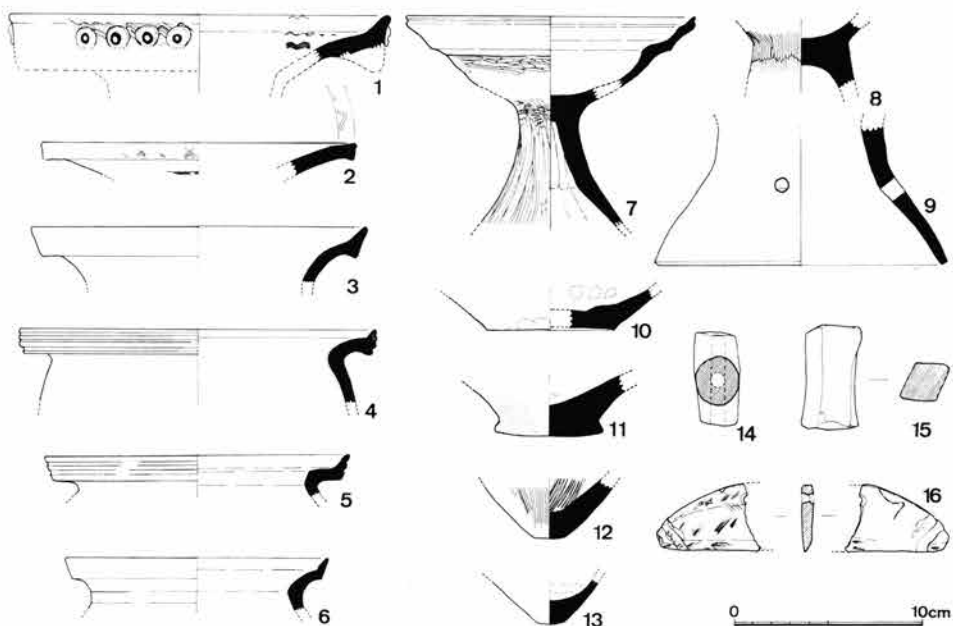
S X02とS X04は、浅い土塚で、焼土と炭が夥しく入っていた。切り合い関係によって、S B02よりは古いことが判る。出土遺物は若干の弥生土器ないし古式土師器であるが、調査地一帯にはこの時期の土器片が散乱しており、必ずしもこの遺構に伴うものとは確言できない。

3. 出土遺物

第41図に現在までに整理し得た遺物の実測図を示した。(1)は壺の口縁部で、内面・外面及び口縁端部に波状文を施す。(7)は2段に屈曲する口縁部を有する高杯である。口縁部内外面と体部内面を横なでし、体部外面と脚部外面を筥磨きしている。胎土は、他の土器と異なり、細砂粒を含む程度で、かなり精良である。(5)の頸部は鋭く屈曲し、水平に伸びた後、やや外上方へ短く立ち上がる。口縁部に2条の擬凹線を施す。図示した土器はすべて包含層出土であるが、(4)だけはS B03の埋土から出土している。(5)に似るが、擬凹線は3条である。また図示していないが、この住居跡埋土からは、(12)と同様の底部が出土している。(14)は太い円柱状の有孔土製品で、土鍾かと思われる。

石器として、石包丁(16)と小型砥石(15)が共にS D01底部から出土しているが、必ずしもこの遺構に伴うものと言えないのは、S X02・04について上述した通りである。

他に中世の土師皿片・瓦器片が出土しているが、細片であり、次年度に報告したい。



第41図 城ノ尾城館跡出土遺物

4. ま と め

城ノ尾城館跡は、大きく2期に分かれる複合遺跡である。

第1期は弥生時代中期から古墳時代前期に属する。弥生中期は包含層の遺物によって知られるだけである。詳細は全く不明であるが、一応宮遺跡の北限とすべきであろう。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、竪穴式住居が少なくとも1基営まれたが、この時期の遺構は、大半が削平され、多数の土器片が生活の名残りをとどめているにすぎない。火を焚いた跡と思われるSX02・04はこの時期に属する可能性が高い。

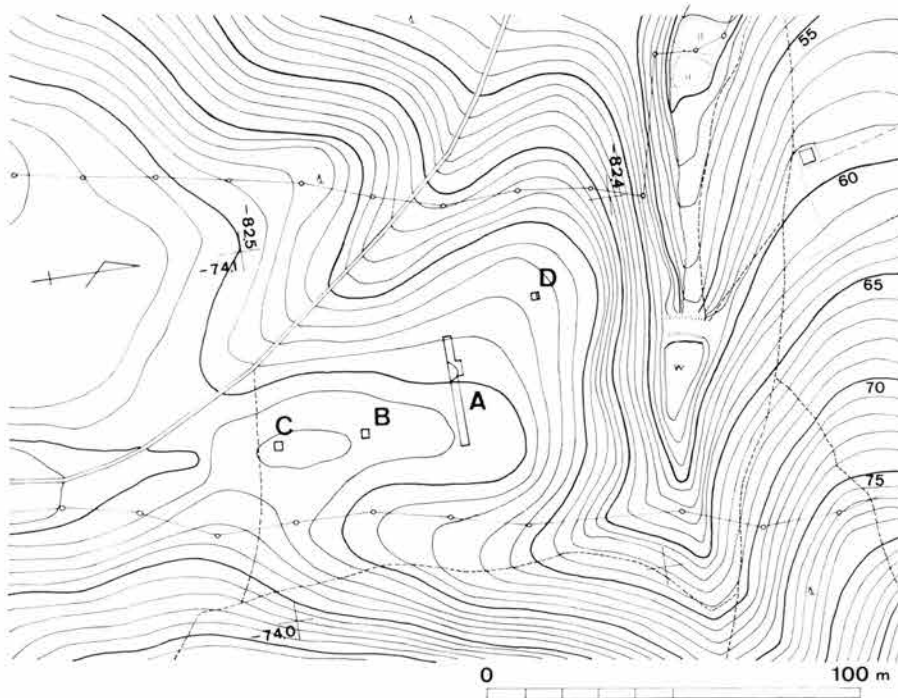
第2期は掘立柱建物2棟、両者を結ぶ渡り廊下(?)、そしてこれらを取り巻く土(石)塁と空堀が作られた時期である。年代を示す遺物が乏しいので確言できないが、総柱建物であることは、大まかに平安末から鎌倉時代の遺構であることを示唆する。また、この遺跡の包含層から出土した遺物が弥生～古墳初と鎌倉時代のものに限られることは、間接的に、これらの遺構が後者の時期に属することを示している。SB01の北西隅のピットから出土した瓦器底部は、13世紀後半頃のものらしい。以上の現時点での検討によれば、当城館跡は、南方約700mにある大内城の第1期^(注25)の直後の時期に属することになる。

(小山 雅人)

(7) ケシケ谷城館跡

ケシケ谷城館跡は、昭和57年6月に発見された遺跡で、その形状から中世の城館跡と推定された。遺跡の推定範囲は9,000㎡であるがこの内6,000㎡が路線内であるため、これを対象に試掘調査を実施した。

調査地は、西へ張り出す尾根上にあり、北には谷を隔てて、弥生時代の宮遺跡、古墳時代の城ノ尾古墳、鎌倉時代の城ノ尾墳墓などが点在しており、これらの関連遺構が確認できる可能性もあった。尾根は「L」字状の平坦部分を持ち、ここに遺構が埋没している可能性が高かったので、トレンチを設けた。トレンチは尾根方向に合わせた1条（2m×30m）と、尾根中央部と両端部に3か所（2m×2m）との計4か所に設定した。この結果、どの地点からも遺物を発見することができた。層序は表土（厚さ数cm）、黄褐色土（約15cm）、地山となっている。但し、これはAトレンチ（第42図参照）の状態であって、Bトレンチでは包含層である黄褐色土は薄く、C・Dトレンチでは厚くなっている。この黄褐色土中には中世の土師器や瓦器が含まれ、地山面直上あたりに弥生式土器が包含されていた。なお中世の土器はAトレンチの東部に多く、弥生式土器は同トレンチの西部とDトレンチに多く認められた。



第42図 ケシケ谷城館跡測量図

遺構は、Aトレンチ西部で竪穴式住居跡(S B01)1基、Dトレンチ北部で溝状遺構(S D01)1条を検出した。S B01は北西から南東方向の辺をもつ方形住居である。北に拡張したことにより方形の北コーナーが検出された。このコーナー付近から大型蛤刃石斧1点と、土器片が発見された。S D01は小さいトレンチで東西方向の一边を確認したもので、あるいは竪穴式住居跡であるかも知れない。これらの遺構は、黄褐色土の下にあり、埋土は暗褐色土である。器形のわかる土器は少なく、時期も不詳だが、一応弥生時代中期と考えられる。

以上のとおり、試掘調査の結果当該地には弥生時代中期の集落跡が埋没している可能性が強い。丘陵平地地3,000㎡にわたって遺構が検出される可能性が高いが、特に中央より北側に集中する傾向があるようである。丘陵の北部に集落をもつ例は、北方にある宮遺跡にあり、ここでは南部に方形周溝墓をもっている。当該地のB・Cトレンチあたりで墓が検出される場面がないとすれば、道を隔てた南の丘陵にも調査の手をひろげ、その有無を調べなければならない。これによって、当該地周辺の弥生時代の様相を的確に把握できるであろう。また、中世の遺物もあることから、なんらかの遺構が埋没している可能性が高いが、その性格については城館跡ということがもっとも考えられることである。いずれにしても本格調査を実施し、究明をはかることが必要である。

(伊野 近富)

注1 補助員及び整理員

梶村祐知・折谷忠克・大久保真邦・堀居正則・杉山司郎・西口俊郎(故人)・椋本正利・向井智司・国木健司・黒石哲夫・瀧木田佳男・福永伸哉・有井広幸・乗鞍定彦・千原 毅・今川俊之・小出賢一・安野哲也・永田真也・木戸裕美・松木武彦(順不同)

作業員

(大内地区) 芦田 弘・芦田実雄・井上光治・土田正巳・中司順太郎・中司丈太郎・西鉢隆雄・堀 一三・堀喜太郎・堀 嘉寿・堀 憲三・堀三治郎・堀 俊治・堀俊太郎・堀 只志・堀竹三・堀 利夫・堀 宗男・堀 好一・吉田義男・片山サワ子・竹内千枝子・今川智子・土田和子・土田幸子・土田としえ・土家篤恵・中司てる子・中野千代の・堀 昌子・堀恵美子・堀 きみ・堀千恵子・堀 松枝・堀みさえ・堀美智子・堀ゆき子・堀よしえ・堀ヨシエ・堀末子・堀美津野・堀コトエ・山本美喜子・土田初枝・土田美千代・吉田光子

(宮地区) 芦田三治・今川栄一・井上五郎・井上はつ江・井上美代子・今川芳子・今川和美・藤田はるゑ・藤田美行・藤田千代子(順不同)

助言等を受けた方々

田中照久(福井県陶芸館), 大槻 伸(丹波古陶館), 小野正敏・水野和雄(一乗谷朝倉氏遺跡研究所), 橋本久和(高槻市教育委員会), 鈴木重治(同志社大学), 青山 透・植田千佳穂(広島県埋蔵文化財調査センター) 各氏をはじめ多くの方々に御教授を賜った。

注2 一部は既に報告している。岩松 保「福知山市大内周辺の新発見遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982. 9

注3 『福知山市史』1976に詳しい

注4 同路線内の城ノ尾古墳では「墓堂」的な建物が見つまっている。辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982

注5 伊野近富「洞楽寺古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第7号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983. 3 及び本概報「洞楽寺古墳」の項参照

注6 大内城跡出土の瓦器碗と比べて、外面の磨きがやや丁寧であり、一時期程度古いものと思われる。伊野近富「大内城跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982

注7 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966

注8 末永雅雄『増補 日本上代の武器』木耳社 1981

注9 注6と同じ

注10 辻本和美「後青寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982

注11 宮地区の城ノ尾古墳, 大内地区の後青寺古墳・洞楽寺古墳・小屋ヶ谷古墳の四古墳である。

注12 『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978

注13 平良泰久ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会)1980

注14 京都大学作成「中世土器様式研究」討議資料(第5回調査成果交流会)1981

注15 大村敬通「山陰の古代・中世窯」(『日本やきもの集成』8)1981

注16 福知山市では大内城跡(本概報「大内城跡墳墓」)や大道寺跡(「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982, 兵庫県三田市末西地区AW-59・60地区中世窯(『三田市青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』兵庫県教育委員会)1978 などがある。

注17 本概報「大内城跡墳墓」

注18 注5と同じ

注19 藤澤良祐編「瀬戸窯出土遺物編年図」(『瀬戸市史 陶磁史篇』2) 1981

注20 辻本和美ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981

注21 注6と同じ

注22 注2と同じ

注23 注2と同じ

注24 注20と同じ

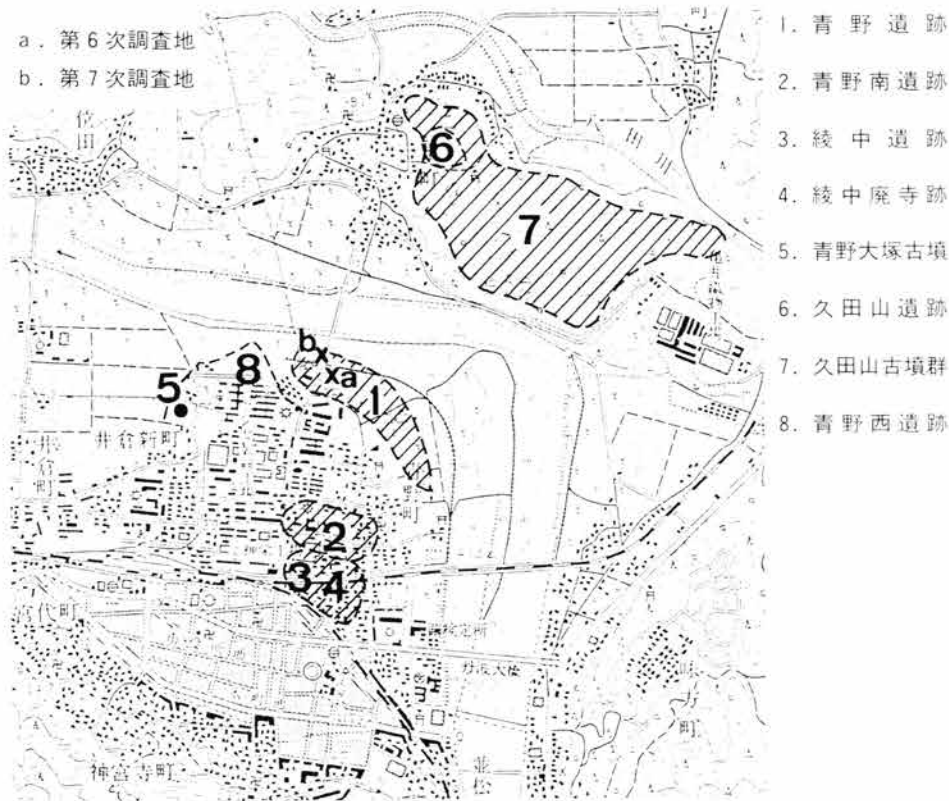
注25 伊野近富「大内城跡発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.3

2. 青野遺跡第6・7次発掘調査概要

はじめに

綾部市青野町一帯に広がる青野遺跡は、府下でも有数の複合集落遺跡として以前から広く世に知られてきた。遺跡は、丹波高原に源を發し北流して来た由良川が、綾部市街地の北部で大きく西方に流路を変換する地点の左岸自然堤防上に位置しており、その周辺の細長い微高地を中心に、南北約500m・東西約200mの広がりをもつものと想定されている。

当遺跡については、これまで綾部市教育委員会により、合計5次におよぶ発掘調査が行われ、その結果、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての住居跡群や、それらに伴う多数の溝・土坎状遺構等が検出されている。また、遺物についても中世に至るまで多種多量に出土しており、由良川中流域における拠点集落として、長期にわたって存立してきたことが窺われる。
(注1～5)



第43図 調査地位置図(1/25,000)

さて、昭和56年度に、京都府土木建築部道路建設課では、府道志賀郷綾部本町線の交通量の増加に対処するため、由良川に架かる白瀬橋の橋梁付け替え工事を計画した。新設橋梁は、現在架かっている橋梁の位置をほぼ踏襲するが、道路幅の拡大により若干西側（下流）に拡幅した形で計画されており、そのための橋脚付設部分および道路取り付け部の下部掘削工事が必要となった。

工事予定箇所は、昭和48年に関西電力青野変電所建設に伴い発掘調査が行われ16基にのぼる竪穴式住居跡が検出された青野遺跡A地点に近接しており、当該工事区内にも同様な遺構群が埋没しているものと予想された。

以上の状況をふまえ、京都府教育委員会文化財保護課及び各関係機関と協議の結果、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施することになった。なお、橋梁付け替え工事の予定工事期間は、道路取り付け部分については56年度と58年度に、また堤防内の橋脚付設工事については57年度に計画されているため継続事業とし、各工事箇所毎に年度を分けて調査を実施することになった。

昭和56年度（第6次調査）は、当センター調査課調査員 松井忠春・増田孝彦を担当者として、昭和55年3月4日に現地着手し、同年3月31日に終了した。

昭和57年度（第7次調査）は、辻本和美・小山雅人を担当者として、昭和57年7月12日に現地着手し、同年11月18日まで行った。

本書では、期間の関係上報告することができなかった56年度調査分も、今回と合わせて報告しておきたい。なお、調査に当って使用した発掘回数・地区割・遺構標示等については、これまで綾部市教育委員会が青野遺跡において実施している方法を踏襲した。

両年度にわたり地元有志の方々や学生諸氏には作業員および補助員・整理員として、困難な作業に従事していただき、また、京都府教育委員会をはじめ綾部市教育委員会・京都府中丹教育局・京都府立丹後郷土資料館・綾部史談会・青野地区自治会等の各機関からは多大の協力を受けた。さらに、調査全般にわたって多くの方々から有形無形の援助があった。調査員一同心より感謝したい。

（辻本 和美）

（1）第6次（昭和56年度）調査

1. 調査概要

調査に当っては、綾部市教育委員会の青野遺跡の調査で使用された地区割りグリッド網^(注2)に従って地区を呼称することにしたが、調査地が道路に沿った狭小な畑地にあるため、地区割りグリッド網に従ってトレンチを設定することができず、幅・方向とも不統一なものとなっ

た。また、62L13と62Q14の間は、昭和51年度に綾部市教育委員会の手で調査されており調査対象外とした。^(注7)

調査地全域に4本のトレンチを設定し、調査を開始した。その結果、確認された遺構は住居跡・溝・土坑・柱穴跡であるが、それらは主に、62N11(S)に限られた。^(注8)62L06(S)・62O12(S)は、旧グンゼ社宅跡及び調査地東隣りが庭園用の植木畑となっているため、遺構はほとんど破壊されていた。

(1) 住居跡

住居跡は、62N11(S)で6基、62T18で1基の計7基を確認した(第44図)。

竪穴式住居跡1 (S B8111)

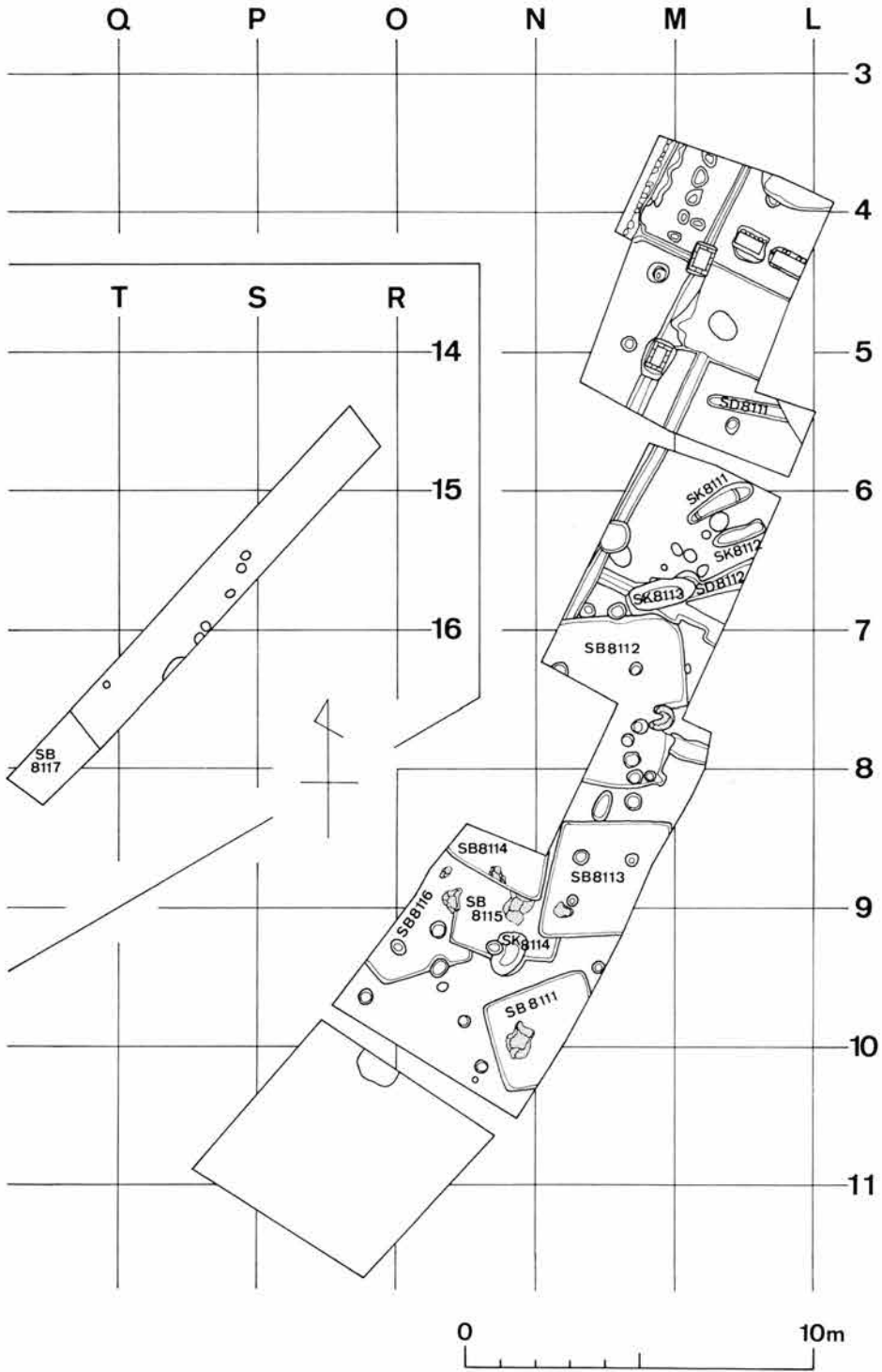
62N11(S)南東隅において検出した北辺3.1m・西辺2.7m程度の方形の小型住居跡であり、壁高0.2m、標高38.70m付近を床面とする。住居跡内部には柱穴は存在せず、西辺中央部付近に焼土塊を認めた。出土遺物は、須恵器片・土師器片・若干の弥生式土器片などである。

竪穴式住居跡2 (S B8112)

この住居跡は、「青野型住居跡」^(注9)と呼ばれる特殊な平面形をなす住居跡で、青野遺跡・綾中遺跡・久田山遺跡などで現在まで30基近く確認されている。用地の関係上西側3分の1は確認できなかったが、東辺4.9m・壁高0.36mから0.4m、標高36.50m付近を床面とする。かまどは東辺中央部に設置されており、焚口は、東辺に直向するほぼ西方向に開口し、住居床面のレベルと同一で、ほぼ平坦である。煙道部分は、後世の削平のため確認できなかった。柱穴は7個確認したが、北側の東西に並ぶ2個の柱穴を基準に南東側1個を割り出し3個を主要柱穴と考えた。各柱穴間の距離は、東西2.3m・南北2.6mとほぼ正方形に近い形となる。各柱穴は、直径0.35mから0.5m程度の円形を呈し、床面からの深さはいずれも0.3m程度である。出土遺物は、かまど付近、住居南東隅床面に集中して見られ、須恵器片、土師器甕(第47図19)・高杯(20)・壺片などが出土した。

竪穴式住居跡3 (S B8113)

S B8112の南側で検出した住居跡で、用地外にあたる東南側住居コーナーを除くすべてを確認した。東西3.2m・南北3.4mを測るやや平行四辺形の住居で、壁高0.15m、標高36.70mを床面とする。かまどは確認できなかったが、住居西南側で焼土塊を検出した。柱穴は3個を確認したが、住居床面が比較的やわらかい砂地のため色の差異を見い出すことができず、残る1個は確認できなかった。各柱穴の直径は0.35mから0.45mを測り、床面からの深さは0.3m程度である。各柱穴間の距離は北側東西1.5m、西側南北1.3mを測る。出土遺物は、西南側に認めた焼土塊中から、ほぼ完形の須恵器高杯(21)や甕片、土師器壺などが出土した。



第44図 第6次調査地平面実測図

そのうち、須恵器高杯は、杯部を下に向け脚部が折れ横に並んだ状態で出土した。

竪穴式住居跡4 (S B8114)

S B8113の西側において、東南側住居のコーナーのみ確認したもので、北側は電柱の基礎、西側は道路となっているため全体の規模・性格等は不明である。壁高0.2m、標高36.60m付近を床面レベルとする。若干の須恵器片・土師器片が出土した。

竪穴式住居跡5 (S B8115)

S B8114の南側で検出した住居跡で、S B8113とS B8114・S B8116と切り合い関係をもつ。住居南辺の一部は現代の攪乱を受けて不整形であるが、住居南辺で3.2mを測る方形プランの住居跡である。壁高0.2m、標高36.60m付近を床面とする。遺物は、住居中央付近と思われるところより焼土塊を確認し、その部分に集中して土師器甕片・壺片が出土した。

S B8114・S B8115は、住居床面が他の住居跡床面に比べ極端な砂地となっているため、色の差異を見出すことが不可能に近く、ともに柱穴を確認することができなかった。

竪穴式住居跡6 (S B8116)

S B8115の西側で検出した住居跡で、S B8115と切り合い関係をもつ。用地の関係上全体の約2分の1を確認した。住居南辺は東西2.8mを測る。壁高0.18mから0.2m、標高36.70m付近を床面レベルとし、東辺中央部付近にかまど跡と思われる焼土塊があり、住居床面レベルと同一である。住居は北側に向かって広がっていてやや不整形なものであり、青野型住居跡の可能性が高い。柱穴は2個確認した。各々直径0.45～0.5mで床面からの深さは、東側柱穴が0.4m、西側柱穴が0.13mを測る。出土遺物は、かまど付近に集中し、土師器甕片・壺片等が出土した。

以上、6基が62N11(S)より検出した住居跡であり、出土遺物から7世紀の住居跡と考えられる。また、切り合い関係をもつS B8113からS B8116は、S B8116→S B8115→S B8114・S B8113と順次建てられたと推定される。

竪穴式住居跡7 (S B8117)

62T18(S)のトレンチの最南端で検出した住居跡で、用地の関係上、北辺の一部しか確認することができなかった。壁高0.6mではほぼ垂直であり、標高36.50mを床面レベルとする。このような深い掘形を有する住居跡は、青野遺跡第4次調査で一例確認されている^(注10)。出土遺物は、古式土師器の一群が住居床面に集中して見られ「庄内式土器」併行期と考えられる二重口縁の壺(第46図10～13)・甕(15・16)・鉢(17)が出土した。

(2) 溝

溝は全部で2条検出した(第44図)。

溝1 (S D8111)

62L06(S)南端で検出したきわめて浅い溝で溝東側は攪乱されていた。埋土は、暗褐色土で、検出面より浅い所で0.06mの深さを有し、底面の最高点を標高36.9mとして東に傾斜していく。出土遺物は皆無である。

溝2 (S D8112)

62N11(S), S B8112の北側で検出した溝であり、一部攪乱されており、溝の始まり部分を確認することはできなかった。検出面より0.3mの深さを有し、標高36.6mを最高底面として東側へ傾斜していく。暗褐色土の埋土に混って土師器細片、拳大の河原石が6個程度出土したのみで住居跡との関係は不明である。

(3) 土 塚

土塚は4か所検出したがすべて62N11(S)からである(第44図)。

土塚1・土塚2 (S K8111・S K8112)

トレンチ東北端で確認した。並行して並ぶ長楕円形の土塚で断面はU字形を呈す。S K8111は、中央部分が一段低くなる。幅0.6m・長さ2.2m。S K8112は幅0.5m・長さ1.6mを測る。ともに検出面より0.3mの深さを有し、標高36.6mを底面レベルとする。内部は、弥生式土器細片を含む暗褐色土によって埋められ、底部付近には、拳大の河原石が4～5個置かれていた。出土遺物は、弥生式土器高杯片・甕片・壺片等が出土した。またS K8112においては、祭祀的要素の強い磨製石剣片(第48図)も1点出土した。

土塚3 (S K8113)

幅0.9m・長さ1.9mの長楕円形を呈する土塚で、S B8112の北側にある。ほとんど垂直に掘り込まれ、底部は丸底を呈する。検出面からの深さ0.56m、標高36.1mを底面とする。前記の土塚に比べて極端に深く、土塚上面0.25mはS D8112と攪乱によって破壊されていた。内部は弥生式土器片を含む褐色粘質土によって埋められ、底部付近には0.2m×0.2mの河原石が置かれていた。遺物は底部付近に集中して見られ弥生式土器(第45図1・3～7)が出土している。

土塚4 (S K8114)

S B8114と現代の攪乱を受け、わずかに底近くしか遺存していない。幅0.8m・長さ1.1mの楕円形を呈す丸底の土塚で、検出面からの深さ0.4m、標高36.4mが底面である。この土塚にも前記の土塚と同様に、底部に0.25m×0.2mの河原石が置かれており、内部より弥生式土器(第45図8・9)が出土した。

以上が、土塚の調査結果であるが、出土遺物が弥生式土器中期の遺物で占められ、土塚内

部に置石や磨製石剣を伴うという土塚墓的な性格をもっている。このような土塚は、西隣りに位置する青野遺跡A地点でも多数確認されている。^(注11)

(4) 柱 穴

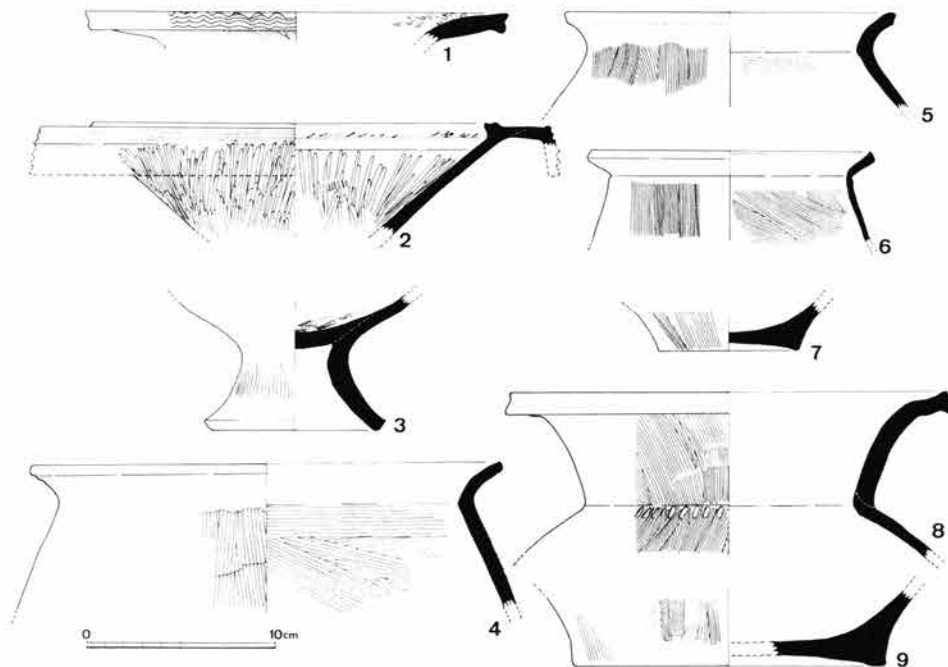
住居跡内の柱穴を除いて、調査地全域で大小のピット21個を検出した。その大部分は柱穴と考えられるが、その配列に規則性が認められず、それらの相互関係は明らかでない。ほとんどのピット内より少量の土師器片が出土した。一部62L06(S)北壁付近で、攪乱により北半分が破壊されたピットより、土師器甕片が出土している。(増田 孝彦)

2. 出 土 遺 物

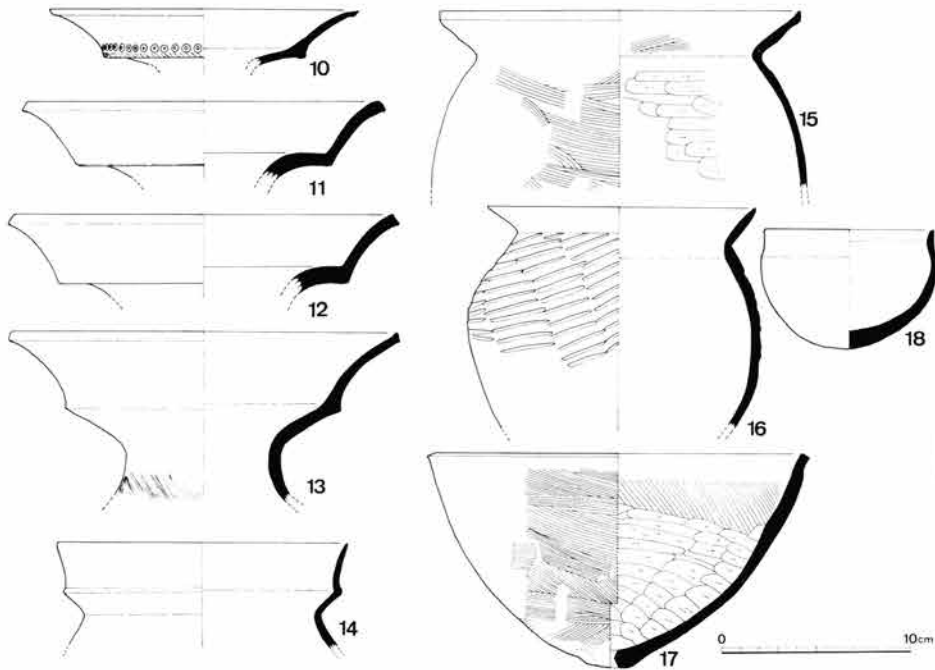
昭和56年度調査での出土遺物は、時期的に3期に大別される。

最古のグループは、弥生時代中期に位置づけられる土塚出土の土器群(第45図)と石剣1点(第48図)である。第45図(1)~(9)の内、(1・3~7)はSK8113、(8・9)はSK8114から出土し、(2)のみがSD8112出土の遺物である。

(1)は、青野遺跡A地点の報告書の分類による壺B^(注12)に属する。口縁端部に下段2本、中段3本の単位で波状文を施し、最後に上段に1本加えている。口縁内面に3段の扇形文を施す。(2)は、シャープに伸びる杯部に、ほぼ水平の口縁部を付加し、端部は下方に幅広く垂下さ



第45図 弥生時代中期の遺物



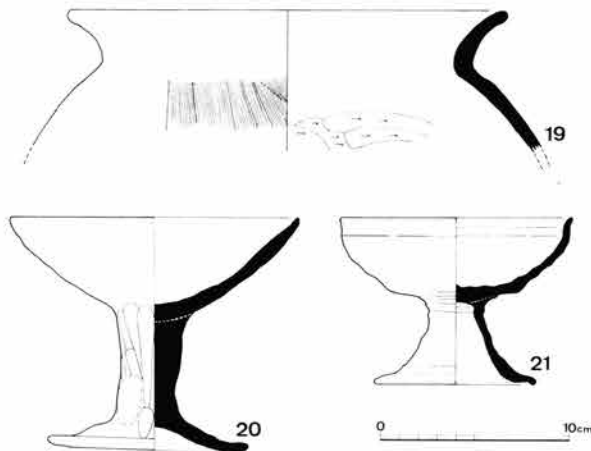
第46図 古墳時代前期の遺物

せ、凹線文を施す。杯部と口縁部の境にやや内傾する凸帯をめぐらす。(3)は、高杯ないし台付鉢である。底部は円板充填法によっている。

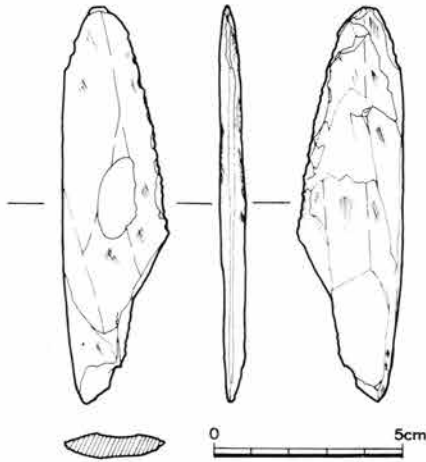
(4~7)は、同一遺構出土の甕片で、いずれも、肩の張らない中期の甕の特徴を示し、口縁部はなで、体部は内外面とも刷毛目調整である。

(8・9)は、同一個体の可能性が高い壺の口縁部と底部である。口縁部はゆるやかに外反するが、端部近くで強いなでによって屈折している。内面は観察不能であるが、外面は縦刷毛調整を施し、体部上端に刺突文が見られる。底部はやや「上げ底」である。

出土遺物の第2のグループは、S B8117出土のいわゆる「庄内併行期」の土器群で、混入の恐れ



第47図 7世紀の遺物



第48図 石 剣 実 測 図

ない良好な一括資料である。第46図の(10～18)に示したように、二重口縁の壺が多く、しかも同一個所に集中していた。

(10)は、二重口縁に竹管文と刻目文を施す、やや軟質の壺である。(11～13)は、いずれも鋭く屈折する二重口縁を有し、口縁端部にはっきりと面をもつ。

甕2点の内、(15)は畿内の「庄内式」甕に著しく類似し、一方、(16)は、同じく畿内の第V様式系統の連続螺旋叩き手法の甕である。

(17)は、鉢形甕である。体部は外上方に立

ち上り、端部は面を成す。底部は小さな平底で両面穿孔である。完形で出土し、口径19.4cm・器高11.4cmを測る。

以上のS B8117出土の一括資料は、近年ようやく出土し始めた青野遺跡の古墳時代前期前半の土器群の中で、編年上重要な位置を占めるものである。本概要報告では、この一括資料は編年上、35U06地点の一括資料の直後、第8次調査の旧河道西岸集落のS B8205の床面遺物(注13)の前に位置づけられるであろうという予察を述べるにとどめ、詳細については、今回図示し得なかった土器小片の検討を終えてから、報告したいと思う。

今回調査地の第3期は、青野・綾中地区に広がる7世紀住居跡群の土器相に一致し、7世紀の前半ないし中葉に位置づけられよう(第47図)。

なお、S K8112から石剣が1点出土している(第48図)。他の土塚からは、弥生中期の遺物のみが出土しており、この石剣もほぼ土器と同じ時期に位置づけられよう。

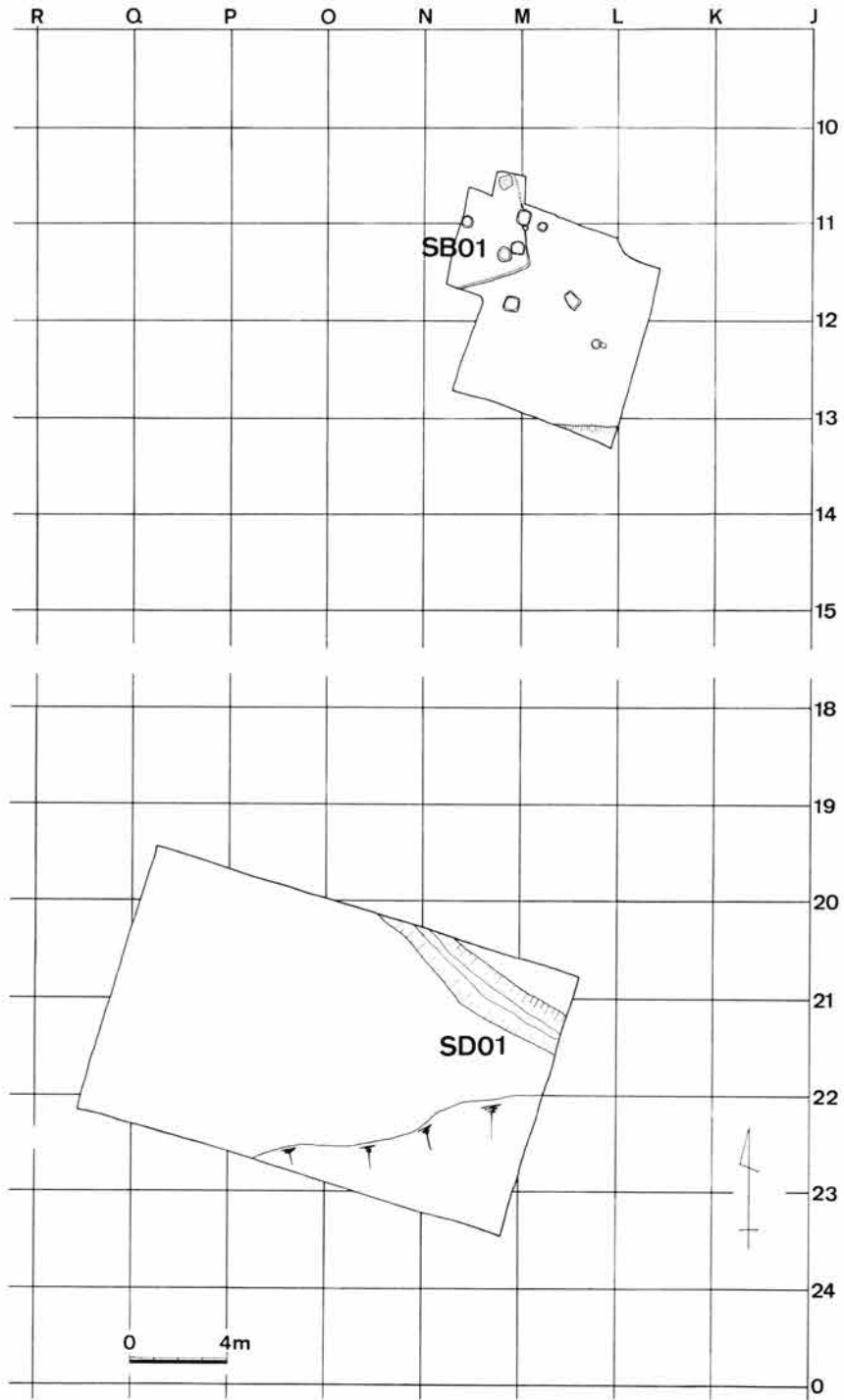
(小山 雅人)

(2) 第7次(昭和57年度)調査

1. 調査概要

2か所の調査地区の内、北のをAトレンチ、南のをBトレンチと呼称する。

Aトレンチは東の道路部分を除いて、全面を調査した。検出した遺構は、平面図(第49図)に示したとおりである。ピット群については、1辺50～60cmの隅丸方形の掘形をもつものと、直径30cm前後の円形の掘形のものがあるが、いずれも建物ないし柵列の平面プランを復原することはできない。



第 49 図 第 7 次調査地平面実測図 (大グリッド : 61区)

顕著な遺構としては、竪穴式住居跡S B8201があげられるに過ぎない。これは、南西コーナーを確認しただけで、若干トレンチを拡張したが東辺4.0m以上・南辺3.2m以上としか言えない。柱穴を1個確認したが、周壁溝はもたない。東南隅に特徴的なかまどをもたないので、青野型住居跡ではない。時期は、床面近くの土器による限り、7世紀後半に位置づけられ、青野・綾中地区の「7世紀住居跡群」に属すると言えよう。

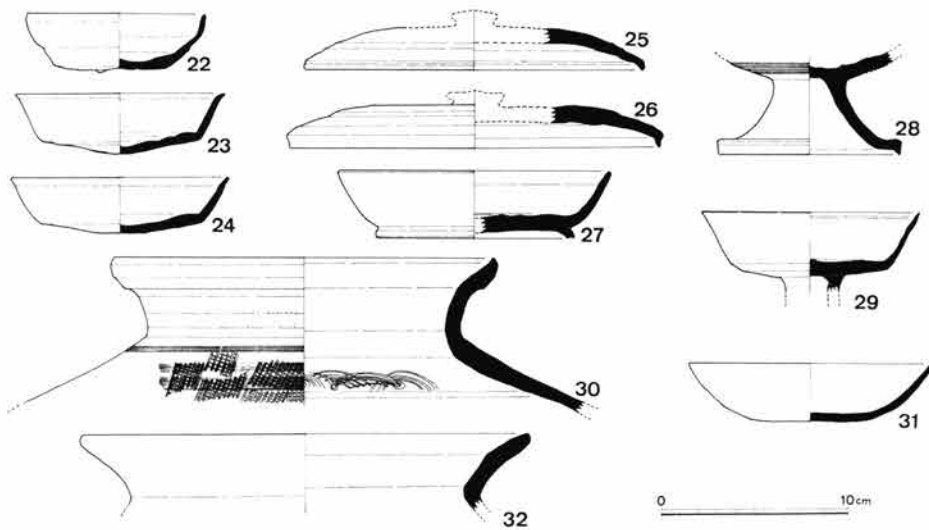
Bトレンチは、調査区域の北辺部をAトレンチと同時期に調査し、残りの堤防の下の部分を、橋脚工事に合わせ、後に調査した。

この調査区域は、大半が近代以降に攪乱されており、北辺から東北部に遺構が残されていたに過ぎない。包含層に若干の土器片が見られたが、顕著な遺構はS D8201のみである。この溝は、青野遺跡第8次調査(建設省の由良川改修工事に伴う調査)^(注15)において検出された溝と同一のものと判断されたため、同一の名称を与えることとした。同調査の第1・第2トレンチでそうであったように、今次のBトレンチにおいてもこの溝から何の出土遺物もなかった。

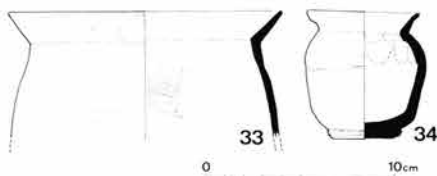
2. 出土遺物

A・B両トレンチの出土遺物は多くない。殆どが包含層の遺物である。

住居跡S B8201出土遺物として、第50図の杯身(22・23・24)と高杯(29)の2種の須恵器がある。これらは、陶邑Ⅲ型式1～2段階に属し、絶対年代で7世紀中葉から後半に位置づけられよう。Aトレンチ出土の他の土器(31・32の土師器以外すべて須恵器)は、いずれも7世紀に属する。



第50図 Aトレンチの出土遺物



第51図 Bトレンチの出土遺物

内外面とも刷毛目調整である。前者は、復原口径14.5cmで、口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめている。調整は、横なでの口縁部以外、中に鉄片が入っていた。

Bトレンチの出土土器（第51図）は少なく、図示したものは甕(33)と完形のミニチュア土器(34)である。前者は、復原口径14.5cmで、口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめている。調整は、横なでの口縁部以外、

ま と め

青野遺跡第6・7次の発掘調査は、10年前調査された青野遺跡^(注16)A地点の北から東にかけての周辺の様相を知る絶好の機会であった。その結果は、この青野遺跡西端部における古代集落の姿を、いささかなりともより明らかにしたものであった。

弥生時代中期の遺構として、第6次調査でいくつかの土坑を検出した。これは、A地点で土坑墓群として性格づけが行われた遺構と一連のものと考えられる。中期の住居跡は今回も検出されなかった。

弥生時代後期に属するものは、今回は見られなかったが、A地点では、殆ど皆無に近かった古墳時代初頭の遺構・遺物に関して、第6次調査でS B8117を検出した意義は大きい。いわゆる「庄内併行期」については、永らく青野遺跡では未確認であったが、昭和55年度の第4次調査で良好な一括資料^(注17)が得られた。これは広大な青野遺跡の南東部であったが、今回はA地点の近くの北西部にあたり、この地区でも弥生時代中期から古墳時代前期頃までは、とだえることなく集落が続いていたことが確認できた訳である。

青野・綾中両町にまたがる「7世紀住居跡群」の最北に位置する一例として、第7次調査で検出したS B8201があり、第6次調査の密集した住居跡も、7基中6基がこの時期に属する。

以上、昭和56・57年度の白瀬橋橋梁改良工事に伴う青野遺跡北西部での発掘調査の概要を報告した。今回割愛した分については、来年度に調査が予定されているもう一か所の調査報告と合わせ、後日詳報を期したい。

(小山 雅人)

注1 釋 龍雄・山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(綾部市文化財調査報告 第2集)綾部市教育委員会 1976

注2 増田信武・中谷雅治・南谷一寿・浪江庸二・藤本昌平・中村孝行『青野遺跡第2次発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第3集)綾部市教育委員会 1977

- 注3 中谷雅治・南谷一寿・浪江庸二・藤本昌平・中村孝行・山下潔巳『青野遺跡第3次発掘調査概報』（綾部市文化財調査報告 第4集）綾部市教育委員会 1978
- 注4 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会）1981
- 注5 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会）1982
- 注6 第6次調査参加者（敬称略）
調査補助員
磯永和貴・黒坪一樹・川西弘一・山田浩和・川端和行・安野真美
西川勇調査作業員
井田宗一・大島昭二郎・赤井克己・太田綱雄・四方泰治・角山利一・四方悠治郎・
西川勇夫・山口誠太郎・黒田康夫・出口貴志野
第7次調査参加者（敬称略）
調査補助員
山田倍生・井上志津光・井上和也・杉山富士男
調査作業員
堀田太士・細井厚志・丸岡 純・佐々木幹男・井上忠久・白波瀬和彦・泉 幸雄・
赤井正美・秋田憲吾・山口誠太郎・藤山増一
整理員
山田菊枝
- 注7 注2 第Ⅱ地点
- 注8 検出した遺構は、綾部市教育委員会の今年度調査分の遺構番号との重複使用を避けるため各遺構とも11番目より開始した。
- 注9 注5 p15
- 注10 注4 p12～p23
- 注11 注1 p35～p38
- 注12 注1 p54
- 注13 注4 p12～p23, p32～p34
- 注14 小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第6冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983 p86～p88
- 注15 注14と同じ
- 注16 注1と同じ
- 注17 注13と同じ

3. 青野遺跡第8次発掘調査概要

1. はじめに

綾部市青野町一帯に広がる青野遺跡は、これまで綾部市教育委員会および当調査研究センター等の計7次にわたる発掘調査によって、弥生時代から古墳時代さらに歴史時代にいたる一大集落遺跡であることが確認されている。

今回の調査は、建設省が計画している由良川右岸の改修工事に伴い、事前に当該地（約4,300㎡）全域についての試掘調査を財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施したものである。

今年度は、遺跡の広がる範囲を確認するとともに、来年度の本調査のための資料を得ることを目的とした。

現地調査は、主任調査員 辻本和美、調査員 小山雅人が担当し、昭和57年7月12日から同年10月20日まで行った。

調査期間中、地元有志の方々、及び学生諸氏には炎天のもと作業に従事していただき、また、各関係機関からは調査全般にわたって多大の協力を受けた。記して感謝の意を表したい。^(注1)

(辻本 和美)

2. 調査地区周辺の考古学的成果概略

旧綾部町（丹波国何鹿郡漢部郷）では、現在まで青野町・綾中町で発掘調査が行われており、以下の遺跡が確認されている。

(1) ^(注2～6) **青野遺跡** 青野町北東部に南東から北西方向に長く広がり、現在桑園と畑地になっている微高地である。昨年度までに6次12地点で綾部市教育委員会と当調査研究センターによって発掘調査が実施され、弥生時代中・後期と古墳時代前期（庄内～布留新段階併行）及び7世紀前半から奈良時代にかけての集落であったことが明らかになっている。

(2) ^(注7) **青野南遺跡** 青野町南西部の住宅地である。昭和55・56・57年度の調査で、7世紀前半以降の竪穴式住居跡群・掘立柱建物群及び柵列等が検出され、特に後二者の遺構群はその配置の規則性・規模の大きさ・遺物の膨大さ等から何鹿郡衙跡である可能性が高い。

(3) ^(注8) **綾中遺跡** 青野町の南に接する綾中町内で検出された住居跡・倉庫跡等を総称する遺跡である。いずれも7世紀に属する。

(4) ^(注9) **綾中廃寺跡** 綾中町の中央部に東西1町・南北1町半の寺域をもつと推定される寺院



第52図 調査地と周辺の遺跡 (1/25,000)

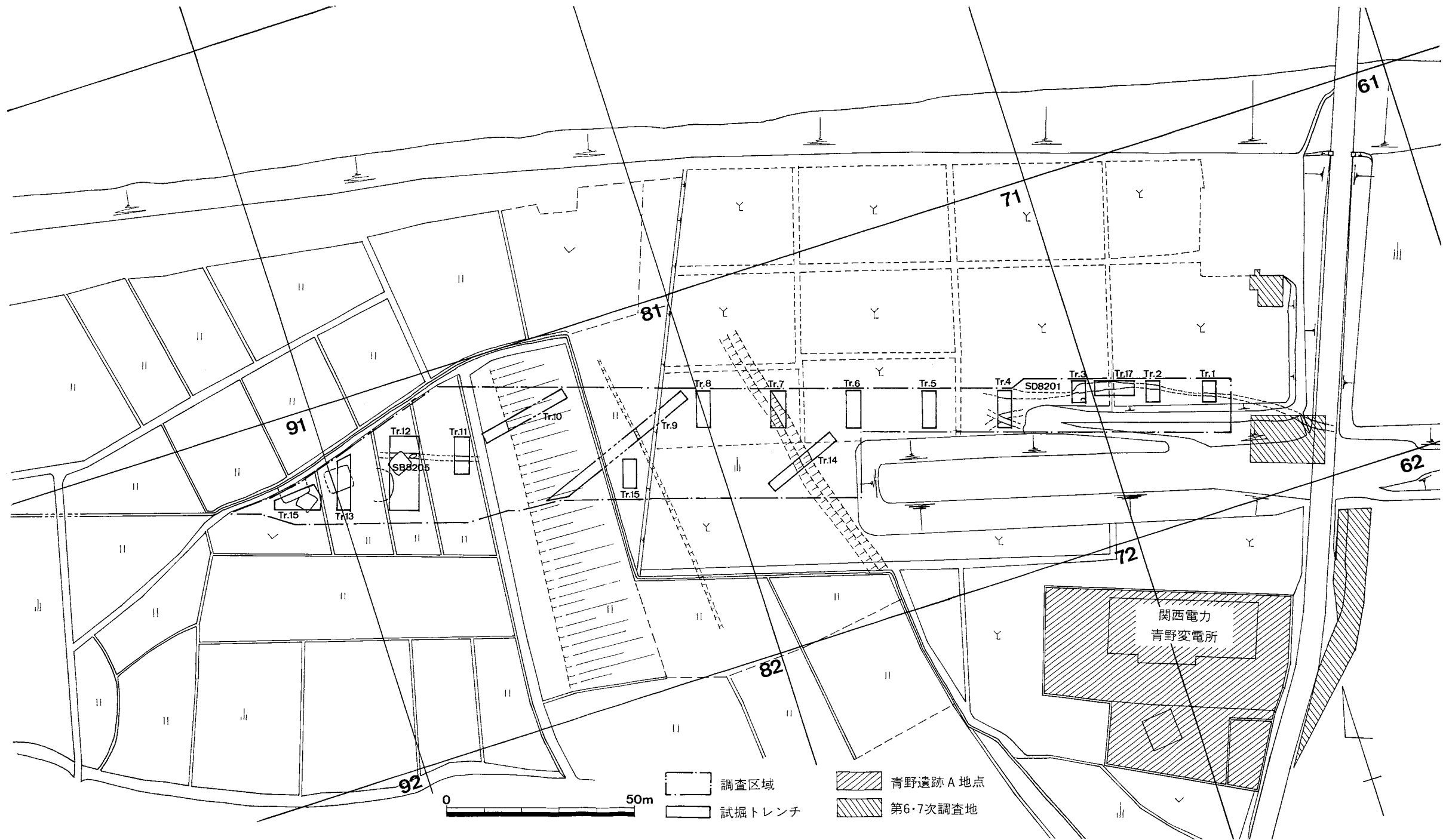
跡である。現在までの4度の調査で、夥しい古瓦・土器等が出土し、建物跡こそ未検出であるが、軒瓦等から見て、7世紀後半でも中葉に近い時期の創建と推定される。

他に、青野町西端に(5)青野大塚古墳(平地に立地する円墳)があり、綾部市街地の西南には、明智平や岡町等の弥生時代の遺跡がある。また、由良川北岸には(6)久田山遺跡と(7)久田山古墳群がある。

青野・綾中両町の遺跡のうち、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構・遺物は、(1)青野遺跡に限られ、5・6世紀の殆ど空白の時代を経て、7世紀に入ると住居跡が急増し、(2)青野南遺跡の推定何鹿郡衙や(4)綾中廃寺に連なるが、これらの遺跡から出土する遺物は9世紀までであり、12世紀の遺構・遺物が現われるまで、再び空白時代があるようである。

今回の調査地区は、由良川の南岸、白瀬橋の西側に位置し、河岸からの距離は約60m、南北30m前後・東西270mを測り、細長く広がる。調査前は、大半が河川敷上の桑園で、西部が水田、西端部が畑地であった。

この区域は、青野遺跡の西北端部にあると推定されるが、周辺では、昭和47年度にA地点(注2)(現在の関西電力青野変電所敷地)、昭和51年度に第2次調査の一環として第II地点(注3)及び昨年度と今年度の第6・7次調査地(注11)が発掘調査され、遺構として、弥生時代中期の溝と土坑墓群、後期の住居跡、古墳時代前期の住居跡と溝、そして、青野・綾中両町に広がる7世紀



第53図 調査地区平面図

の集落の一部が検出されている。

3. 調査の概要

今回の試掘調査にあたっては、調査地区中央を東西に走る中軸線（建設省設定）を基本に、原則として20m毎に幅4mの試掘トレンチを設定したが、平面実測図の作成等には、綾部市教育委員会によるグリッド網を用い、既調査成果との統一を計った。

今回の試掘調査の概要報告においては、各トレンチの概要と主要な遺構と遺物についてのみ略述し、詳細は来年度に予定されている本調査の報告に委ねたい。

(1) 東部地区

第1・第2トレンチでは、トレンチ中央を東西に走るV字溝SD8201が検出されたに過ぎず、遺物も土器細片以外は皆無である。

第3トレンチでは、SD8201の延長部の他にこれによって切られたSD8202を検出した。第17トレンチは、SD8201の様相を見るために設定したもので、この溝は、第17・第3トレンチでは、かなり幅が広がっている。他に数個の柱穴が溝とほぼ平行して並ぶのは、柵列であろう。

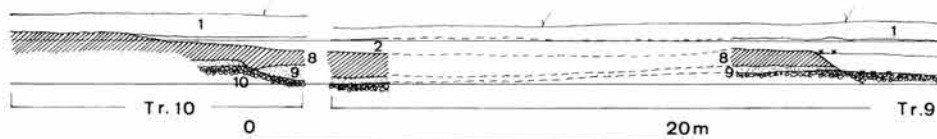
第4トレンチでは、SD8201の延長をトレンチ北端で検出した他に、南部にSD8202の延長と、これを切る溝SD8203を検出した。

第5・第6トレンチでは遺構も遺物も全く検出されなかった。

以上の東部地区の出土遺物の大半は、包含層及びSD8201上層の7世紀後半～8世紀の須恵器と土師器の破片であるが、SD8201の中層からは、第17トレンチで太型蛤刃石斧1点と第3トレンチで弥生時代中期(第Ⅳ様式併行か)の壺形土器(注12)が1点出土した。またSD8202最下層からは弥生式土器細片、SD8203からは8世紀前後の須恵器・土師器片が出土している。

(2) 中央地区

第7トレンチ以東、第10トレンチまでを中央地区と呼ぶ。小字名もここを境にして東方が「西吉美前」、西方が「上ふけ」となっている。第7トレンチで南西方向への地山の傾斜を確認し、第18・第15トレンチでは地表下1mまで掘削してもシルト層が続くだけであった。そこで、当初設定した第9・第10・第14トレンチを地山の傾斜方向、すなわち推定流路と直交する方向に変更し、重機によって掘り下げた。地下水の噴出や壁面の剝落によって、調査は困難を極めたが、第54図に示したような堆積土の様相が知られ、自然流路NR8201と命名した。第14トレンチの中央で2段の河岸を検出した。河岸から河底までの幅は約6mである。河底の礫層(10)は西方へ34m続き、第9トレンチの中央で黄褐色砂質土(8)に出会い80cmの



第54図 旧河道断

段差から、今度はこの土層を底にして、第10トレンチ西部の西岸まで約20m遠浅が続く。

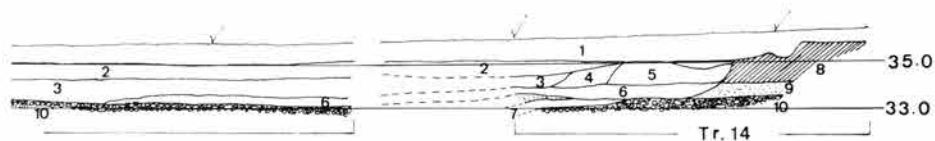
NR8201から、時期的に2群に分れる遺物が出土している。第9トレンチの段差のすぐ東の礫層(10)から、コンテナ1箱分の須恵器・土師器片が出土している。また、この段差以東の埋土(第54図の第3層)の上面には瓦器・土師器片が若干見られた。以上の層位と遺物の関係から、この流路は、9世紀までは流れていたが、その後しばらくして流れが止まり、平安時代後期か鎌倉時代までにはほぼ埋まり、中世には低湿地帯であったと推測される。第1層は3期の水田層から成り、出土した瓦片や、染付等から、近世以降は水田として利用されていたことが判る。

(3) 西部地区

第11トレンチから以西を西部地区と呼ぶ。ここは流路NR8101の西岸で、南から張り出して来る三角形の台地の先端で、小字「上ふけ」の西北部にあたる。第11・12・13・16トレンチのいずれにおいても、耕作土を10~20cm掘削しただけで遺構面(NR8201断面の第8層)に達した。清掃後の観察によって、住居跡らしい円形や方形の土色の変化を5か所、溝2本、その他トレンチ際で住居跡の辺ないしコーナーを3か所検出した。しかし、これらの遺構の調査は来年度の本調査に委ね、今回の試掘では、その資料とするため、ほぼ全形がトレンチ内に入っているSB8205を選んで、これを完掘するにとどめ、その後、埋戻しを行った。

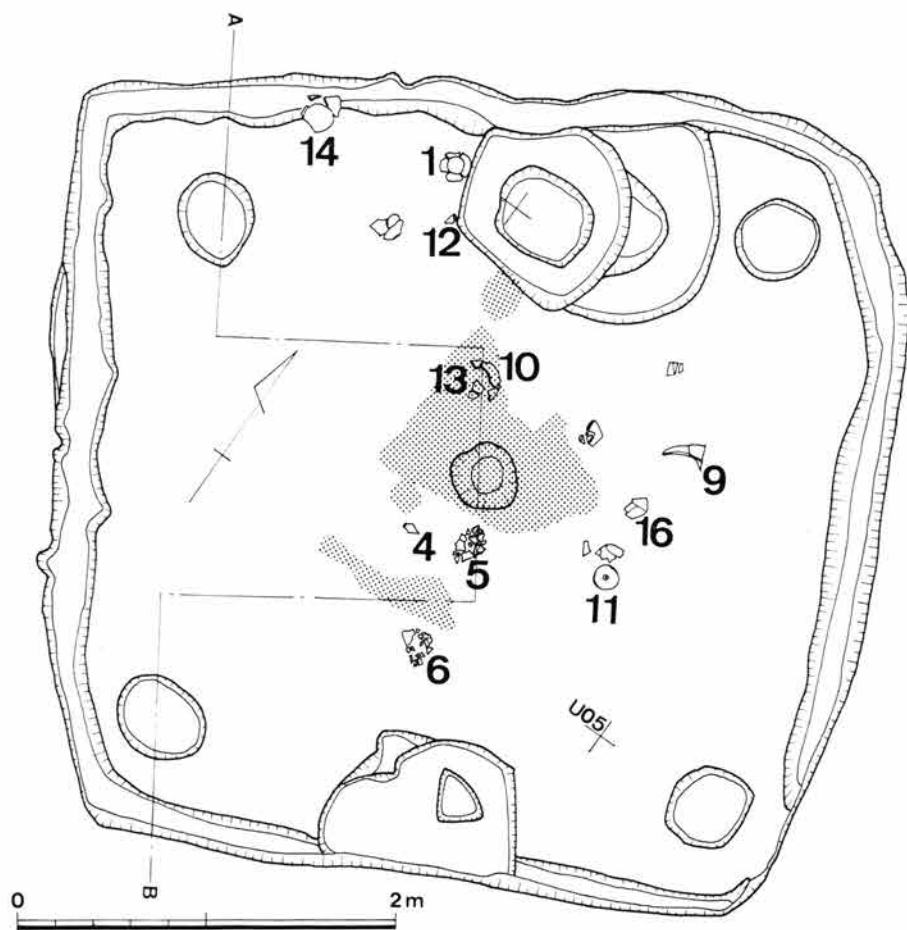
竪穴式住居跡SB8205(第55図)は、各辺、東4.0m・南3.3m・西3.75m・北4.0mを測り、幅20~30cmの周壁溝をもつ。床面が検出面から平均6~8cmで、かなりの削平を受けている。床面は、硬くしまり、四隅のかなり外寄りに4個の柱穴がある。柱穴間の距離は東辺から時計回りに、各々3.0m・2.95m・2.65m・3.0mを測る。床面中央に直径35cmの円形の凹みを呈する炉跡があり、焼土塊1個と炭が周辺にまで広がっている。南辺と北辺の壁に接して、大きなピットが掘られており、北辺のそれは一度掘り直しが行われたらしい。ピットはいずれも2段に掘られている。

床面には遺物が散乱していた。第56図に実測可能なすべての土器を図示した。床面の遺物として取り上げたのは、遺構平面図(第55図)に番号を付した11点であるが、床面が上述のように浅いので、他の土器も床面近くの遺物と言える。土器の表面は保存が悪く、調整手法

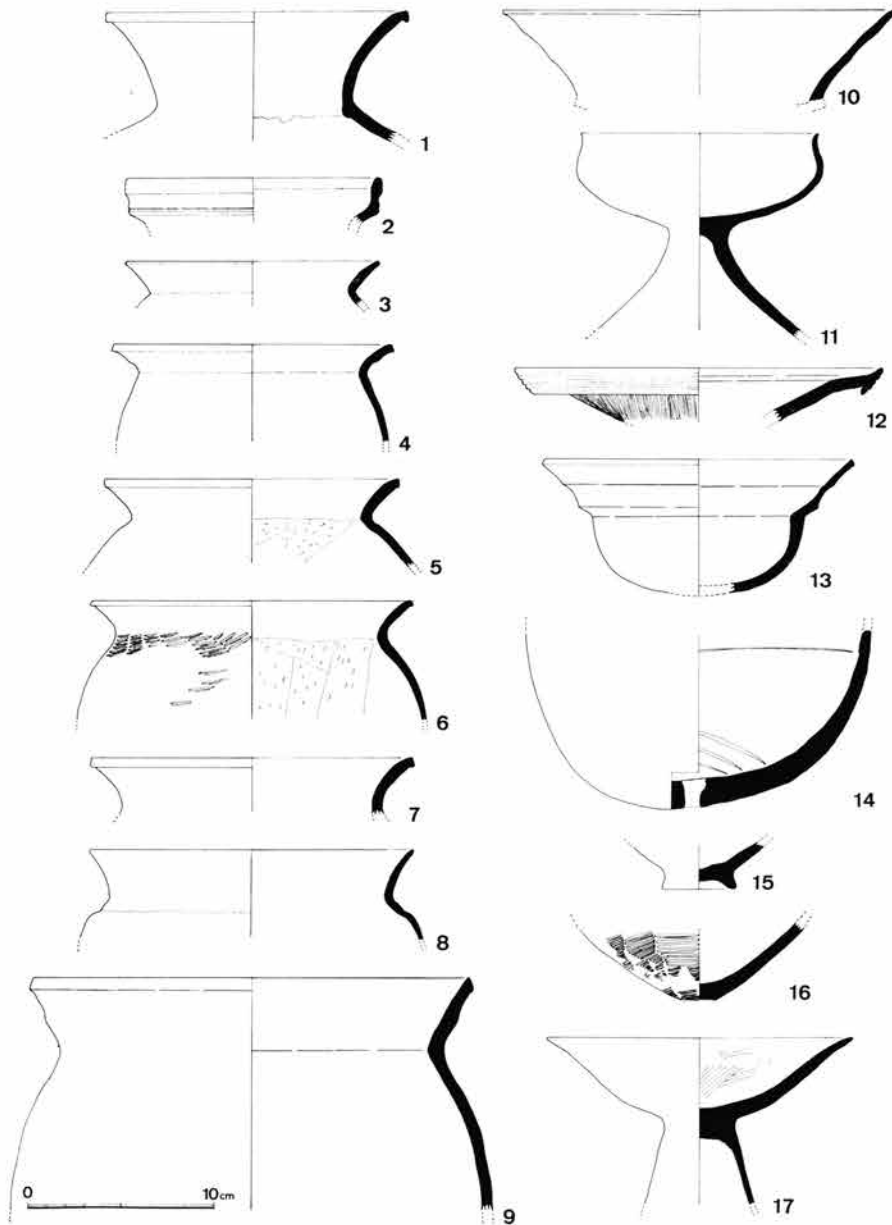


面実測図

等を詳らかにできるものは少ない。胎土・焼成はほぼ同じで、砂粒をかなり含み、軟質のものが多し。しかし(10)と(12)だけは、胎土も精良で、硬質に焼成され、共に篋磨き調整を主とする美しい土器である。土器個々については、来年度の本調査の報告に譲りたい。これらの土器は、古墳時代前期に属し、「庄内式」併行期古段階の青野遺跡35U06地点の一括資料^(注5)に後続し、布留式併行の35W03地点の土器群^(注5)に先行するものであろう。住居跡床面の良好な一括資料であり、今後の青野遺跡の弥生～古墳時代前期の土器編年上重要な位置を占める。



第55図 竪穴式住居跡 SB8205



第56図 S B8205 (1~16)・S B8202 (17) 出土遺物

S B8205の南西には円形住居跡S B8206があり、清掃中に小型の鉢^(註12)が出土している。また、第16トレンチのS B8202からは、これも清掃中に完形に近い布留式の高杯(第56図17)と小型丸底壺^(註12)が出土した。このように西部地区は、弥生時代後期～古墳時代前期の集落の一部である。

4. ま と め

(1) 自然流路NR8201について

青野町を空から見ると、現在の丹波大橋のあたりから、今回の調査地区へ向って、綾部用排水路に沿って湾曲しつつ、西南の住宅地と東北の微高地の畑地の間を文字通り帯のように水田地帯が走り、鮮やかなコントラストを見せている。この帯状の地区は小字「館ノ後」^{かみいり}「上入ケ口」^{ぐち}「下入ケ口」^{しもいり}及び「上ふけ」の西部に相当し、地名でも他と区別されている。そして、地理学の立場から由良川旧河道と推定されてきた。

青野遺跡第2次調査の第Ⅸ地点は、この帯状の水田域であり、ここでも、今回の調査結果と同じく、厚いシルトの堆積が確認されている。従って、NR8201は、現地形と発掘調査によって知られた規模の大きさ等から、由良川旧河道と結論できよう。

この旧河道の下限は、上述したように9世紀中に求められるが、上限に関しては直接的な証査はない。断面図第8層の黄褐色砂質土層は、現在まで数次にわたる青野遺跡の調査において、弥生～古墳時代のベースとされている層である。旧河道が生まれる以前、ここにも第8・9層が堆積していて、ある時期にそれをえぐる形で流路が生じたとする想定については、第5・第6トレンチ、すなわち東岸から約40mの間は全く遺構・遺物が見られず、遠浅の西岸でも第11トレンチの溝SD8204以外の遺構はなく遺物も皆無であったことから、否定できよう。遺構が流失したことも、遺構面のレヴェルから考え難い。すなわち、人々がこの地に住み始めた時、既に川がそこに存在したと考えられるのである。

従って、むしろ青野遺跡が立地する微高地が、この旧河道の右岸、つまり流路のカーブの外側に沿って形成されていることからすれば、この旧河道によってこの自然堤防が形成されたと思われる。つまり、弥生時代に青野に集落が営まれた時に存在した川はこの旧河道であり、自然堤防の微高地帯も安定した状態にあったと考えられる。

(2) 今回の調査結果と今後の展望

東地区の調査において弥生～古墳時代の遺構・遺物がはなはだ貧弱であったことは、この辺が青野遺跡の北限であり、また旧河道の確認によって西限も画されたと言えよう。

少なくとも弥生時代から平安時代初期まで由良川が青野遺跡の西南に沿って流れていたとすれば、この大集落が中洲に立地していない限り、北の久田山遺跡及び古墳群とは陸続きであったはずで、両遺跡の関連がクローズ・アップされてこよう。また、郡衙跡と推定されている青野南遺跡や南接する綾中廃寺も、現在ほど由良川から離れていなかったことになる。

さらに今回初めて確認された由良川旧河道西岸の集落は、来年度全面発掘が行われるはずであり、この集落とその南西250mにある青野大塚古墳との関係も、今後考えていくべき興

味深い課題である。

なお、今回検出した西部地区を含め、遺跡の存在が推定される旧河道以西を「青野西遺跡」と呼称することとしたい。(小山 雅人)

注1 調査補助員

木戸裕美・森 一九・藤井理絵・八木橋康弘

調査作業員

四方泰治・大槻幸作・山口誠太郎・藤山増一・高島 稔・藤山英樹・高野興一・梅原 浩・鈴木尚也・片山秀樹・西岡達也・稲葉範生

整理員

木戸裕美

調査協力

京都府教育委員会・綾部市教育委員会・京都府中丹教育局・府立丹後郷土資料館・綾部史談会・青野地区自治会

- 注2 釋 龍雄・山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(綾部市文化財調査報告 第2集)綾部市教育委員会 1976
- 注3 増田信武・中谷雅治・南谷一寿・浪江庸二・藤本昌平・中村孝行『青野遺跡第2次発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第3集)綾部市教育委員会 1977
- 注4 中谷雅治・南谷一寿・浪江庸二・藤本昌平・中村孝行・山下潔巳『青野遺跡第3次発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第4集)綾部市教育委員会 1978
- 注5 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
- 注6 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注7 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注8 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注9 中村孝行・小山雅人「綾中廢寺跡第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
- 注10 大槻真純『久田山』(綾部市文化財調査報告 第5集)綾部市教育委員会 1979
- 注11 小山雅人・増田彦彦「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注12 「青野遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.82-09)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 第4図(S B 07 を S B 8202 と改称する他は、遺構番号に82を付し4桁とする。)

4. 中山城跡発掘調査概要

1. はじめに

京都府土木建築部道路建設課では、一般地方道西神崎上東線道路改良に伴う道路拡幅工事を進めており、由良川河岸に路肩が最も接近する舞鶴市中山字本丸にある八雲橋付近は、工法の関係上、川側と反対の丘陵崖面を削って拡幅工事を行うことになった。

当該地には室町時代後半から安土桃山時代にかけての山城跡である中山城跡が存在する。今回その一部が道路拡幅工事によって削平されることになった。そのため、各関係諸機関と協議の結果、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが 事前に発掘調査を実施し、記録保存をすることになった。

現地調査は当センター主任調査員 辻本和美、調査員 竹原一彦・藤原敏晃が担当して、昭和57年12月8日から昭和58年3月31日の期間で発掘調査を実施した。なお、当地域は冬期にはいと降雪が続くことから、発掘調査は途中で一時中断することとし、第1次（昭和57年12月8日～12月28日）・第2次（昭和58年2月22日～3月31日）の調査を実施した。

中山城跡の調査は来年度も引き続き予定されているので、今回は調査の概略のみふれることとし、詳細な報告は昭和58年度の発掘調査終了後に譲りたい。

調査期間中、地元地区有志の方々^(注1)および学生諸氏^(注2)には、寒風の中で作業に従事していただいた。また、調査全般にわたって各関係諸機関より多大の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

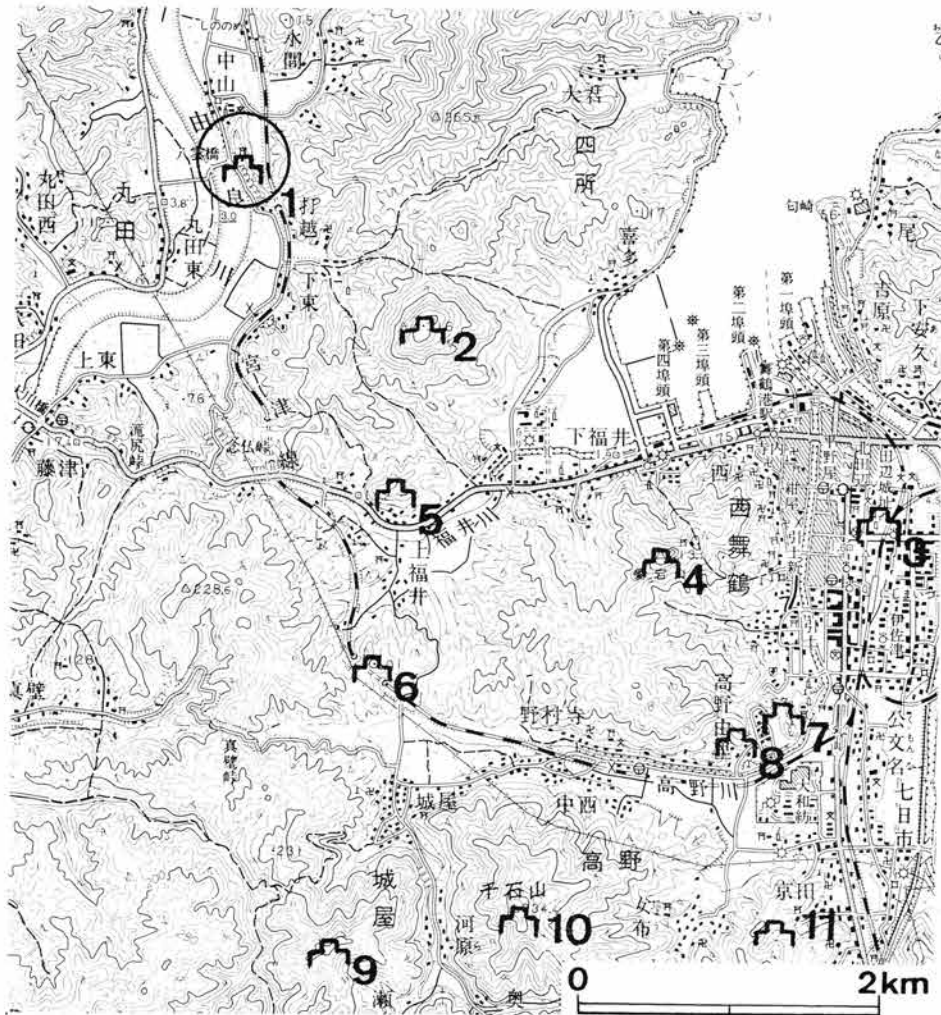
調査協力

京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会・京都府中丹教育局・府立丹後郷土資料館・京都府舞鶴地方振興局・舞鶴土木工営所・本田良友（元舞鶴市議会議員）・大橋専二（元中山地区区長）・奥野敏郎

2. 中山城跡の位置と略沿革

丹後の中世山城は、天正13（1585）年細川忠興の舞鶴城（田辺城）の築城により、その戦略的役割を終える。今回発掘調査を実施した中山城も戦国乱世の中から生まれた山城のひとつである。

城跡は、若狭湾にそそぐ由良川の河口から約5km程遡った右岸に位置する。城の主要部は、東方の山塊から由良川筋に派生する最高所の標高約60m・南北長さ約600m・東西幅約150m



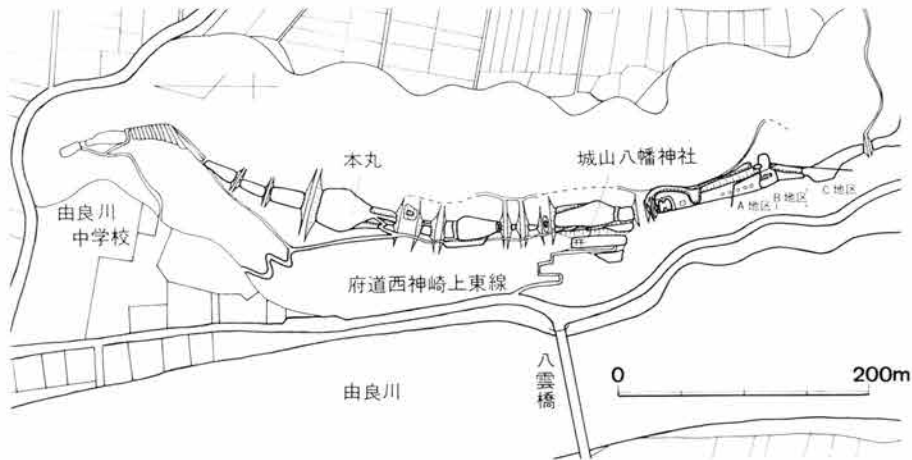
第57図 中山城跡と周辺の城館跡

1. 中山城
2. 建部山城
3. 舞鶴(田辺)城
4. 田辺山城
5. 福井城
6. 福井城
7. 引土(茶臼山)城
8. 高野由里城
9. 城屋城
10. 千石山城
11. 女布(白雲山)城

程の舌状に延びた丘陵上にある。丘陵の西側は急傾斜で落ち込み、その山脚は由良川で洗われる。北および東側は現在水田となっているが、由良川の水位上昇のおりには常に冠水する低湿地である。特に東側の水田は滞水状態であり、自然の堀の役目を果している。丘陵の南側は打越峠から尾根続きで外方に通じており、城の搦手の役割を果している。

丘陵の中腹には現在城山八幡社が祀られており、その上方に尾根稜線を利用して、本丸以下の曲輪・空堀・土塁を連郭式に配している。

この城は、当城から東南方向約1.8kmの建部山山頂に所在する建部山城の支城とみられ、



第58図 中山城跡概略図

建部山城最後の城主一色義道が、細川・明智両軍の丹波・丹後征討により、その最後を遂げた所であると伝えられる。^(注3)細川氏は田辺城に本拠を置き、中山城には家臣の沼田勘解由左衛門清延が城主として配せられた。細川氏はその後、慶長5（1600）年の関ヶ原合戦の功により、九州小倉39万石の領主として転封された。そのため沼田氏も行動を共にし、当城は廃城となった。（辻本 和美）

3. 調査経過

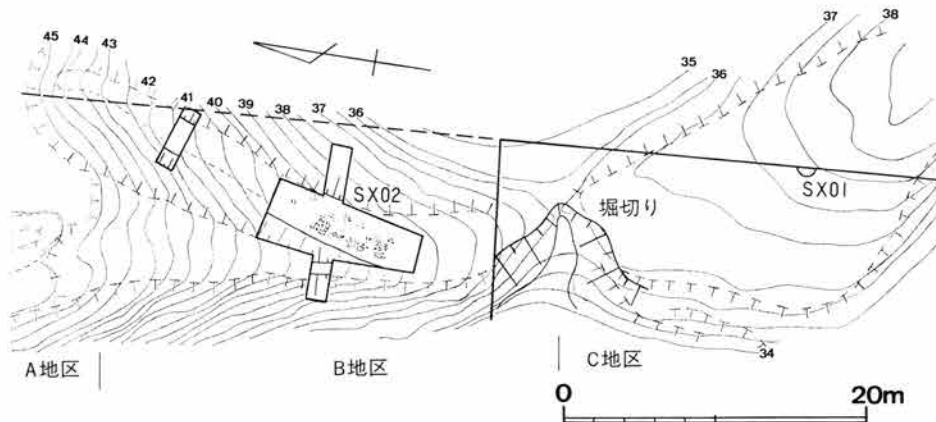
調査地は立地状況から3地区に分割し、北からA地区（北側テラス）・B地区（中央傾斜地）・C地区（南側テラス）とした。今回の発掘調査はB地区とC地区の2か所であり、A地区は昭和58年度調査に譲ることになった。なお、A地区のテラス上には近世初頭頃と推定される一辺1.5～2mの方形土饅頭の墓が、6基連続して一直線上に並んでいる。

調査開始にあたり、調査地全域の伐採作業を実施した。その後、C地区全域の掘り下げを行った。また、B地区においても2か所のトレンチを設定した。調査の結果、C地区において調査地中央東端部より火葬墓（SX01）を検出した。B地区では尾根頂部の東側一段下がった所に曲輪が存在し、この曲輪の中央部から集石をもつ火葬墓（SX02）を検出した。また、B地区とC地区の境界部には、西方に大きく開口する堀切りが認められた。

4. 検出遺構

(1) SX01（第59図）

C地区中央部東端より検出された火葬墓である。遺構は東半分が調査地外へ延びるため全



第59図 調査地平面図

様はつかめないが、現存長径約1.0m・短径約0.6mであった。この遺構は地山を浅く皿状に掘り窪めており、深さは約30cmであった。底部は良く焼けた状態を示し、その上部に大きな炭を残す灰層が約5cmの厚さで溜っていた。この灰層中に骨片が若干量存在したことから、この焼土遺構は火葬墓と判断した。

(2) SX02 (第60図 図版第28-(1))

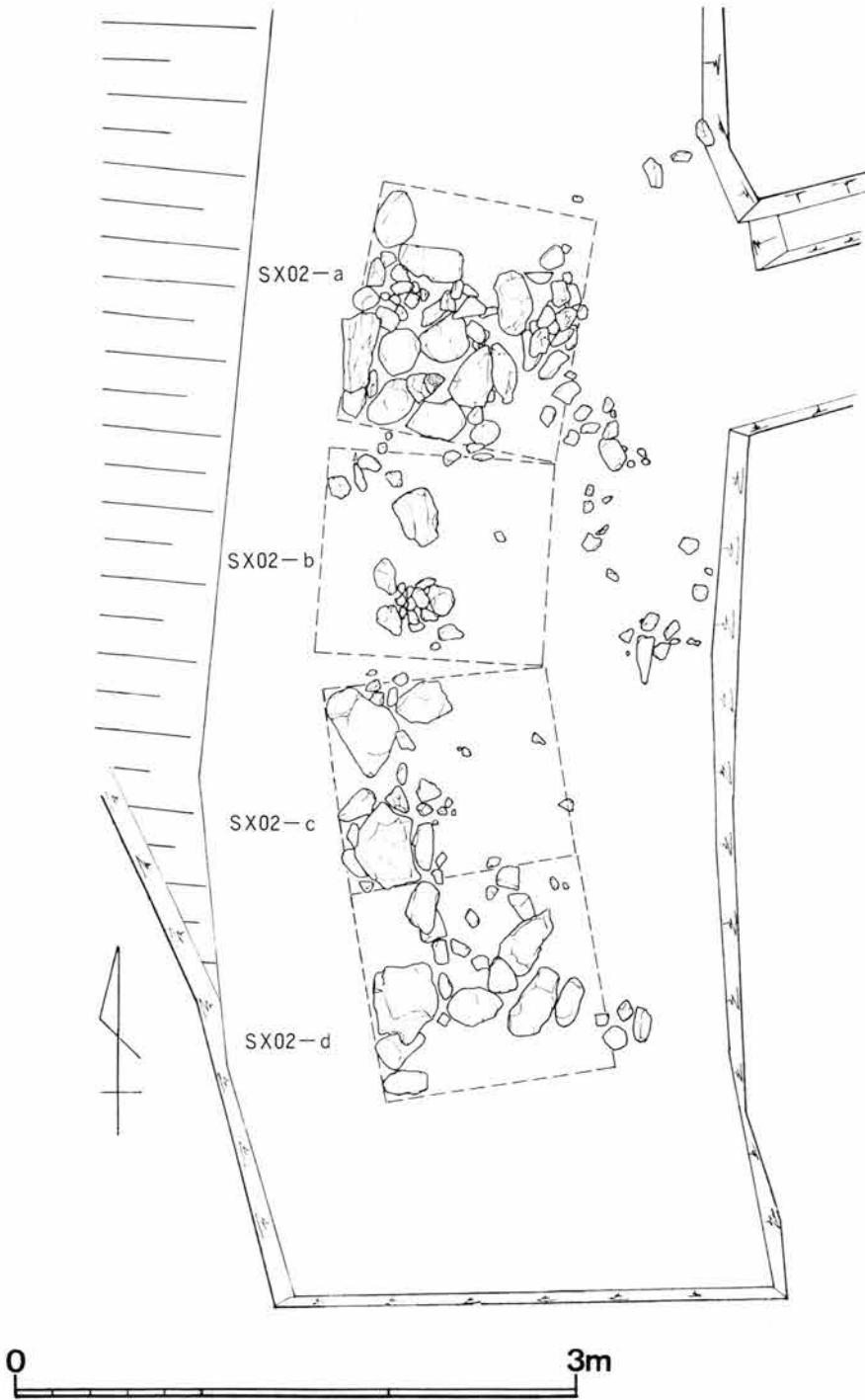
B地区の曲輪部で検出した配石遺構である。現在完掘までいたっていないため、詳細は不明であるが、火葬骨が存在したことから火葬墓と考えられる。集石の状況から埋葬主体部は4基存在するものと推察される。北側よりSX02-a・b・c・dと仮称する。

SX02-a 東西約1.3m・南北約1.2mの範囲にわたって、人頭大から拳大の自然石を配した遺構である。北と南東部分の石は失われたものとみられるが、南西部分の配石は構築当時のままとみられ、ほぼ直角に近い状態で残っている。集石の中に石臼と五輪塔の破片が存在している。北東コーナー付近より土師皿片が出土した。

SX02-b 平面形は一辺約1.2m程度の方角を呈すると考えられる。元はSX02-aと同様に集石があったと思われるが、現在そのほとんどが失われており、所々に小規模な集石が認められるだけである。中央部分より火葬骨の小片が少量出土した。

SX02-c 平面形は一辺約1.2m程度の方角を呈すると考えられる。西側半分集石が残存しており、比較的大きな自然石を北西と南西コーナーに配置している。中央部より火葬骨が少量出土した。

SX02-d 平面形一辺約1.2m程度の方角を呈すると推定される。南西コーナーの配石は面をそろえているが、他の3か所のコーナーの石は失われていた。また中央部には人頭大の自然石が比較的ままと残っている。



第 60 图 SX02 平面图

(3) 堀切り (第59図 図版第28-(2))

B地区とC地区の境界部分に存在する。丘陵を西側の由良川に面する方向から、約5m近く切り込んでいる。丘陵を完全に切り通してはおらず、尾根の頂部東端で掘り終っている。堀切りに対する東側には顕著な堀切りは認められず、丘陵の狭部を最大限に利用している。

5. 出土遺物

今回の調査において出土した遺物は、そのほとんどが江戸時代以降の遺物であり、その数量も少数であった。遺構に伴う遺物としてはS X02-aの土師器皿が唯一の遺物であった。

6. ま と め

今回調査を行ったC地区は、推定では中山城跡の最南端に位置し、本城の建部山城跡へと丘陵が続くことから、このテラス部に何らかの施設が存在するものと当初予想されていた。しかし、今回の調査では建物等の検出はできなかった。調査地外の東南方向に一段高まった小テラスが存在することから、その地に城跡の一面が確認される可能性がある。

C地区において唯一の遺構であるS X01は、その全様が不明であり、遺物の出土も皆無であった。現在この遺構に関しては2通りの解釈が考えられる。ひとつは骨片の出土をみたことから火葬墓と考えられる。B地区に火葬墓が存在することからも火葬墓である可能性が高い。もうひとつの解釈は火葬場とする考えである。骨片の出土が少量で時期が不明であるが、S X02等の火葬墓と時期が同一とすれば、S X01が火葬場であり、S X02が埋葬場と考えることもできよう。S X02に関しては調査中でもあり、考察は昭和58年度調査終了後に譲りたい。

昭和58年度の調査はA地区に主眼をおくことになるので、方形土饅頭の高古墳及び古墳とS X02との関係等が判明する可能性がある。(竹原 一彦)

注1 調査作業員

坂本太郎・坂本弥寿男・坂本達雄・佐織利夫・坂本節子・岡野晴子・小池小夜子・佐織なみ子・小谷みち子・山下美津子・丸山和美・橘いよ子・谷田ふじ枝・大田美代子

注2 調査補助員

藤田公德・藤井謙志・永野計一・本田敏子

整理員

白波瀬正幸

注3 『田辺府志』1709

『田辺旧記』1852

『丹哥府志』1841

5. 古殿遺跡発掘調査概要

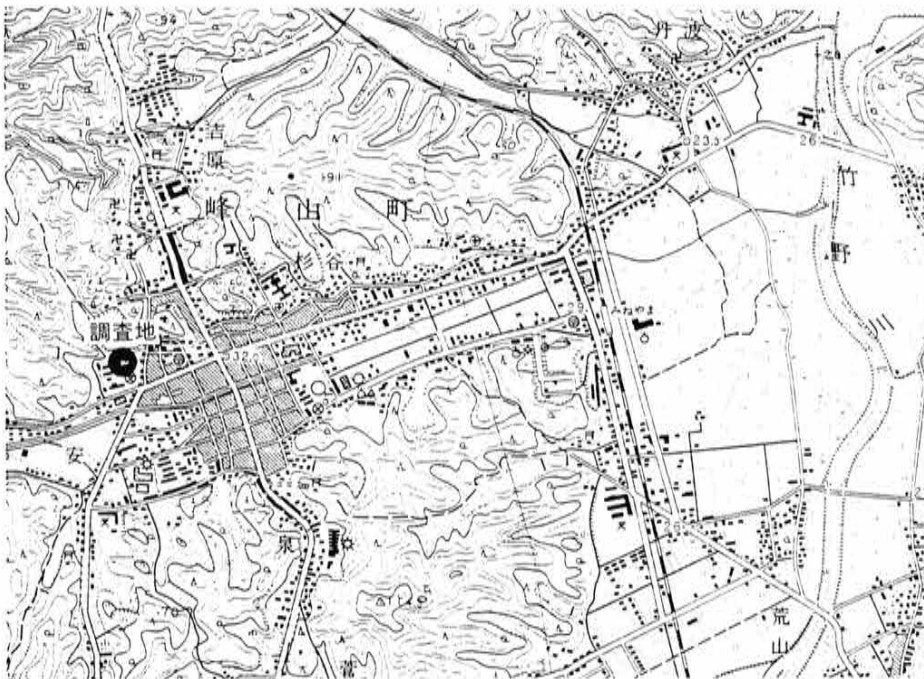
1. はじめに

京都府教育委員会では、中郡峰山町字古殿1118番地に所在する府立峰山高等学校の校舎増改築工事を計画した。この工事によって地下に眠る埋蔵文化財の現状に著しい影響が及ぼされるということで協議を重ねた結果、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが委託をうけ発掘調査を行い、遺構・遺物が検出された場合、その保存を図るための資料を作成することとなった。

発掘調査は当初昭和57年7月1日から同9月30日までの予定であったが、途中調査地区が追加されたこともあって、最終的には10月30日までを費すこととなった。

本調査を行うにあたっては峰山町教育委員会・府立丹後郷土資料館をはじめ地元関係機関、峰山町長岡地区をはじめとする地元作業員・学生諸氏の他、数多くの方々の御協力・御指導を賜わった。^(注2)この場を借りて謝意を表したい。

なお、調査によって得た資料は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土製品・木製品・石製品などの遺物群と、旧河道・住居跡・排水施設などの集落内遺構が中心であるが、その



第61図 調査地位置図(1/50,000)

質・量とも膨大であり、コンテナバット数百箱に及んでいる。現在木製品の内整理の進んだ一群については保存処理作業中であり、土器も整理作業を継続中である。そのため、ここでは現在までに明らかになっている調査のあらまし及び、遺構の概要を報告するに留め、正式な遺構・遺物の報告及び、関連分野での分析等については、次年度報告することとした。

2. 調査の経過

古殿遺跡は、京都府の北部、丹後半島中央部の中郡峰山町内に設置されている府立峰山高等学校の敷地を中心とした南面する丘陵上に所在する。

丹後半島は、いわゆる丹後山地を形成している標高500～600mの山々が連立し、その山間を縫うように野田川・竹野川・福田川・早川・佐濃谷川・川上谷川等の大小河川が北流して日本海にそそいでいる。

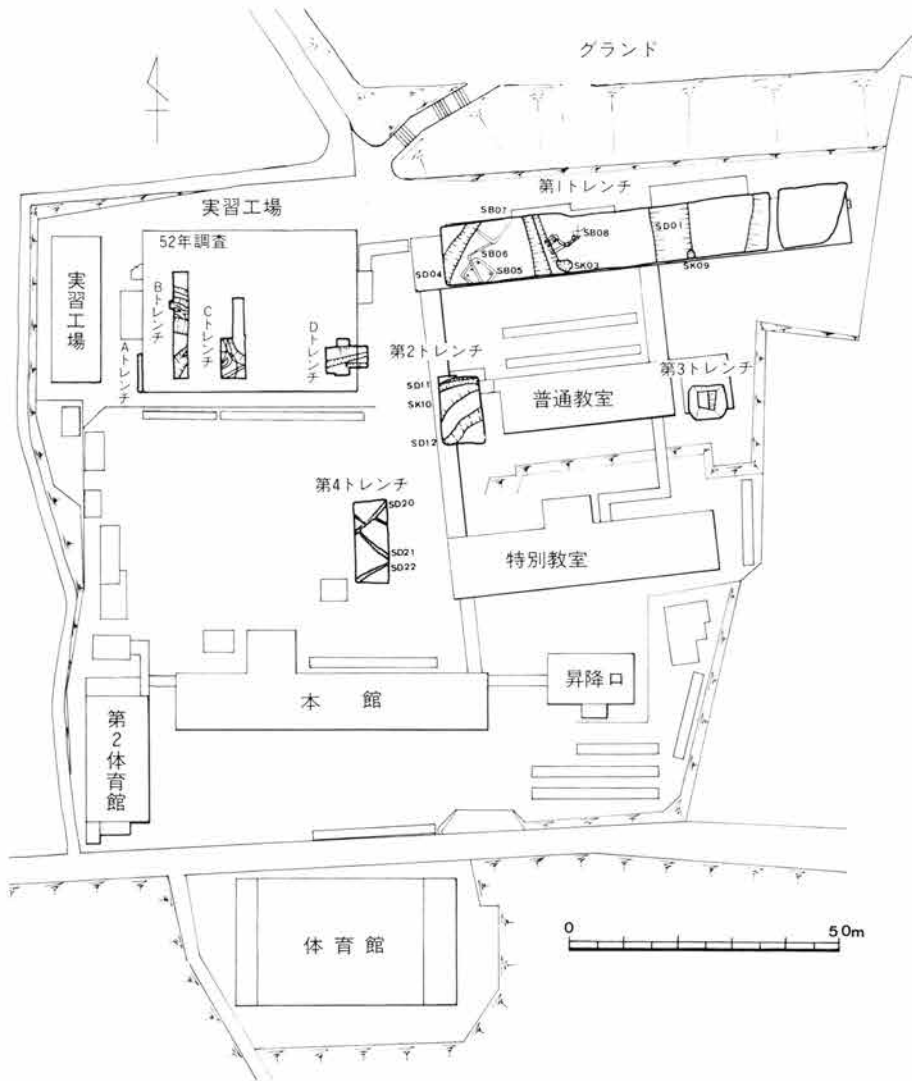
中でも竹野川は、丹後山地の主峰高尾山（標高620.2m）、鼓ヶ丘（標高569m）に源を発し、大宮町・峰山町・弥栄町・丹後町を流れ、全長31kmにも及ぶ丹後地方最大の河川であり、その流域には古殿遺跡とともに数多くの遺跡が確認されている。

古殿遺跡は昭和52年、府立峰山高等学校の校舎増改築工事に伴う調査によって発見された遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期及び平安時代後期～鎌倉時代にかけて断続的に営まれた集落跡であることが確認されている。

今年度の調査地は、前記調査地の東部及び東南部に位置し、合計4か所の調査トレンチ（1731㎡）を設けた。調査は昭和52年度の調査による成果から、遺構面がかなりの攪乱をうけているものと判断し、まず重機によって包含層上面までの整地層の取り除きから始めた。その結果、調査地西部では現地地表下0.3mから黒褐色の遺物包含層がほぼ確実に遺存しており、東半部では攪乱がはげしいことが確認された。そのためまず、第1トレンチ東半部及び第3トレンチの調査を先行させることとし、第1トレンチ西半部の後に第2トレンチを調査することにした。各トレンチの遺構面は現地表面からそれぞれの深さで確認されたが、全体として西北から東南へ、上流からの堆積が認められる状況である。2条の丘陵端部を切土し、両側の谷地形が自然に堆積していったある段階で人工的に盛土し、平坦地をいくつかのブロックに分けて造成している状況が観察できた。第2トレンチ調査中のある段階で、調査区域が追加され、第4トレンチと命名し、継続して調査を行った。第4トレンチでは、調査区内外の安全を図るために掘削前に鉄製パイルを打ち込む工法を採用した。

3. 検出遺構

今回の発掘調査によって検出された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期のものと、平安



第 62 図 調 査 地 ト レ ン チ 配 置 図

時代後期のものである。

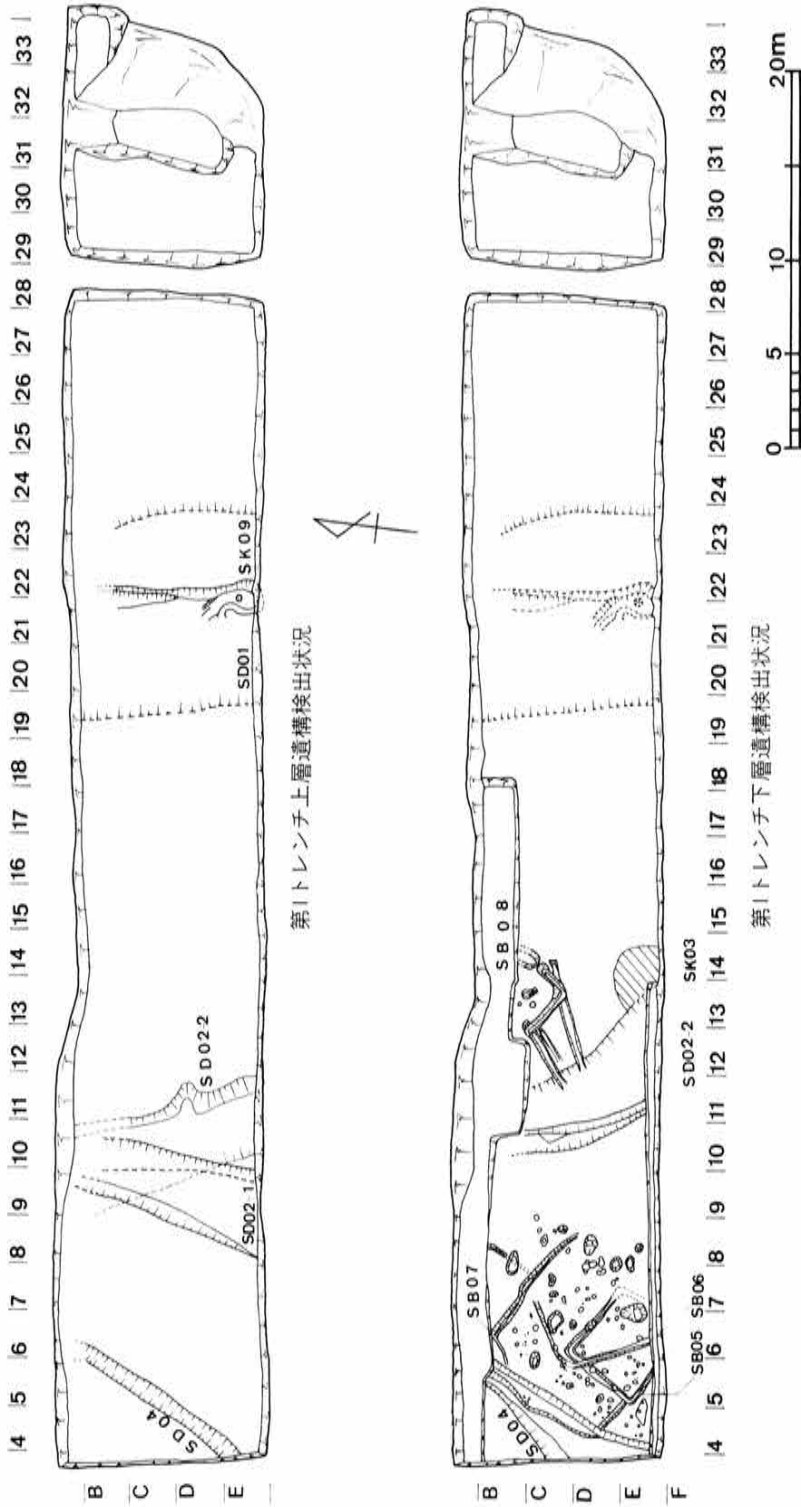
以下各トレンチ毎にその概略を説明する。

(1) 第 1 トレンチ

本調査中最も面積の大きい調査区であり出土遺物も全体の過半数を占める。

S D 01 ・ S K 09

19～22ライン上で検出した旧河道及び土壇状遺構である。検出幅7m・深さ約0.75mの規模を有し、断面逆台型状を示す。トレンチ幅9mに渡り検出した。S K 09はS D 01内の落ち



第63図 第1トレンチ遺構検出状況図

込みで、直径1.3～1.5mを河底から深さ0.5m下げた。両遺構からは、糸切り底の黒色土器が数点出土した。

SD02-1・2

SD02の1及び2は蛇行しながら埋没していった河道で、1本のものとして扱った。SD02-1は8～10ラインで検出した。幅4m・深さ0.3mで、断面逆台型状を示す。SD02-2は、8～15ラインで検出最大幅11m以上を測り、断面U字状を呈す。本調査中で最も多量の遺物が出土した遺構で、弥生時代後期から遺物が投げ込まれ始め、古墳時代前期には護岸工事と併せて堰が設けられている。

SX03

SD02-2東岸に堆積した土器溜り。その範囲は極めて不明瞭であったが、数時期に分けて取り上げることができ、遺物の構成における時期差を指摘できるものと思われる。

SD04

6ライン以西第1トレンチ西端で検出した。検出幅3.0m・深さ0.6mを測る。断面V字状を呈する。

SB05～SB07

第1トレンチ西端からSD02までの平坦地内には、多数のピット群と共に、幅0.3～0.55mの細長い溝が何本も切り合いをもちながら検出された。これらの溝とピット群は分類されて、現在3基の竪穴式住居と判断されるにいたっているが、不明な点も多い。

SD08

検出当初、竪穴式住居の周壁溝と思われた溝状遺構は調査の進行に伴って3時期にわたる暗渠の排水施設であることが判明した。施設は幅0.3m・深さ0.3m程度の溝で、それぞれ針葉樹の板材を組み合わせて水路をつくり、周囲を粘土でまいて固めている。水路の中には泥土の堆積が認められ、排水機能を失う毎に改修が行われたものと推察される。また、排水施設の流入口には水溜状の施設を確認した。

(2) 第2トレンチ

SD11

L・Mラインで検出した東から西へ流れる旧河道である。幅4～5m・深さ0.8mを測る。断面V字型を呈す。布留式土器、木器を数多く検出した。

SD12

P～Qラインで検出した北東から南西へ流れる旧河道である。幅2～2.5m・深さ0.4mを測る。断面逆台字型を呈する。SD11より古い層位を示している。



第 64 図 第3トレンチ遺構検出状況（南東から）

なお、第2トレンチ南半部では、第1トレンチのそれより1回り大きめのピット群を検出している。

(3) 第3トレンチ

現地表下3.2mで、東に向かって傾斜する肩を検出した。堆積層の中より土師器の高杯の脚部が出土した。第1トレンチで検出したSD01もしくは、25～26ラインで検出した東へ向って下がる地形の延長と考えられる。

(4) 第4トレンチ

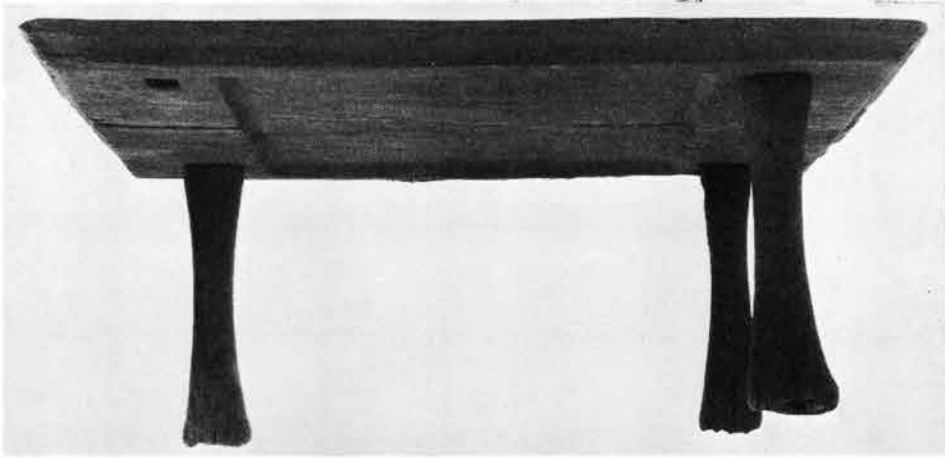
昭和52年度調査地の南に設けたトレンチである。52年のDトレンチで南に向かって大きく落ちこみ、第2トレンチでは、SD11が南面に向かって下がっているため、第4トレンチの遺構面は相当深いものと予想された。しかし、現地表下1.0m程度の深さで包含層が確認され、平坦な面を検出した。

SD20・SD21・SD22

幅0.7m・深さ約0.3m程度の溝で、集落内を縦横に流れる。用排水路であろうか、第1～3トレンチに比して出土遺物が古い様相を呈している。

4. 出土遺物

今回の調査によって検出した遺物は弥生式土器・土師器・黒色土器・木製品・加工木・自然木・自然遺物・石製品などで、いずれも大量に出土している。主な遺物としては、第1トレンチSD02より注口土器・木製四脚机、第2トレンチSD11上面より大型盤、ピットより鐸形土製品が出土した。これらの遺物は、まず保存の困難な木製品から整理を開始しており、膨大な量の土器については、コンテナ単位の分類を行っている段階である。



第65図 木製四脚机

5. ま と め

以上述べたように、古殿遺跡は昭和52年度調査をも含めて、非常に木器の保存状態のよい遺跡であることがわかる。これは「2. 調査の経過」の項で述べたように、遺跡の立地が埋没谷を取り込んでおり、なおかつ地下水脈が現在まで涸れることなく適度な状態に保たれていたためである。ともあれ何ら整理の進んでいない現段階では遺跡についての評価を下すことは早計であろう。今後の整理をまって十分な検討を加えたい。



第66図 注口土器

(戸原 和人)

注1 浄化槽部分の調査については、文化財保護課と管理課との協議によって、本調査中に継続して調査を行うことになった。

注2 調査補助員

小川健太郎・金子康治・下戸 聡・柴田 悟・竹中 優・豊島英昭・中塚 等・花田 宏
作業員

荒田幸久・池田航大・石田宏平・木佐一政徳・北野祥市・小牧儀作・後藤 正・島田秀雄・
高木保一・竹本 薫・田中雅彦・田中行一・中西昌夫・永島健司・長谷川種治・堀 忠夫・
堀 光夫・堀 保夫・木城明彦・松本忠雄・安田真也・柿本三和子・小北さゆり・
近藤千恵子・鶴谷裕子・山本恵子

整理員

安達佳明・青地佐都子・今西礼子・江田恵美子・小川志津香・小倉美奈子・小山みのり・

北川ともえ・田村晶子・団村 香・寺升初代・中島美代子・中村康子・長谷川陶子

注3 府立山城郷土資料館で京都府教育委員会による木器保存処理が開始され、古殿遺跡出土木器も保存処理されることになった。

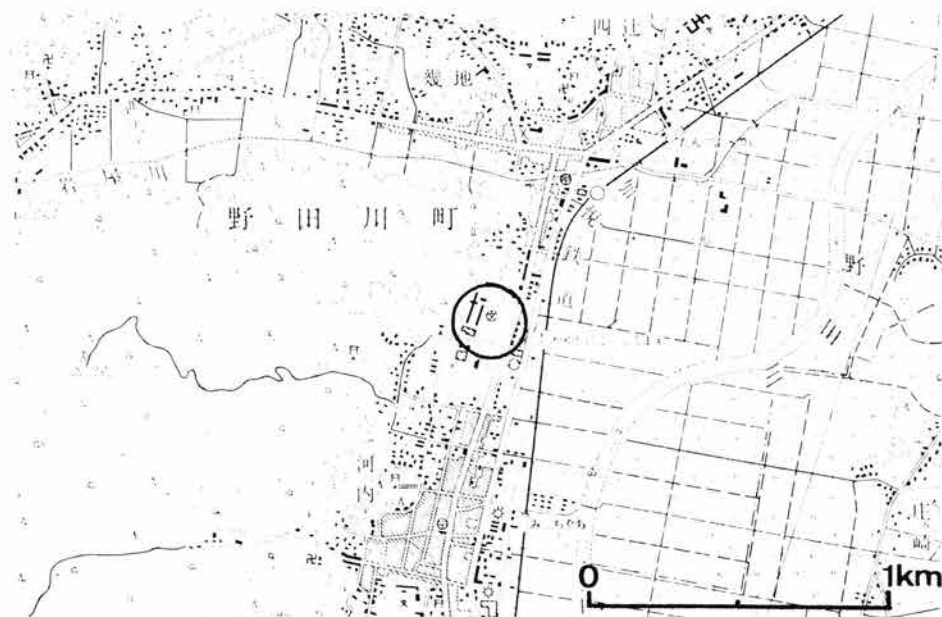
6. 下畑遺跡発掘調査概要

1. はじめに

下畑遺跡は、京都府与謝郡野田川町字三河内の府立加悦谷高等学校の敷地内に存在する。野田川町は、丹後半島の基部に位置する。大江山連峰の赤石岳に源を発する野田川が町内の中央部を縦貫し、名勝天橋立のある阿蘇海へ流れ込んでいる。この野田川の平地及び支流の谷あいをもって、加悦谷と呼ばれる小平野が存在する。野田川流域には、銅鐸が出土した比丘尼城遺跡や須代神社内遺跡の他、史跡蛭子山古墳・^{あびすやま}作山古墳等に代表される古墳が200基以上分布している。これらの遺跡の様相から、この加悦谷地域は丹後における古代文化の中心地であったと思われる。

今回の発掘調査は、京都府教育委員会が府立加悦谷高等学校の校舎老朽化に伴い、新校舎増改築工事を計画したことによる事前発掘調査である。

下畑遺跡は、府立加悦谷高等学校の体育館改築工事に伴って遺物の出土が認められ、同校教諭浪江庸二氏の指導で、同校生徒による調査が実施されている。調査の結果、平安時代から鎌倉時代にかけての黑色土器・須恵器等の遺物が出土した。さらに昭和56年度においては、同校校舎改築工事に伴う立会調査が実施され、黑色土器が出土している。これらの調査では



第67図 調査地位置図(1)

明確な遺構は検出されていないが、当地には古代から中世にかけての集落跡が存在すると推定される。また、同校敷地の周辺より弥生時代の遺物が採集されていることから、弥生時代までさかのぼることも十分考えられた。

発掘調査を実施するにあたり、各関係機関と協議の結果、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となり、主任調査員 辻本和美、調査員 竹原一彦の両名が現地調査を担当した。現地調査は昭和57年7月22日から10月1日の期間で実施した。

調査期間中、^(注1) 学生諸氏・作業員の方々には、酷暑の中にもかかわらず作業に従事していただいた。また、調査全般にわたって各関係諸機関より多大の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

調査協力

京都府教育委員会・野田川町教育委員会・京都府与謝教育局・府立丹後郷土資料館・京都府宮津地方振興局・府立加悦谷高等学校・三河内文化協会郷土史研究部・坪倉・山口共同企業体

2. 調査経過

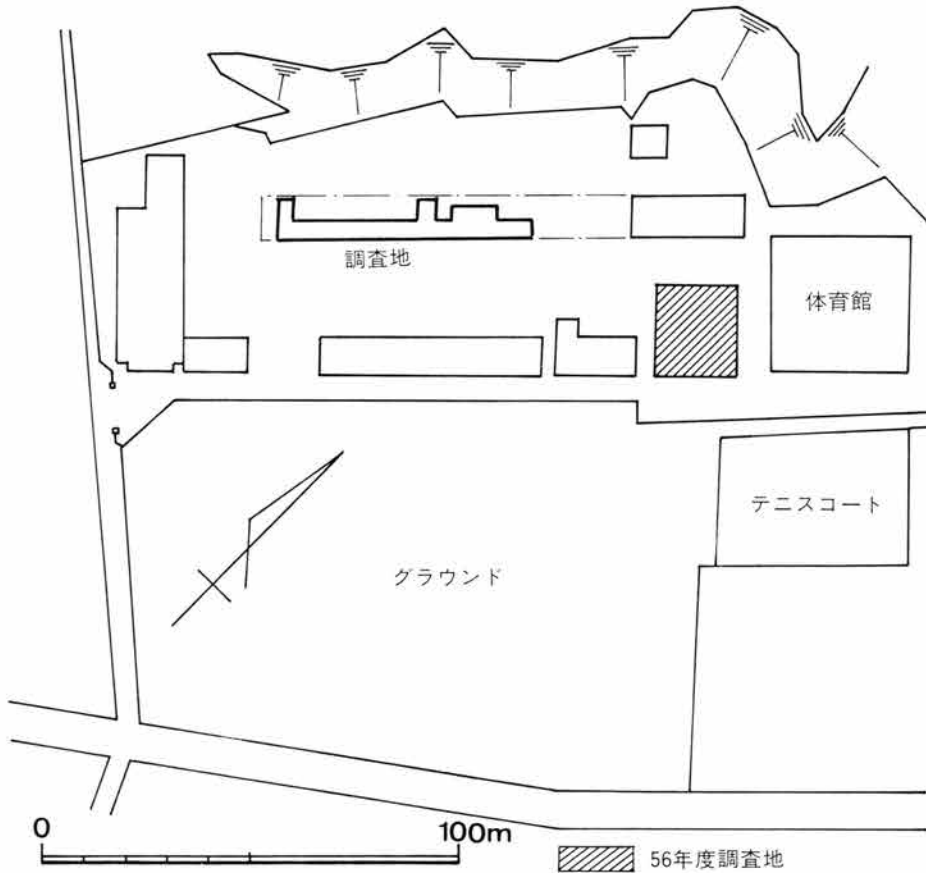
校舎建設予定地内には旧校舎が現存しており、解体工事と併行してコンクリート基礎を除去した。基礎部の除去作業に伴って、はからずも調査地全域の大まかな状況を把握することができた。調査地の北東部約1/3の範囲は地表下約10cmで地山層（黄褐色の粗粒花崗岩）が露出した。残り2/3は灰青色泥土及び粗砂が堆積していた。調査地の北には低位の丘陵が舌状に延びてきており、学校の敷地はこの丘陵を削平して造成されていることが、前年度の調査で^(注2) 判明していた。

今回調査の基礎撤去により、この地山削平が調査地の北東部分にまで及んでおり、ちょうど丘陵裾部が調査地にかかっているものと判断できた。調査地南西部の灰青色環元土壌は滞水しており、湿潤な状況を示している。実際、調査中は周囲からの湧水に悩まされた。

発掘調査は地山削平部以外の地域で実施し、北東から南西方向（長軸方向）に1本、北北西から南東方向（短軸方向）に2本のトレンチを設定した。

丘陵端部には地表下約30cmで暗茶褐色粘質土が薄く認められた。この地点で周囲を拡張したが遺構は検出されず、土層中より若干の黒色土器椀片が出土した。この土層は丘陵端部に沿って、学校グラウンド方向に延びていくものと判断した。この土層中に遺物が存在したことから、他の場所においても遺構が存在することは十分考えられる。

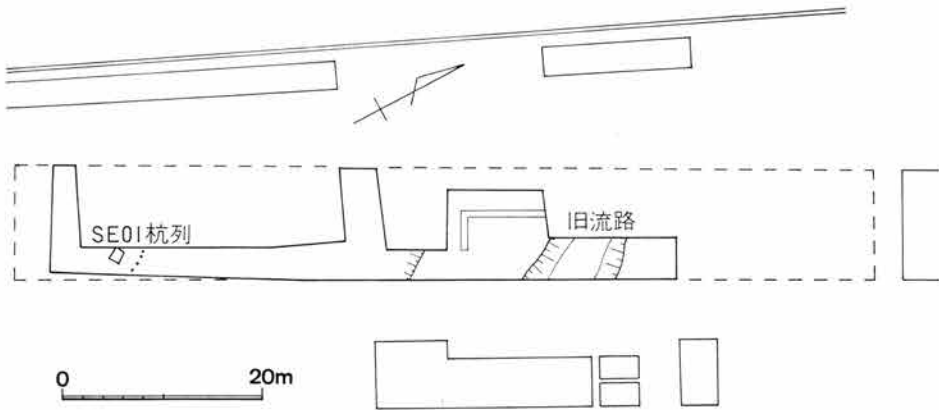
調査地の南西部は、南方に向かって緩く傾斜している。盛土による整地がなされており、厚さ約80cmの盛土下には、灰青色の砂質土層と砂層が交互に堆積していた。黒色土器等を包



第 68 図 調査地位置図 (2)

含する灰青色の砂層（やや粘性が強い）は北から南にかけて緩傾斜し、長軸方向トレンチの中央部では GL-1.2 m、南端部では GL-1.5 m で検出できた。この包含層は厚さ約 25 cm であり、調査地の南東方向へ大きく広がっていると考えられる。遺物包含層中には黒色土器の他に須恵器と土師器の破片が少量出土し、これらの遺物はその大部分が若干の磨滅をうけていた。この遺物包含層を掘り下げていく途中、調査地南端付近で木枠組みの井戸 (SE 01) を検出した。さらに井戸の東方で杭列を検出した。今回の調査で検出した遺構は、この 2 か所の遺構だけであった。

調査途中、井戸 (SE 01) の内部を掘り下げている段階で台風が通過し、調査地全域が冠水状態になった。トレンチの壁面は完全に崩壊し、調査地全域の復旧は無理と判断し、遺構の存在しない地区の作業は中止し、井戸の周辺の調査を集中的に実施した。



第69図 調査地平面図

3. 検出遺構

(1) 井戸 (SE01) (第70図)

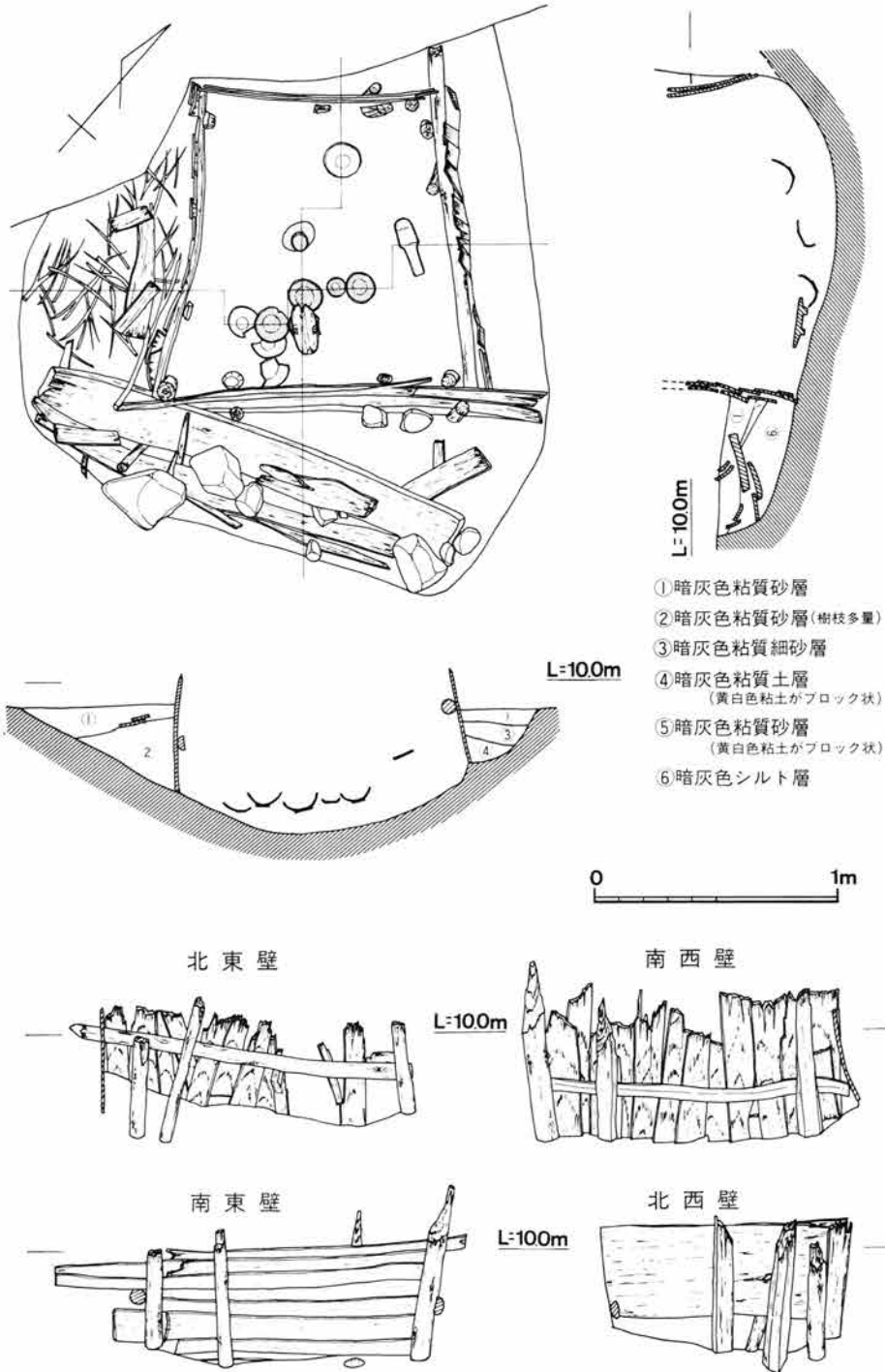
調査地の南端近くで検出した木枠組みの井戸である。一辺約 1.0～1.3 m でややいびつな方形を呈する。北西及び南東方向の井戸壁は、板材を横方向に組み、北東及び南西方向の井戸壁は、板材を縦方向に打ち込んでいる。これらの板材は丸太杭や角杭によって固定されていた。

SE01 の北西壁には長さ約 100 cm・幅約 40 cm の薄い板材を 2 枚重ねて使用し、井戸の内側及び外側に杭を打ち込み、板材を固定している。対する南東壁は、板材を横方向に使用することは北西壁と同様であるが、一枚板を使用するのではなく、細長い板材を多数使用しているところが北西壁と異なる。板材は井戸の内側と外側の杭によって固定されているが、板材は長さ約 140～170 cm・幅約 20 cm 前後のものを重ねて使用している。

北東及び南西方向の井戸壁は、井戸の内側に横方向に棒を 1 本渡し、さらにその内側に支えの杭を打ち込んでいる。横木の外側には幅約 10～15 cm 程度の板材を打ち込んでいる。板材の先端部は一部に矢板状に尖らせたものや、板材の小口端部を削って尖らせたもの（鎌刃状）も一部に認められた。板材は上部が内傾し、下方先端部は外方に向けて打ち込まれていた。

井戸の底面には黒色及び淡青灰色の粘土層が広がり、壁面近くは高く、中央部が低いといった、いわゆる播鉢状を呈している。井戸底の最低部と壁面下部との比高差は約 30 cm 前後である。

SE01 の掘形は、東北部がトレンチ外に延びるため、その全形は明確でないが、南東及び南西方向では大きく広がっている。南東部の掘形中には長さ 180 cm・幅 30 cm・厚さ 4 cm



第70図 SE01平面図及び立面図

の大きな板材を使用している。その他にも多数の板材を水平方向に重ねて、板材の間には小型の杭や板を所々に置き、大型の板材は杭と石により固定している。この板材の上部に井戸枠の板材が据えられており、井戸枠を作り上げていく段階で、これら掘形内の板材も順次設置されていったことが判明した。

南西側の掘形内には板材はほとんどなく、板材のかわりに檜等の樹木の枝を敷きつめてあった。樹枝の一部には葉を残しているものも認められた。

SE01 内には泥土層や砂層・有機質土層が数 cm ずつの厚みで堆積しており、木製品や土器の他、自然遺物も良好な状態で遺存していた。

木製品としては漆器椀 7 点・箸 2 点・下駄 1 点・杓子状木製品 1 点・曲物底 1 点が出土した。漆器椀 7 点のうち 2 点は、SE01 の上部で出土したことから遺存状態も悪く、木質部も腐り、崩壊寸前の状態であった。他の 5 点の漆器椀（うち 1 点は皿）は、南東側井戸枠近くよりまとまって出土した。さらに漆器椀の集中した場所から下駄・箸が出土したほか、漆器椀の下部から黒色土器椀が 5 点出土した。一方、これらの遺物からやや離れた地点より杓子状木製品が出土した。これらの遺物は井戸の底近くから出土したが、底面に接してはならず、SE01 が一定の期間使用された後に投棄されたものとみられる。

このような遺物の他に SE01 内から多量の種子が出土した。種子はトチ・クルミの 2 種類であり、それらの種子の総数は 200 個近くにも達した。

SE01 の掘形内からも多数の遺物が出土した。遺物のほとんどが黒色土器であり、それらの大多数は南東及び南西側の掘形内からの出土であった。遺物はほとんどが小破片であり、完全な形に復元できる遺物は極めてまれであった。

(2) 杭 列

SE01 の東約 2 m の地点に 4 本の杭が、南北方向に延びる状態で存在した。また、SE01 の上部にも当初杭が打ち込まれており、その杭と同一時期と考えれば、SE01 の使用が終了した後の時代の杭と判断できるが、確実な時期は不明である。

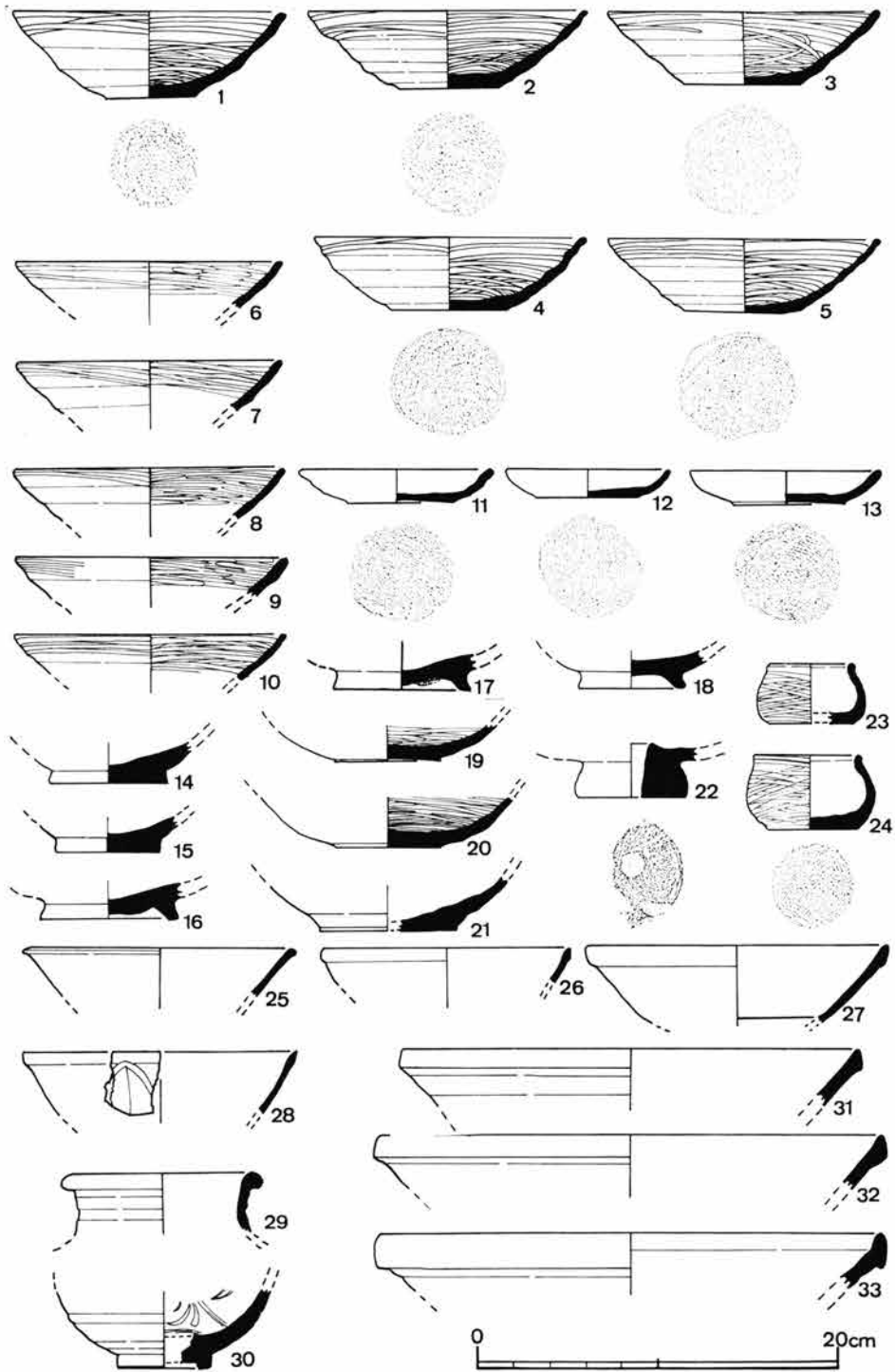
4. 出 土 遺 物

今回の調査では黒色土器が大量に出土し、その数は整理箱に約 6 ケース分にもものぼった。ほかに土師器・須恵器・陶磁器の破片が少量出土している。

遺物は調査地南部の灰青色砂層中からも出土しているがその量は少ない。遺物の多くは井戸 (SE01) に関連する遺物であり、井戸内及び井戸の掘形内より出土したものである。

(1) 黒色土器 (第71図 1～24)

黒色土器には椀・皿・小型壺の 3 器種が認められる。



第71図 出土遺物実測図

黒色土器碗はすべて内面のみを黒色に仕上げ、外面は口縁端部が一部黒色化しているほかは、黄褐色の色調を呈している。焼成も良好であり、大部分の土器は堅く焼き上がっている。

黒色土器碗（1～5）は井戸内より出土したものである。器壁は外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。器壁はロクロ整形による緩い稜線を残している。内面は全体を丁寧に磨き上げている。磨きの幅は太く、3～5mmの幅をもち、多くは数分割に途切れる。なかには瓦器碗の暗文のように途切れることなく、数周廻る磨きも認められる（6）。この磨きは口縁部外面にも認められ、途切れることなく2～3周廻らせている。底部は平底状を呈し、回転糸切りによる切り離しを行っている。

黒色土器碗の多くは口径約15.2cm内外の大きさであり、器高も約5cmとほぼ均一化している。

黒色土器碗（6～10）は井戸掘形より出土したものであり、（1～5）と同様の形態である。これらのうち（6・10）は口縁端部に若干の面をもつ。

（14～22）は黒色土器の底部である。すべて内面のみを黒色に仕上げている。（22）を除く他のものは碗とみられ、その形態から大きく4つに分類できる。糸切りが下方で行われ、底部も厚く平高台状になるもの（14・15）、底部は薄くほとんど高台をもたないもの（19・20）、高台を貼り付けたもの（16～18）、底部は厚いが高台部分が斜めに立ち上がるもの（21）の4形態に分けられる。（16～18）を除き、すべて回転糸切りにより切り離している。（22）は底部中央に穿孔をもつ土器の底部である。高台は約1cmと高く、肥厚して外方にふくらみ、内面はよく磨かれ黒色に仕上げる。整形段階から穿孔が上方より行われている。器形は碗とみられるが用途は定かでない。

黒色土器はその出土の大多数が碗であったが、その他若干ではあるが皿と小型壺が出土している。（11～13）は皿である。ロクロによって整形し、底部は平底状で糸切り痕を残し、内外面とも黒色に仕上げている。（23・24）は小型の無頸壺である。ロクロによって成形し、底部は平底で糸切り痕を残す。底部近くに最大幅があり、上部は内傾しながら立ち上がる。口縁端部はやや外方につまみ上げて丸く終る。外面は丁寧に磨き上げ内外面黒色化する。

（2）磁器

今回の調査では、包含層中より輸入陶磁器片が出土した。出土量は少量であるが、白磁（25～27）と青磁（28～30）が出土している。白磁はすべて碗である。（25）はまっすぐ外方に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はやや外反させて終る。（26・27）は玉縁状の口縁部をもつ。（26）は概して小型であり、（27）は内底面近くに1条の沈線が認められる。

（28）は龍泉窯系の口縁部外面に蓮弁を陰刻した青磁碗である。（29）は壺の口縁部片であ

り、頸部はやや外方に立ち上がる。口縁端部は肥厚して外反し、丸く終る。(30)は碗の底部であり、内面には陰刻が施されている。底部は厚く、削り出しの高台が付く。

(3) 須恵器

須恵質の鉢が出土している。いずれも破片であり出土量も少量であるが、片口鉢とみられる。(31・32)は口縁端部がやや内傾し、口縁部と体部はなだらかに続く。(33)は口縁部が肥厚し、大きくアクセントをつけたあと体部へと続く。

(4) 木製品 (第72図)

井戸(SE01)中より多数の木製品が良好な状態で出土した。漆器・箸・下駄・杓子状木製品等である。

漆器(1～6)には碗(1～4)・皿(5)・曲物底(6)がある。漆器碗と皿はやや粗い作りであり、ロクロ削りの稜線や漆の重ね塗り痕を多く残す。内外面は黒漆を塗り、口縁端部の内外面各々2か所に朱漆が筆で塗られている。碗の法量はほぼ一様であり、口径約14cm・器高約5cm前後であった。

曲物底板(6)は、直径11.8cmであり、柀目材を円形に削り出し、断面はわずかに台形を呈している。外枠固定の釘痕が数か所認められる。上下両面に黒漆を塗る。

箸(7・8)はいずれも折損しているが、現存長は21cmと20cmであった。長軸方向に長く削って仕上げている。

杓子状木製品(9)は全長26.8cm・幅8.0cm・柄部の長さ13.4cm・幅4.6cmである。柀目材を使用し、板の角は削り落している。先端部に近づくにつれて幅は狭まり、先端は丸く終る。上下両面に先端の鋭い器具によるひっかき痕が認められる。片面には先端からやや下った所と柄部近くに、鋸歯状のひっかき痕が2か所ある。もう一方の面には、柄部の近くに3条の直線文が認められる。一部にこげ痕がかすかに認められる。

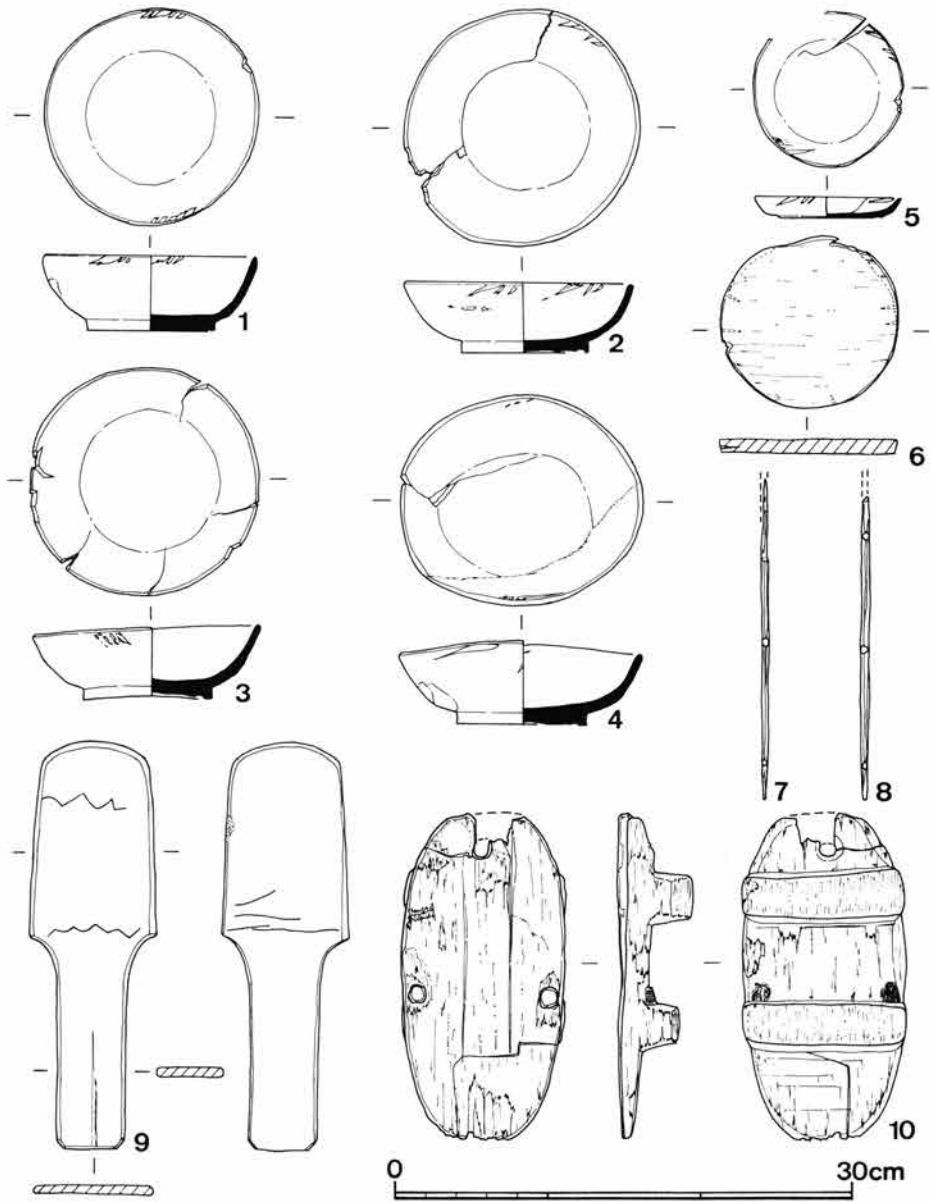
下駄(10)は全長21.5cm・幅10.8cm・高さ5.0cmであり、平面は長円形を呈する連歯下駄である。横緒孔は対称位置に穿孔し、緒の残片が残る。鼻緒孔はほぼ中央に穿孔する。歯は鋸で成形し、使用による磨滅が著しい。鼻緒孔の左に2cm程度の円形磨耗が認められ、親指の痕跡と考えられることから、この下駄は右足用であることが判明した。

(5) その他

遺物包含層中から銭貨が1枚出土している。北宋銭の1つである至道元宝(995年に初鑄)であり、遺存状況も良好であった。

5. ま と め

与謝郡野田川町三河内地区に下畑遺跡の存在が知られるようになって久しいが、これまで



第72図 SE01内出土木製品実測図

はどのような性格をもった遺跡であるのか判明してはいなかった。従来より平安～鎌倉時代にかけての遺物が少量出土していたのにすぎなかった。

今回の府立加悦谷高等学校敷地内の調査により、集落に付属していたと考えられる井戸の検出をみたことは大きな成果であった。井戸を検出したことにより、近接地に住居等の施設が存在していたことが推察される。井戸跡の他に同時期の遺構が検出されなかったのは残念

なことであった。井戸跡の周囲には平安～鎌倉時代の遺物を含む包含層が広がっており、それら遺物中の土器の多くは土器表面の磨耗も少なく、他所からの移動を示すものではなかった。出土遺物には日用雑器の土器が大部分を占めていることから、付近に集落跡が存在することは確実とみられる。

今回検出した井戸は従来より多く存在する井戸とは少し異なる状態であった。井戸の多くは井戸底よりの湧水を利用するものが大多数である。今回検出の井戸は底面が粘土層を掘り切っておらず、粘土層中で終わっていた。井戸は湿潤な土地に立地しており、周囲からの湧水を集めることで、十分井戸の機能を果たしたものと考えられる。そのため井戸も深く堀を穿つ必要もなく、浅い状況であった。井戸の掘形も湿潤地が広がる南方に大きく、その部分にはあたかも水のろ過及び疎通性を高めるように樹枝を敷き詰め、板材の組み合わせ等を念入りに行っていた。

井戸内には多くの遺物が良好に遺存しており、木製品の出土も豊富であった。遺物の多くは井戸の南東部底面近くに集中しており、一括して投棄したような状況であった。

黒色土器碗は大部分が口縁部の一部を欠失しており、その破片は井戸の内外には認められなかった。黒色土器碗の直上部には下駄・漆器・箸等が集中していた。漆器は5点のうち皿1点を除く他は碗であり、遺棄された当時のセット関係を示すものとみられる。

井戸内の出土遺物は、黒色土器碗の打ち欠き方、漆器・下駄・杓子状木製品等から、これらの遺物は水神等に関する何らかの祭祀に使用された遺物と考えられる。

下畑遺跡の調査において、平安～鎌倉時代の井戸を知るうえで、今回貴重な資料が得られた。一方、出土遺物についても、黒色土器が多量に出土したことにより、当時の土器に関する良好な資料になるものとみられる。

畿内地域の黒色土器に関する従来の見解は、内面のみを黒色化する黒色土器（A類）が8世紀の中頃に出現する。10世紀に入ると新たに内外面を黒色化する黒色土器（B類）が出現し、一般の土師器に取って代り、碗類の大部分は黒色土器が占める。11世紀段階には黒色土器にかわって瓦器が取って代り黒色土器の使用は終了する。

丹後地域においては各地で黒色土器の出土が報告されているが、中でも野田川流域に集中している。丹波に接する加佐郡（由良川流域）にはほとんど黒色土器の出土が認められない。

丹後地域の黒色土器は碗によって代表され、器形・製作手法に大きな変化は認められない。器形に関して底部が平高台をもつものと、高台をもたない平底のもの2種がある。加悦町中上司遺跡^(注3)、網野町林遺跡^(注4)の調査により、平高台をもつ黒色土器が平底のものより古くなる^(注3)ことが判明している。平高台をもつものの一部が11世紀代にまでさかのぼる可能性も示唆さ

れ、平底化したものは12～13世紀代におさまると考えられている。

今回調査の井戸(SE01)掘形内からは、第71図(14・15・21)にみられる平高台をもつ黒色土器が出土している。井戸内からは(1～5)の平底化した黒色土器が出土したが、平高台のものは認められなかった。井戸の周囲及び包含層中には平高台をもつ黒色土器が若干認められるが、大部分は平底のものであった。また、包含層中からは13世紀代まで下がる須恵器の鉢や白磁が出土している。今回の調査においては鎌倉時代中期以降の中世陶磁器が出土していないことから、下畑遺跡は12～13世紀代の遺跡と考えられ、井戸(SE01)もほぼ同一時期のものと判断される。

丹後・丹波の両地域では瓦器と黒色土器が共伴する良好な資料は少ないが、福知山市の大内城跡^(注5)では平底の黒色土器碗が12世紀中頃の瓦器と共伴して出土している。この黒色土器碗は、下畑遺跡の井戸内出土の黒色土器碗と同一のタイプであることから、下畑遺跡の井戸の年代を決定する一例であると思われる。

丹後地域においては、12～13世紀代に黒色土器が盛んに使用されているが、畿内地域においてはすでに瓦器が使用され、黒色土器は衰退している段階である。また、丹波地域においては畿内と同様に瓦器が主体を占めている。この時期に丹後の各遺跡から瓦器碗等の出土はほとんど認められず、出土することがあっても少量であることが多い。丹波においては逆に黒色土器の出土例は少なく、黒色土器の使用は早い段階で終り、瓦器の使用に移っていったとみられる。

このように丹後・丹波の近接する両地域において、使用土器のうえで大きな差異が認められる。一方、但馬地域北部では丹後の黒色土器碗と同一の碗が出土するが、黒色土器は少なく、ほとんどが土師器碗である。このような地域差は商品流通の上での地域間差と考えられ、それぞれの地域に独自の生産地が存在し、その流通範囲を示すものとみられよう。

黒色土器において、従来は内面のみ黒色化(A類)の後に内外面をともに黒色化(B類)していくとされ、それが時期差を示すものと考えられていたが、今回の調査ではこのような見解と異なる様相を示していた。

下畑遺跡においては、碗類すべてがA類のものであり、B類のものはわずかに皿・小型壺に認められるだけであった。このような傾向は丹後全域にみられ、A類とB類は共存して存在する。ここではA類の後B類への移行といった畿内的な動きはみられず、器種による黒色化の違いが認められるだけであり、畿内と異なる丹後独自の黒色土器の存在のしかたである。

丹後地方では黒色土器に接する機会は比較的多い。しかし、使用年代はほぼ12～13世紀代と判明しているが、発生及び終焉段階については不明な点が多い。さらに年代による細分化の可能性が示唆されてきているが、現在まで良好な資料が得られていない。近い将来に層位

的に黒色土器の出土が押さえられ、時期的に細分化されることを願う。

(竹原 一彦)

注1 調査補助員

安達佳明・須田久三・柴田 悟・小川健太郎・随永研一郎・団村 香

注2 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注3 『中上司遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会 1979

注4 『林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会 1977

注5 京都府福知山市中六人部の近畿自動車道舞鶴線関係遺跡調査において黒色土器と瓦器が共伴している。

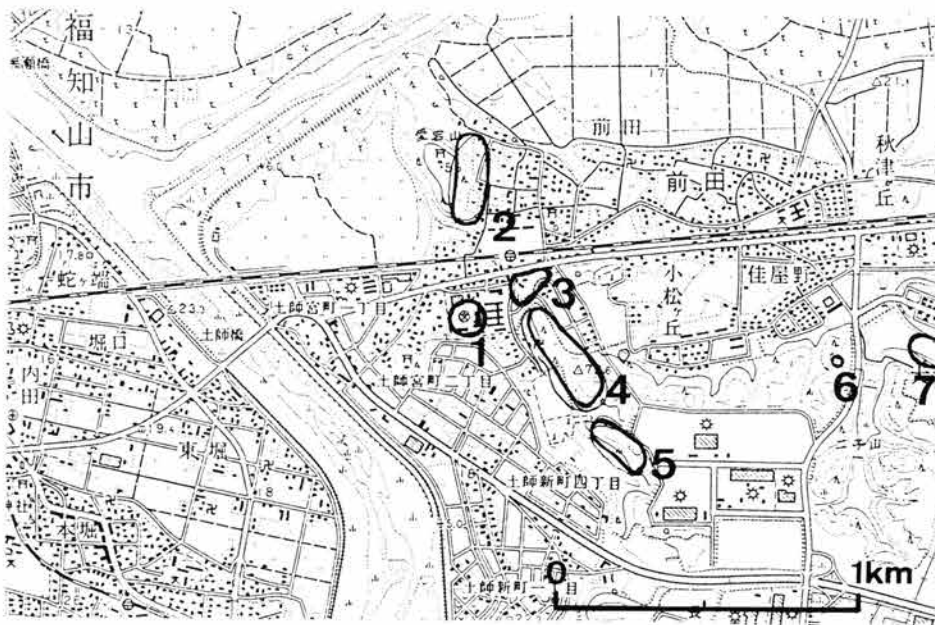
7. 土師南遺跡発掘調査概要

1. はじめに

京都府教育委員会は、福知山市字土師小字南町 810 に所在する府立福知山高等学校の校舎老朽化に伴い、新校舎増改築工事を計画した。府立福知山高等学校の敷地は、土師南遺跡として周知の遺跡であり、各関係諸機関と協議の結果、事前に発掘調査が必要との判断がなされた。そこで財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり、発掘調査を実施した。現地調査は主任調査員 辻本和美、調査員 竹原一彦の両名が担当し、昭和57年7月22日から9月16日まで調査を実施した。

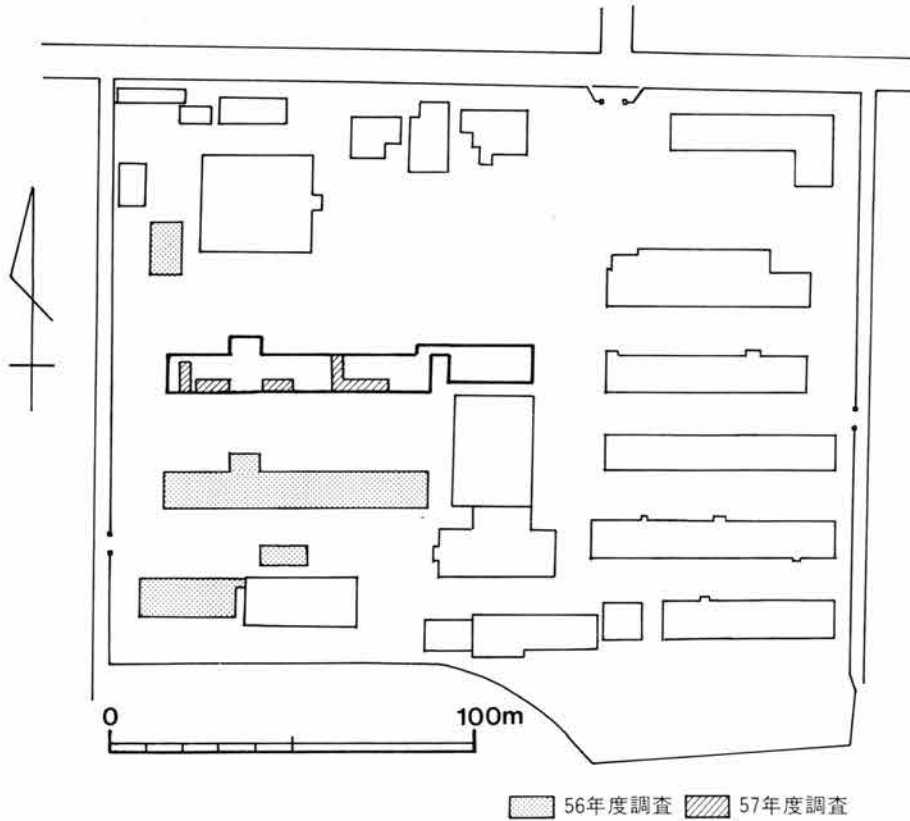
由良川によって形成された狭長な河谷平野である福知山盆地の周辺山麓には、低位丘陵が数多く存在し、地域集団の生活の場として各時期の遺跡が認められる。

今回発掘調査が実施された土師南遺跡もこのような遺跡のひとつであって、由良川と土師川の合流部東南の長田野段丘の北端部に位置している。長田野の段丘は福知山盆地の中でも最大規模の段丘であり、周辺には愛宕山遺跡・宝蔵山古墳群・ゲシ山古墳群・南町古墳群・



第73図 調査地位置図(1)

- | | | | |
|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 土師南遺跡 | 2. 愛宕山遺跡 | 3. 宝蔵山古墳群 | 4. ゲシ山古墳群 |
| 5. 南町古墳群 | 6. 八ヶ谷古墳 | 7. 中坂古墳群 | |

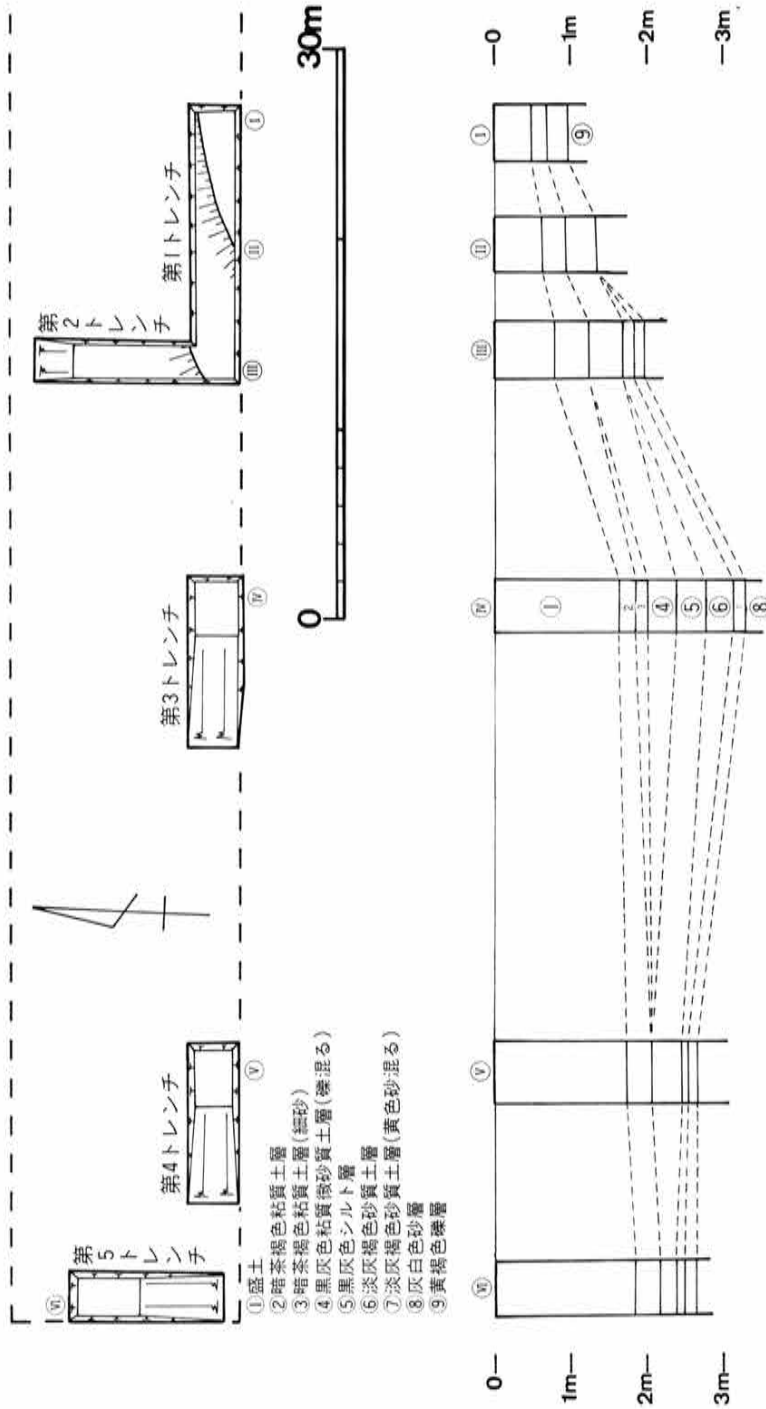


第74図 調査地位置図(2)

八ヶ谷古墳・中坂古墳群等の各遺跡が存在する。中でも宝蔵山4号墳は複数の主体部をもち、壺棺として使用された土師器や弥生時代の特徴をそなえた土器が出土したことから、弥生時代から古墳時代に移行する過渡期の古墳として名高い。八ヶ谷古墳は、箱式石棺を粘土で被覆した特殊な埋葬施設をもち、琴柱形石製品が出土している。これらの特色をもった前期古墳の他、埋葬主体は箱式石棺であり、埴輪片が出土するゲシ山古墳群、全長60mの前方後円墳を含む南町古墳群等の後期古墳も存在する。南町古墳群の一部の古墳は5世紀代へさかのぼる可能性もある。

このような遺跡が近接する福知山高等学校の敷地内からも、これまで須恵器・土師器等の遺物が採集されており、遺跡の存在が推定されていた。

今回の発掘調査は昨年度に続くものである。前回は調査地全域で地山にまで達する削平が認められ、整地面を確認したのにとどまった。^(注1) 今回の調査地は、前回調査地の北25mの地点であり、校舎建設予定地1,200m²(東西100m・南北12m)を調査対象面積とした。



第75図 調査地平面図及び柱状断面図

2. 調査経過

調査予定地は、東端部が旧校舎にかかることから、その部分は校舎解体後に調査を残し、東端部以外の調査を開始した。まず調査地内に幅3mのトレンチを5か所(東西3・南北2)設定し試掘を行った。

第1トレンチの東南隅では地表下約1mで黄褐色礫層(地山)を検出した。この礫層は緩く北西方向に傾斜していた。礫層の上層には暗茶褐色粘質土層がわずかながら存在し、その層中より近世の染付茶碗片が出土した。

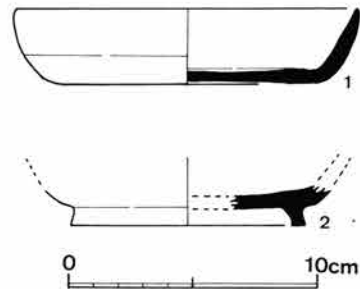
第1トレンチに続く第2トレンチでは、黄褐色礫層は認められず、黒色粘質土層が厚く堆積していた。この土層中に遺物の包含は認められなかった。トレンチの北端で地表下2.5mまで掘り下げたが、黄褐色礫層及び黒色粘質土の最下面は確認されなかった。この黒色粘質土層は第3～第5トレンチでも確認されている。他のトレンチでは黒色粘質土の下面が確認された。第3トレンチでは地表下2.8m、第4トレンチでは同じく2.4m、第5トレンチでは2.2mの地点であった。第3トレンチで黒色粘質土層が東西方向トレンチの中で、最も深い地点に存在し、東西両端方向に上がっていくことから、第3トレンチ部が旧地形では谷部分であったと考えられる。

第5トレンチでは黒色粘質土の上層に暗灰褐色粘質土が一部に存在し、その層中より細片ながら平安時代後期の須恵器高台部と土師皿(第76図)が出土した。この遺物包含層も厚みはうすく、北方への傾斜をもっていた。

3. まとめ

試掘調査の結果、調査地全体は旧地形において丘陵斜面にあたり、南から北方向に開口する谷部を埋め立てて、学校敷地を造成したことが判明した。試掘調査において各トレンチでは、盛土部分の地盤が軟弱であり、壁面の崩壊があった。そこでこれ以上の調査は危険であるとの判断がなされた。遺物包含層もほとんど認められず、出土遺物も少量であったことから、今回の調査は土層観察にとどまり、ただちに各トレンチを埋めもどした。

土師南遺跡は、前年度及び今回の調査結果から、福知山高校建設に伴い大きく破壊されたと考えられる。今回の調査結果からのみ推定すれば、第5トレンチで若干の遺物包含層が存在したことから、学校



第76図 出土遺物実測図

敷地の西方に遺跡が広がっていると考えられる。この地域は現在学校敷地より1m程度低
まり、民家及び畑地となっている。さらに、なだらかな起伏をもつ平坦地が広がっているこ
とから、この地に遺跡の存在する可能性が高い。 (竹原 一彦)

注1 辻本和美「土師南遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財
調査研究センター) 1982

圖 版

図版第1 大内城跡墳墓



(1) SX300 全景 (西から)



(2) SX300 半掘状況 (南から)



(1) SX300-E・F (北から)



(2) SX300-H 敷石除去状況 (南から)



(3) SX300—A 検出状況 (南から)



(4) SX300—A 蔵骨器検出状況 (東から)



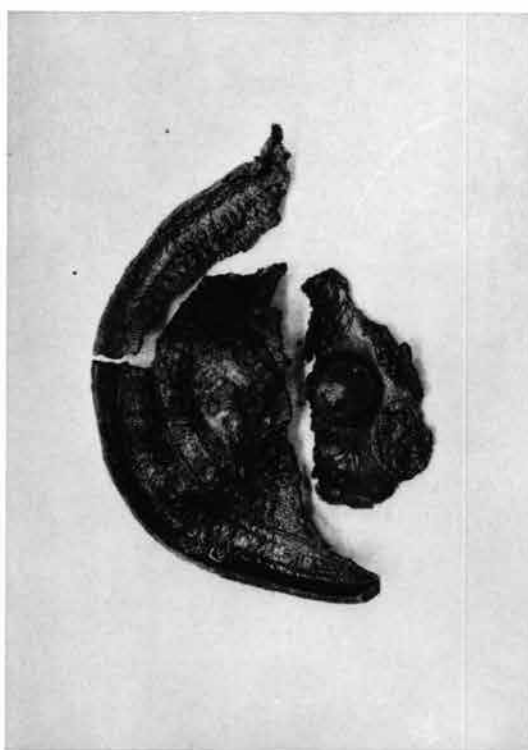
(1) SX300—F 検出状況 (東から)



(2) SX300—F 火葬骨埋納状況 (東から)



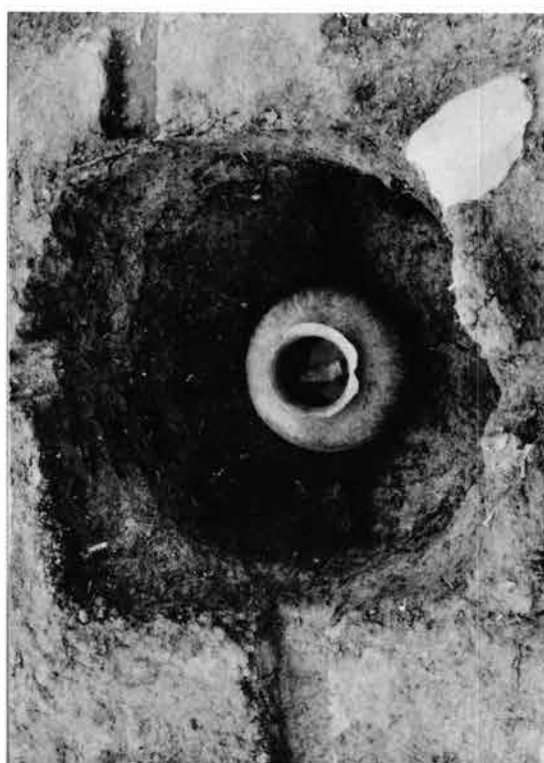
(3) SX 300—L 蔵骨器 (北から)



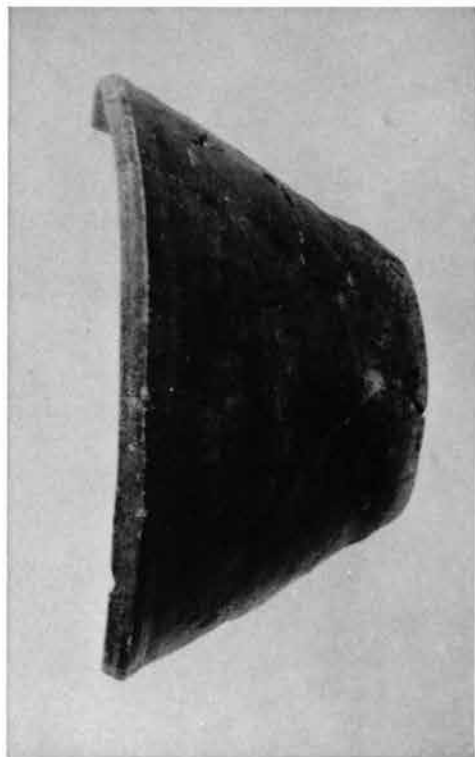
(4) SX 300—A 鏡



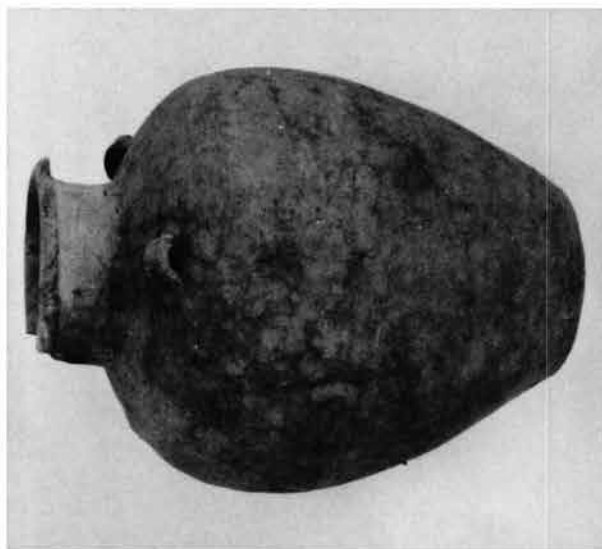
(1) SX 300—L 検出状況 (西から)



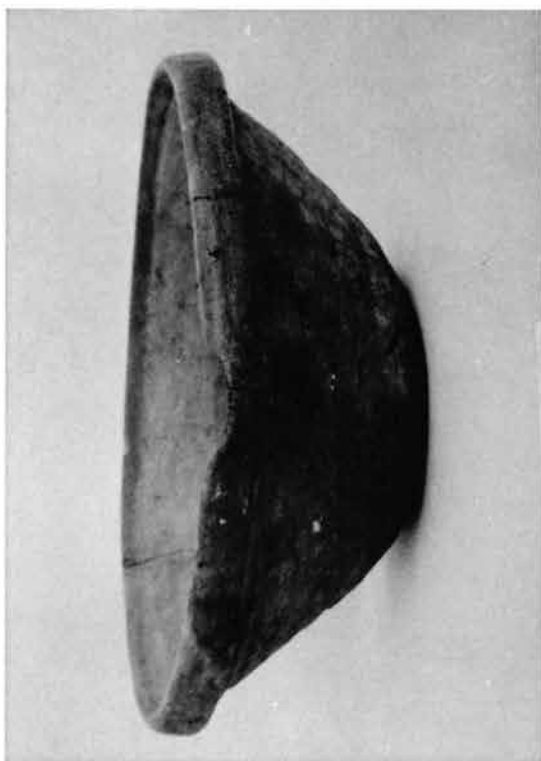
(2) SX 300—L 半掘状況 (西から)



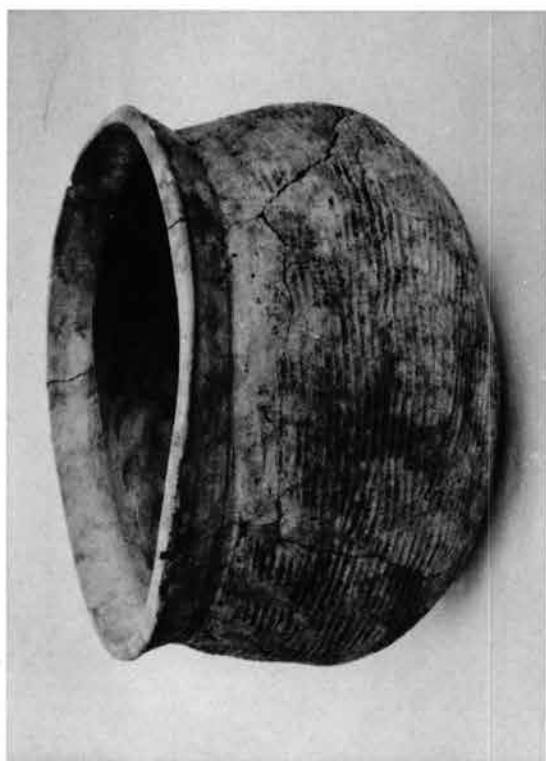
(3) SX300—A 蓋



(4) SX300—A 藏骨器



(1) SX300—F 蓋



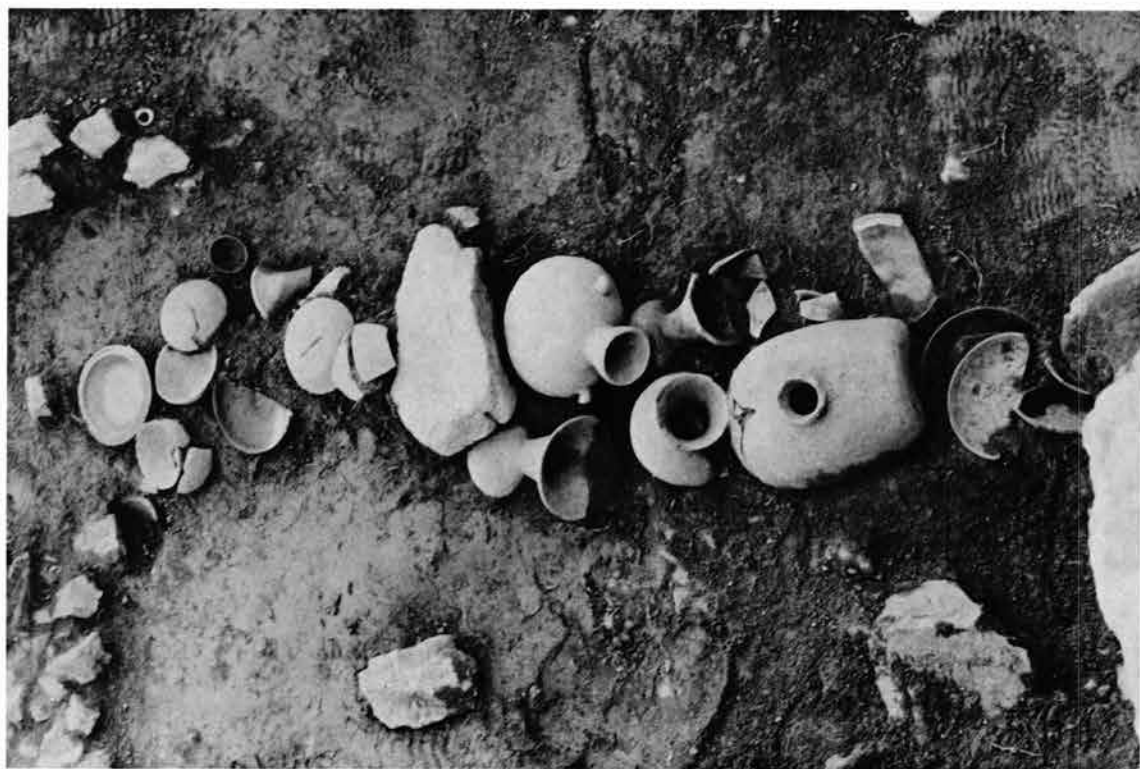
(2) SX300—F 藏骨器



(1) 小屋ヶ谷古墳遠景（東から）



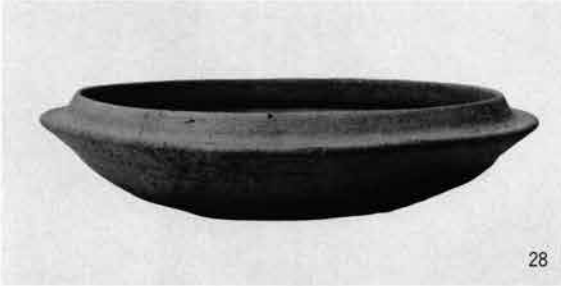
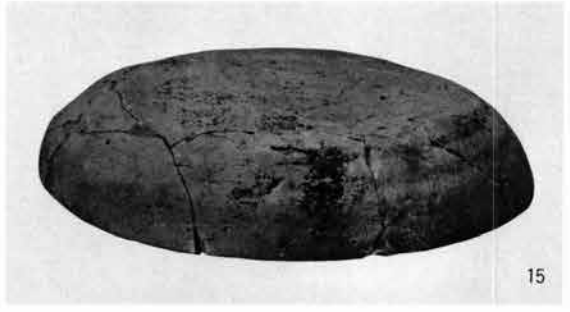
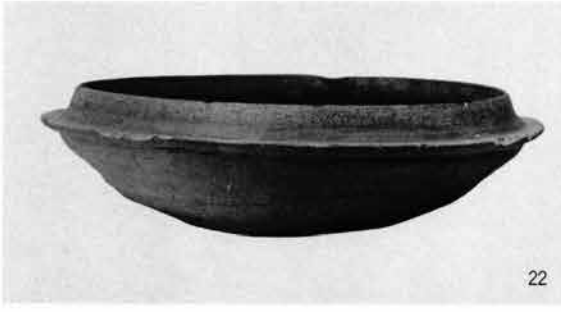
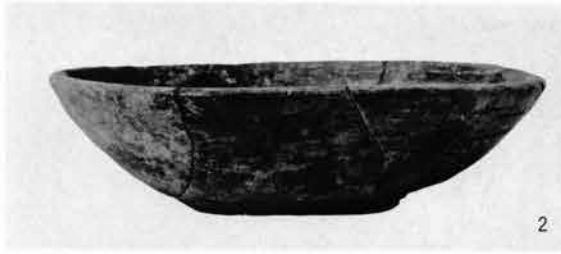
(2) 小屋ヶ谷古墳石室内崩石検出状況（南から）



(2) 小屋ヶ谷古墳石室内遺物検出状況（北から）



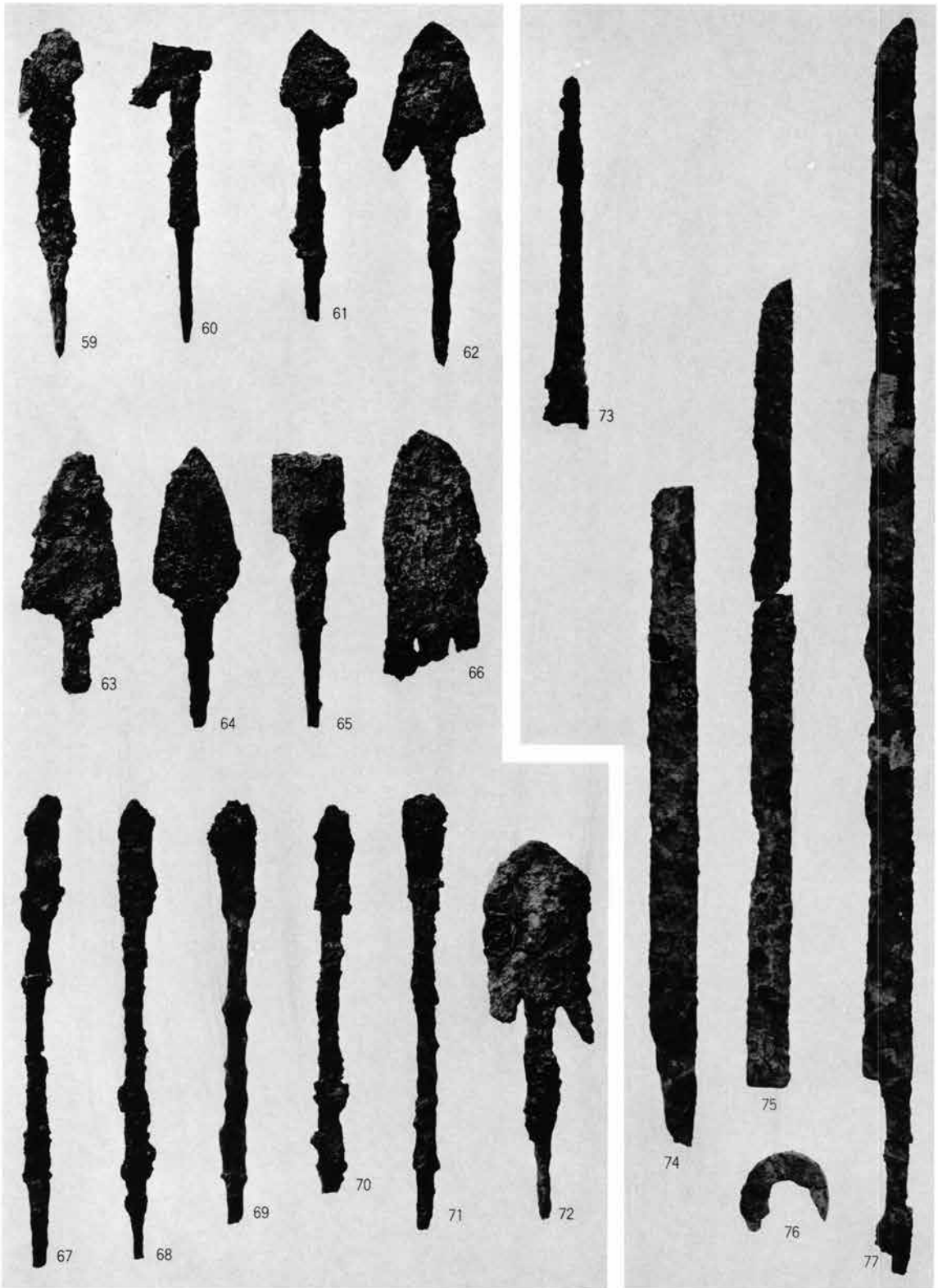
(1) 小屋ヶ谷古墳石室全景（南から）



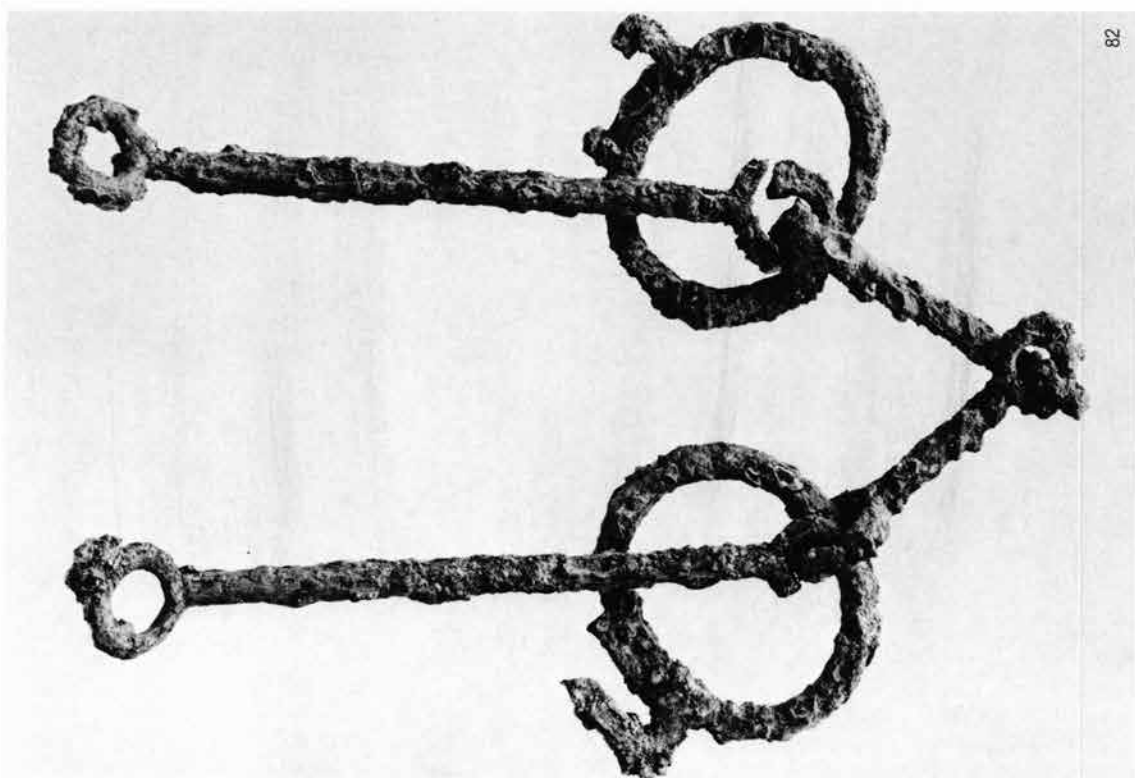
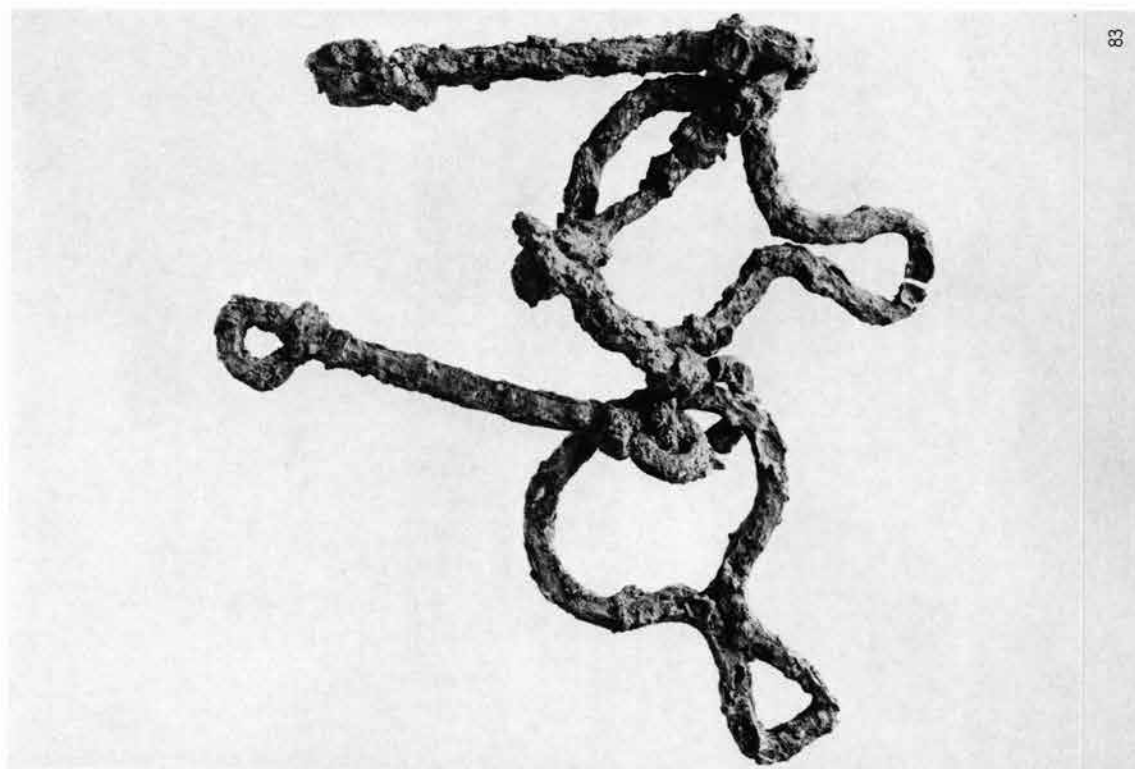
後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳出土遺物 土器

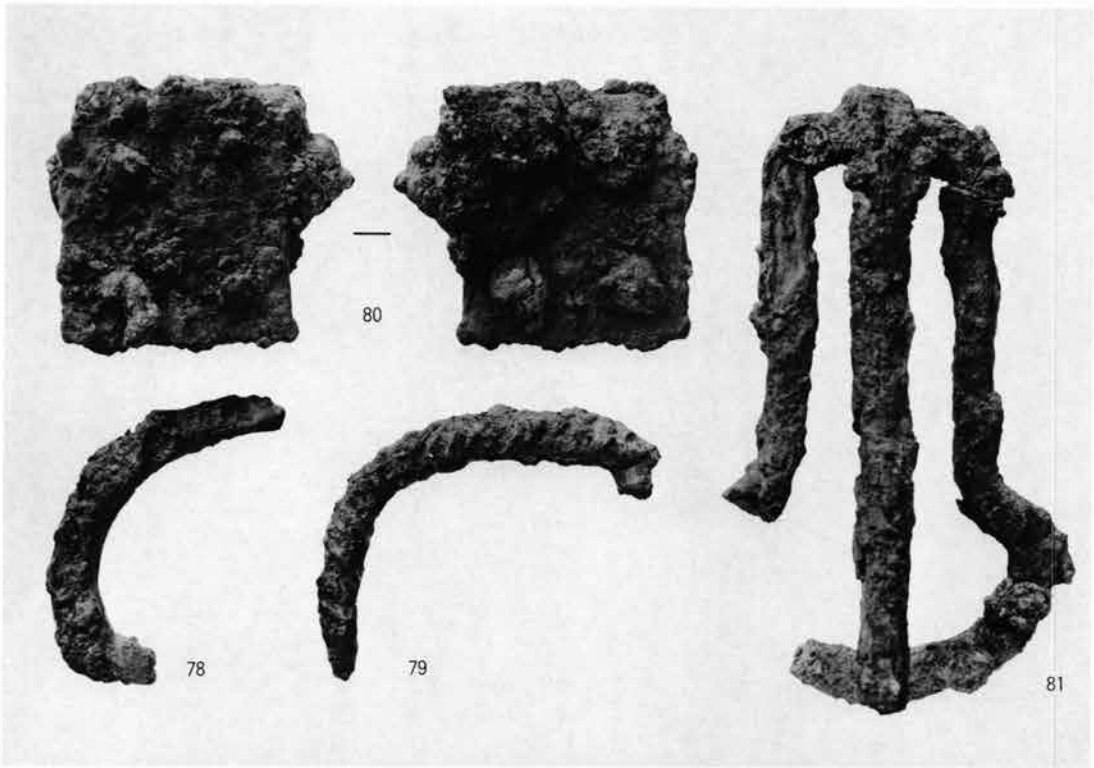


小屋ヶ谷古墳出土遺物 土器

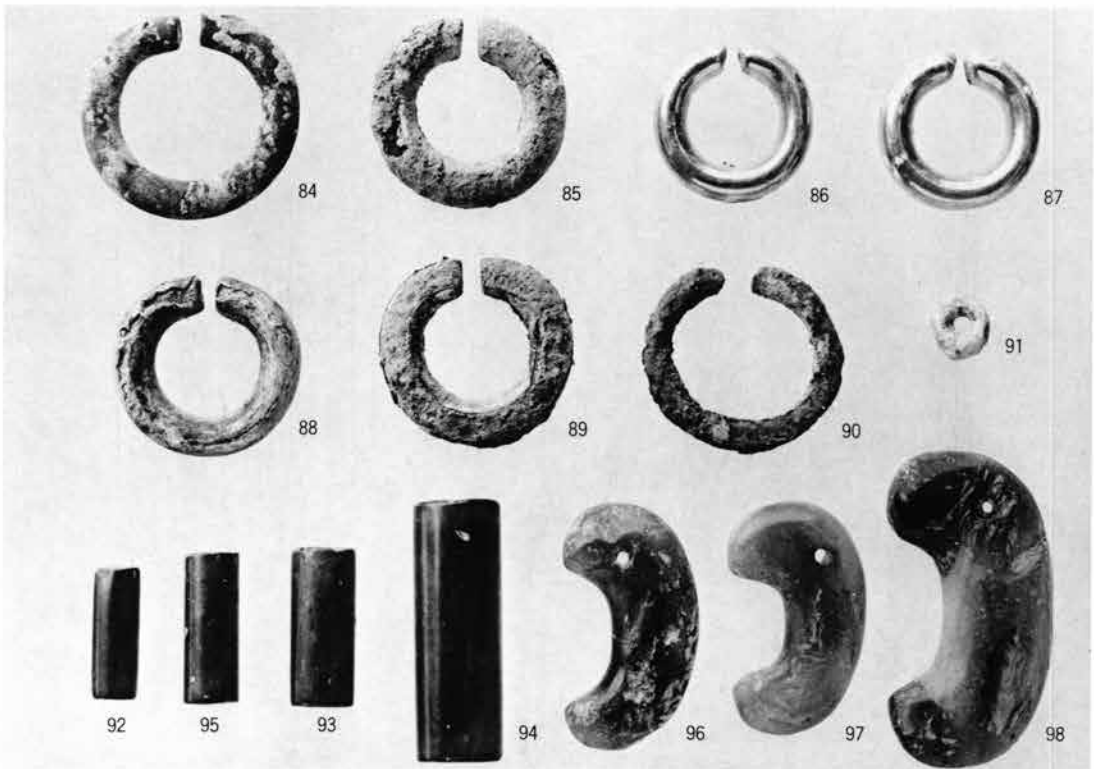


小屋ヶ谷古墳出土遺物 鉄器





(1) 小屋ヶ谷古墳出土遺物 馬具

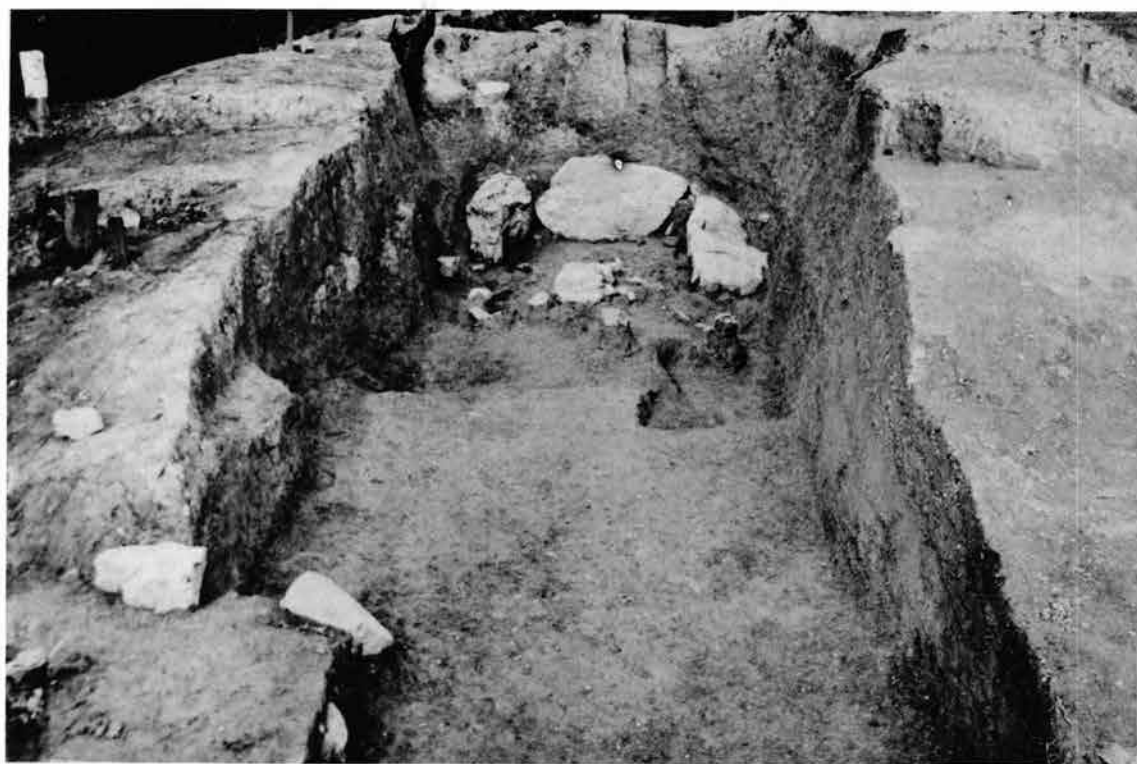


(2) 小屋ヶ谷古墳出土遺物 装身具

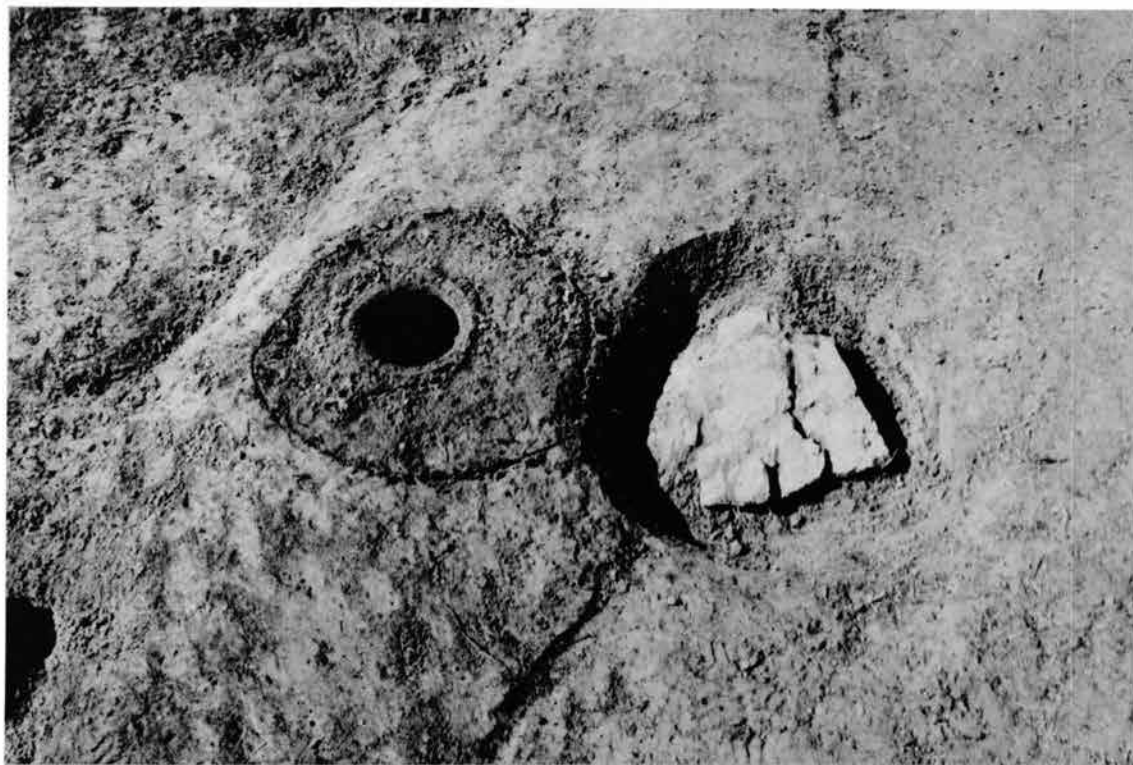
図版第13 洞楽寺古墳



(1) 洞楽寺古墳発掘調査前全景（南東から）



(2) 横穴式石室完掘後（南から）



(1) SX7・8検出状況（東から）



(2) SX8蔵骨器検出状況（東から）



(1) SX01集石検出状況(南東から)



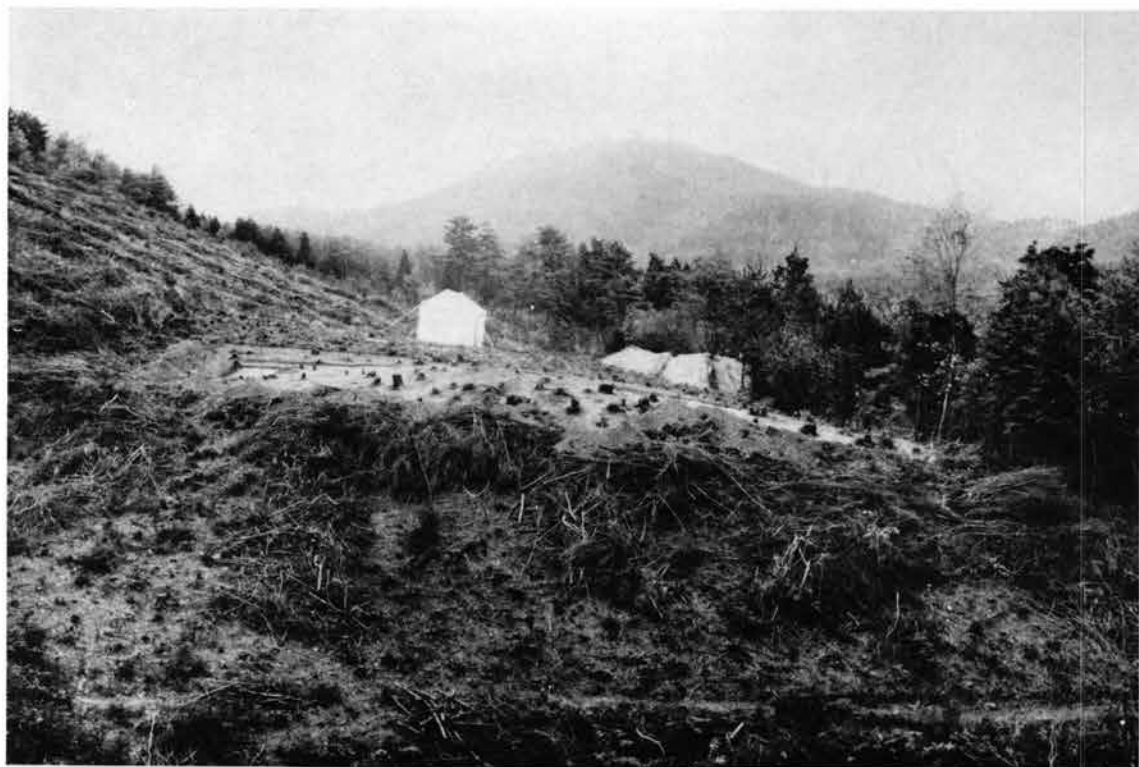
(2) 丹波焼大甕(A)出土状況(南から)



(1) 土師器鍋(C)出土状況 (西から)



(2) 瀬戸灰釉陶器(H)出土状況 (南から)



(1) 洞楽寺2号墳試掘状況（北から）



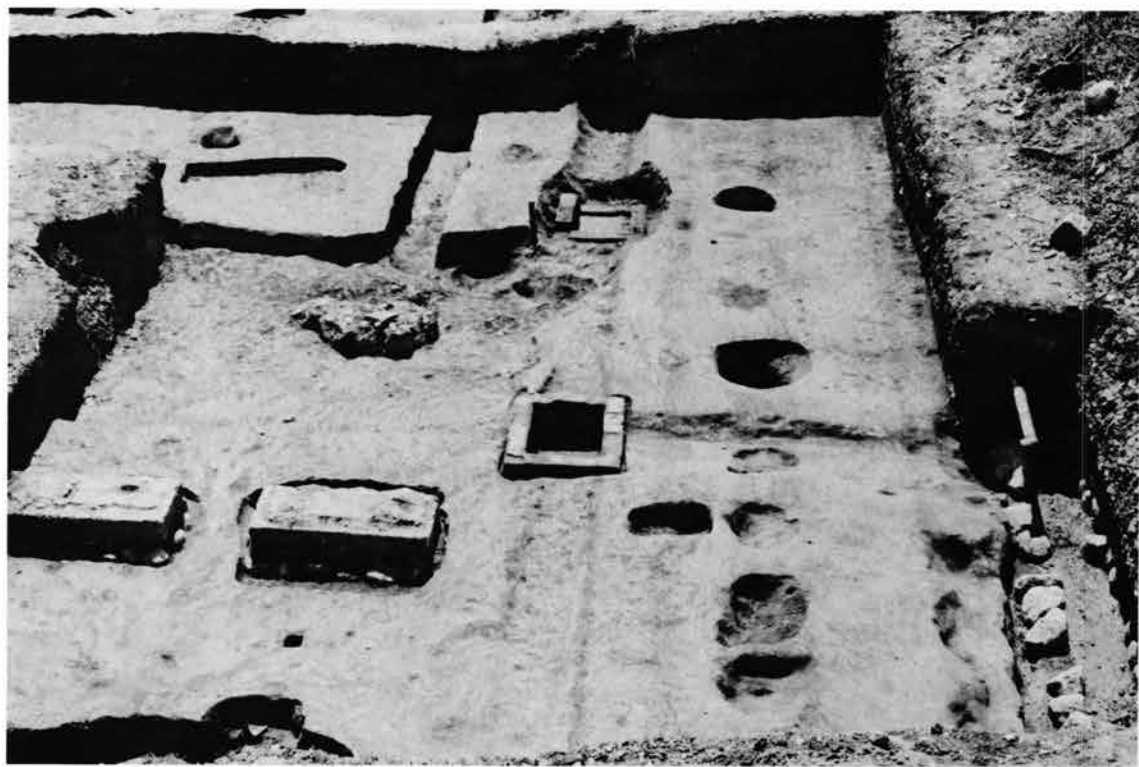
(2) 洞楽寺3号墳試掘状況（南から）



(1) 調査地北部 SB01・SB03・SC01 (南から)



(2) 調査地南部 (北東から)



(1) 62L06(S)遺構検出状況(北から)



(2) 62N11(S)(北から)



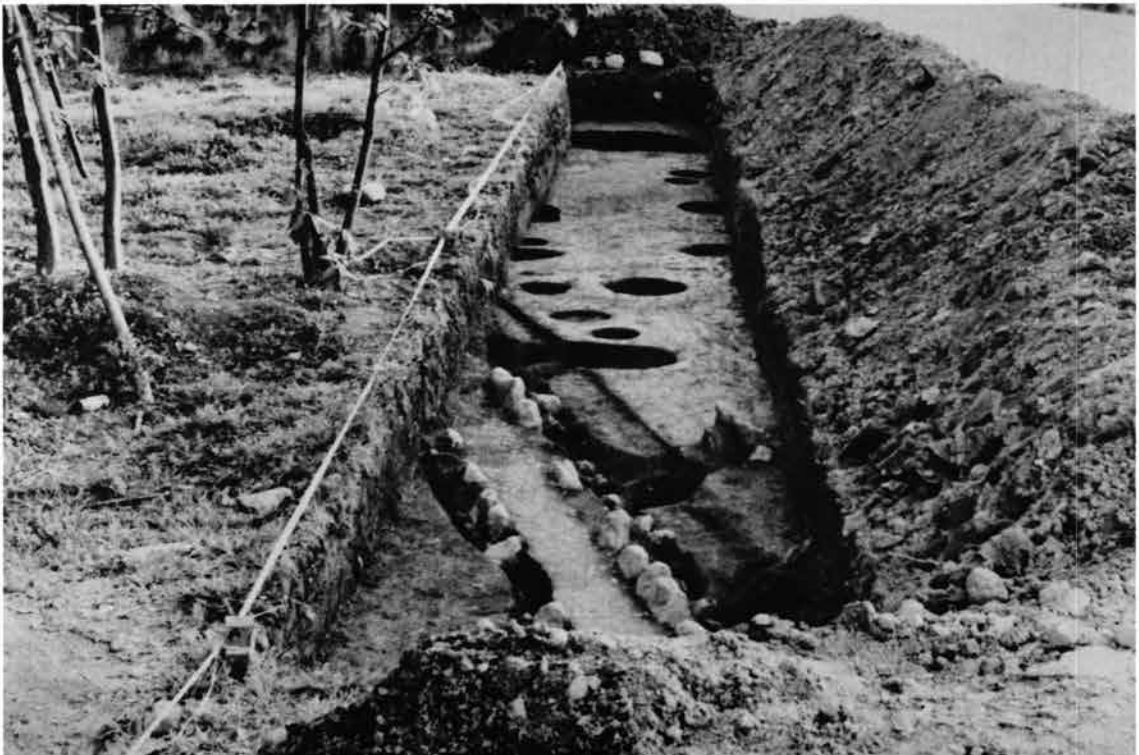
(1) 62N11(S)SB8111~SB8116ほか (南から)



(2) SK8111・SK8112・SK8113ほか (南西から)



(1) 62O12(S) (南から)



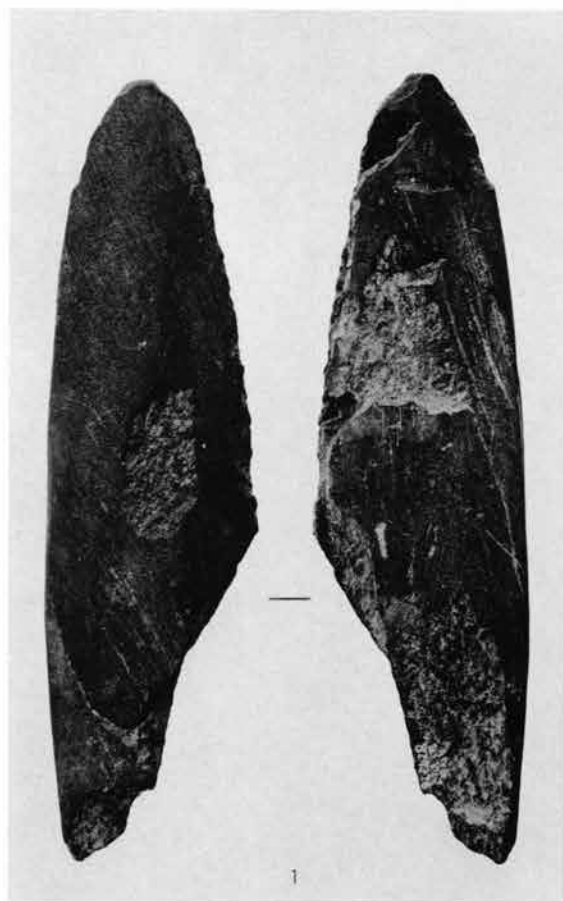
(2) 62T18(S)遺構検出状況 (北から)

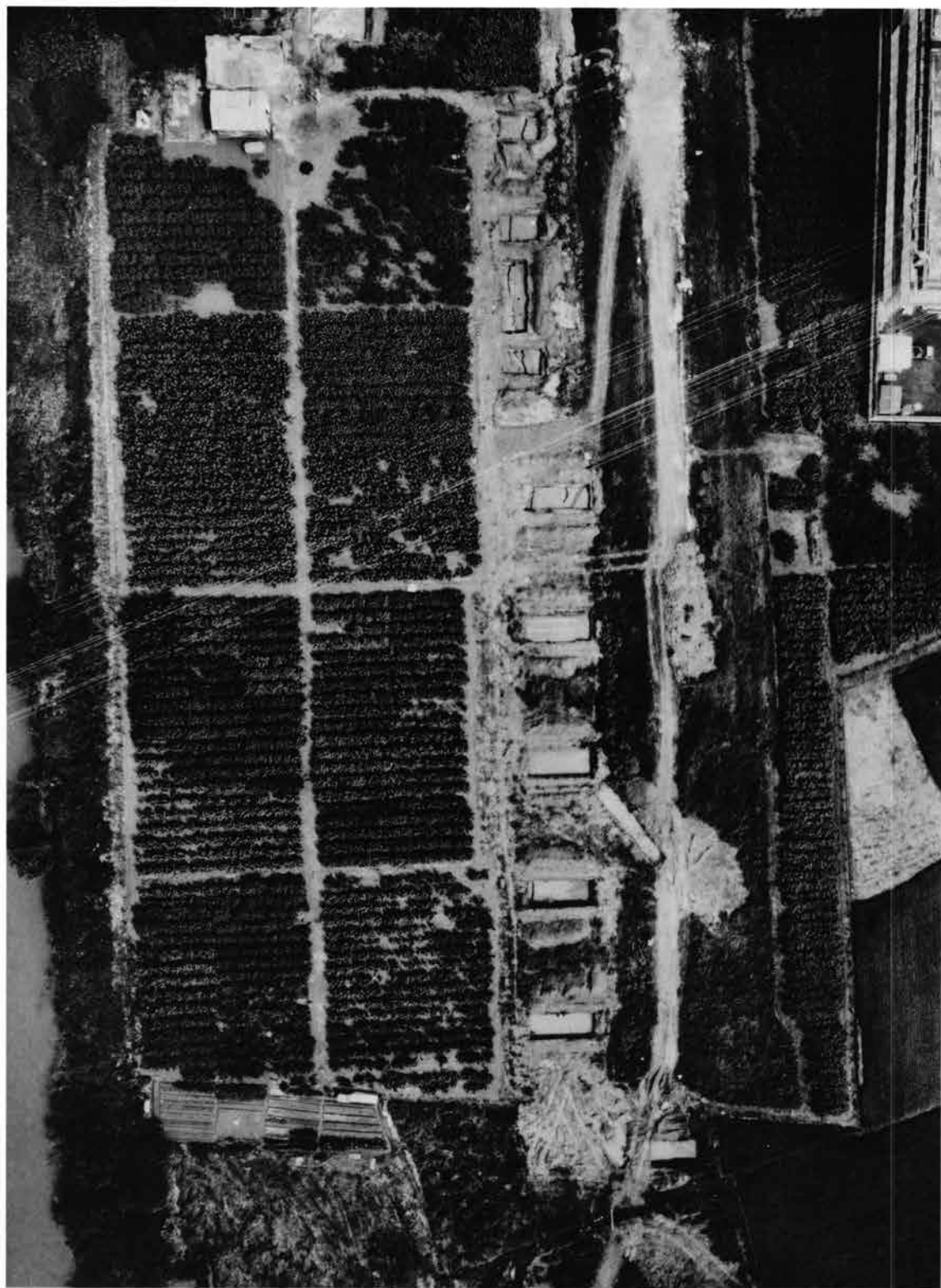


(1) Aトレンチ (東から)



(2) SB8201 (北東から)

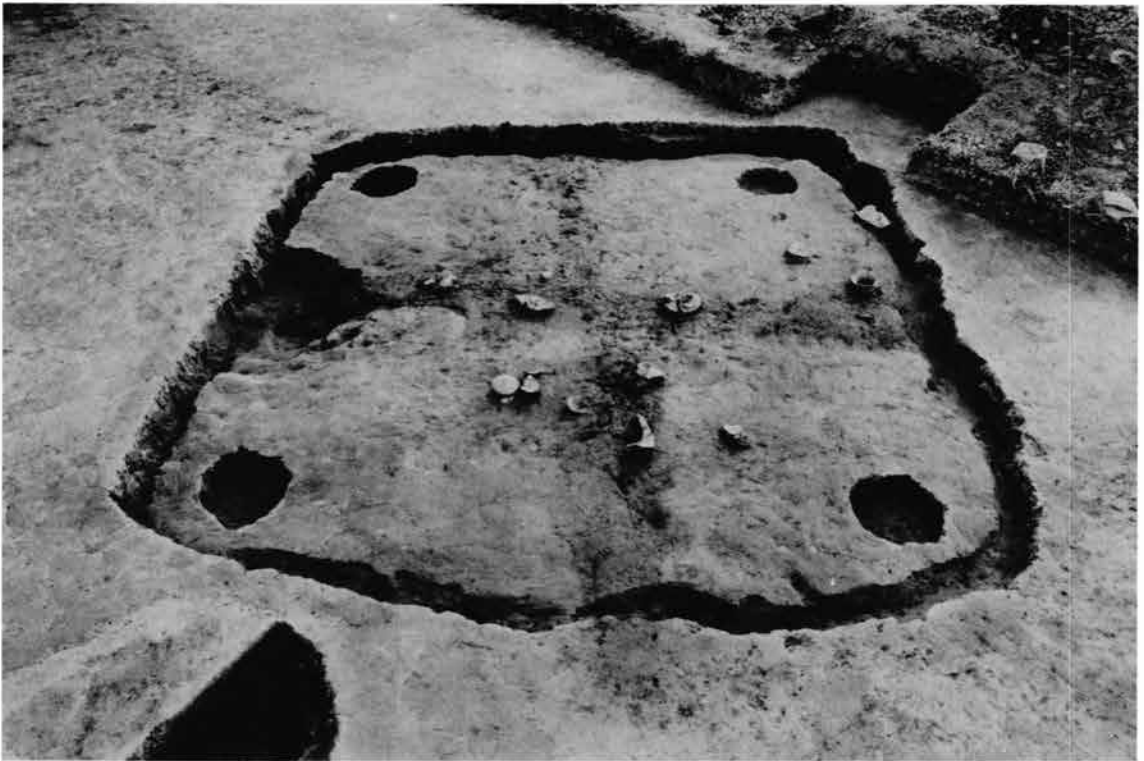




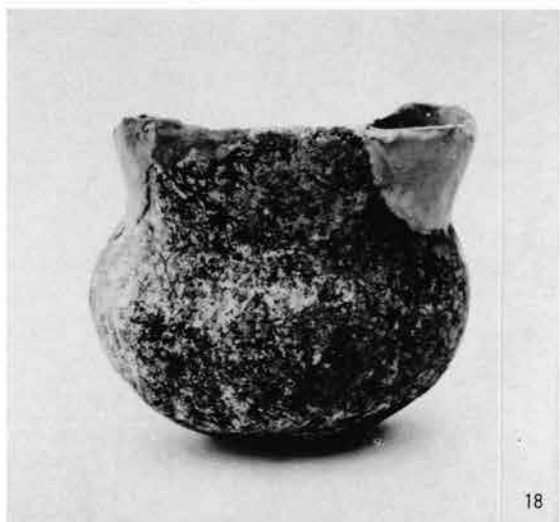
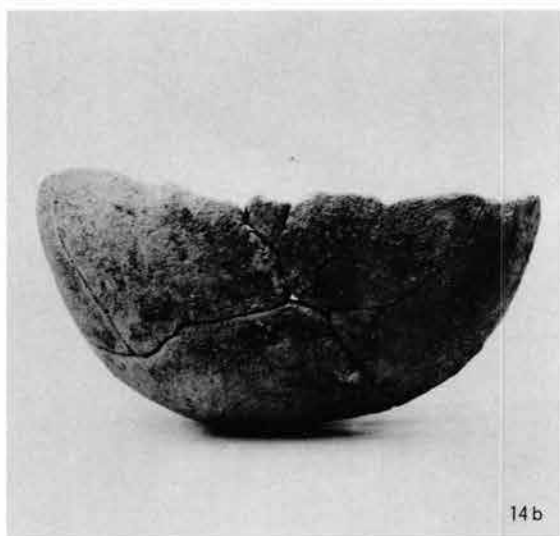
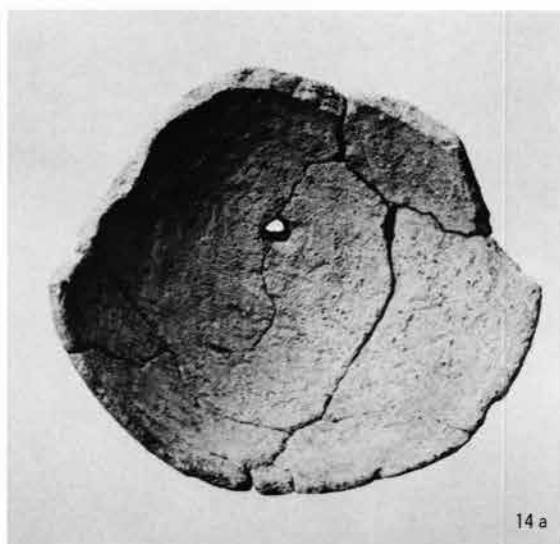
調査地航空写真（上が東）



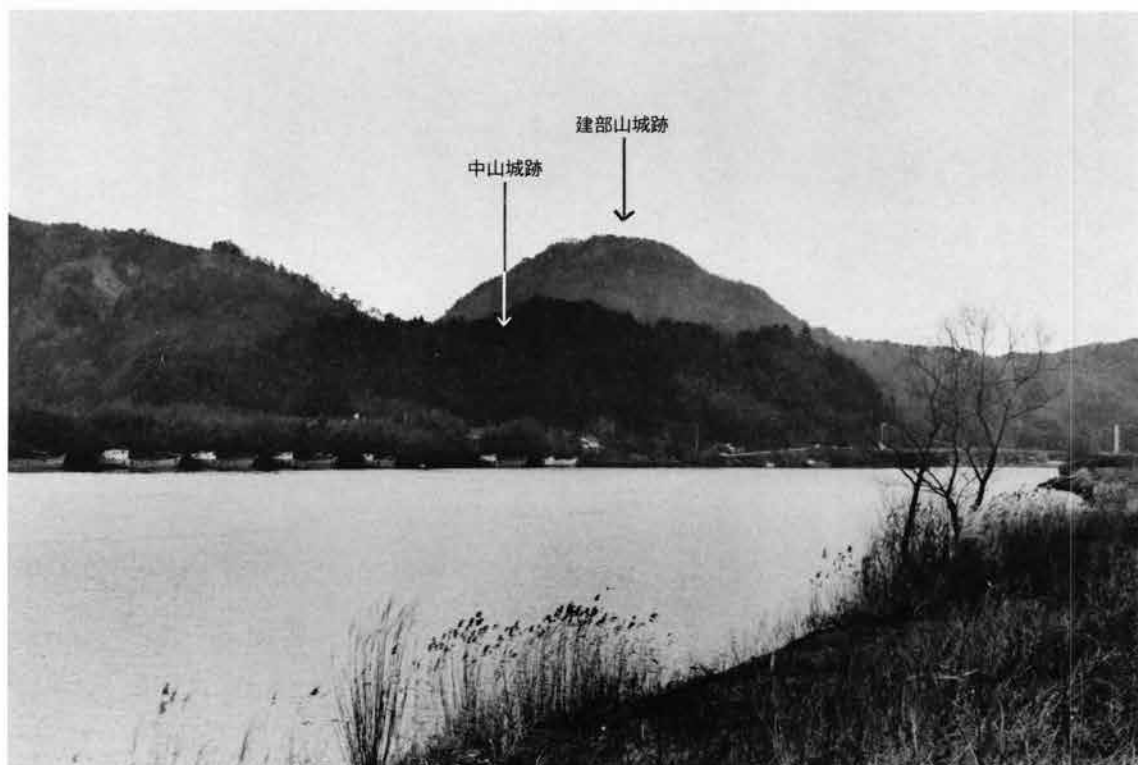
(1) 第3トレンチ (北から)



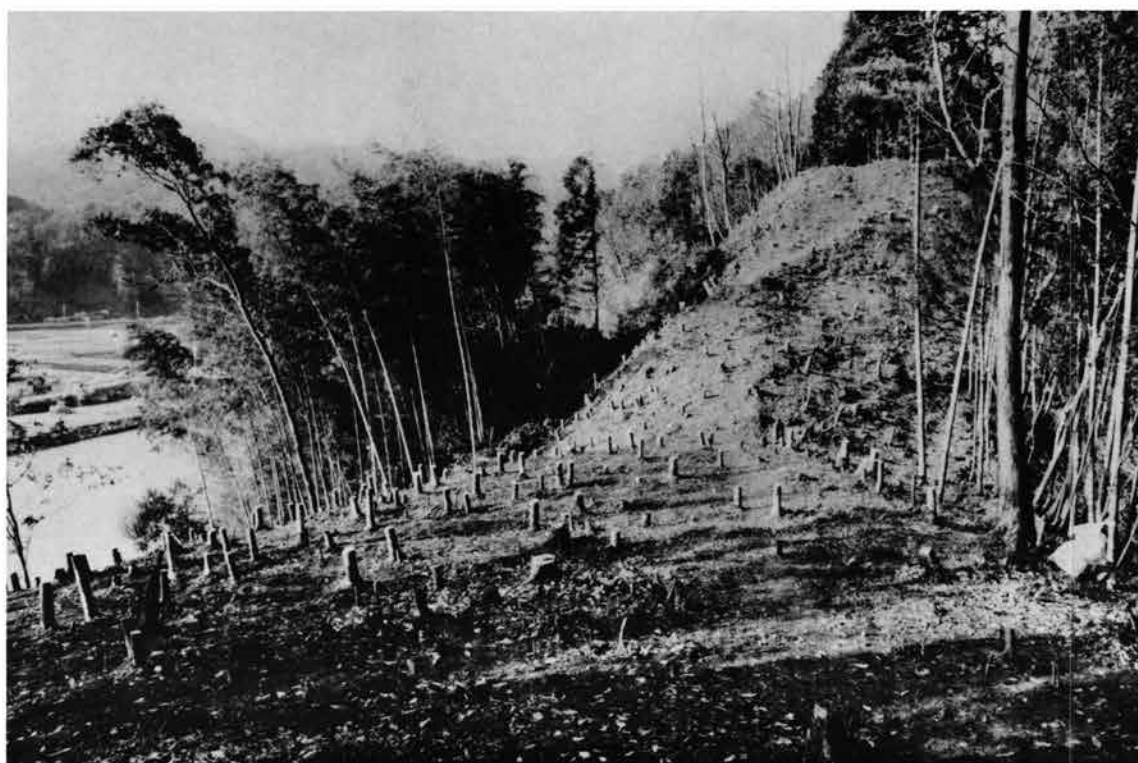
(2) SB8205 (北東から)



出土遺物（数字は土器番号，18はSB8202出土）



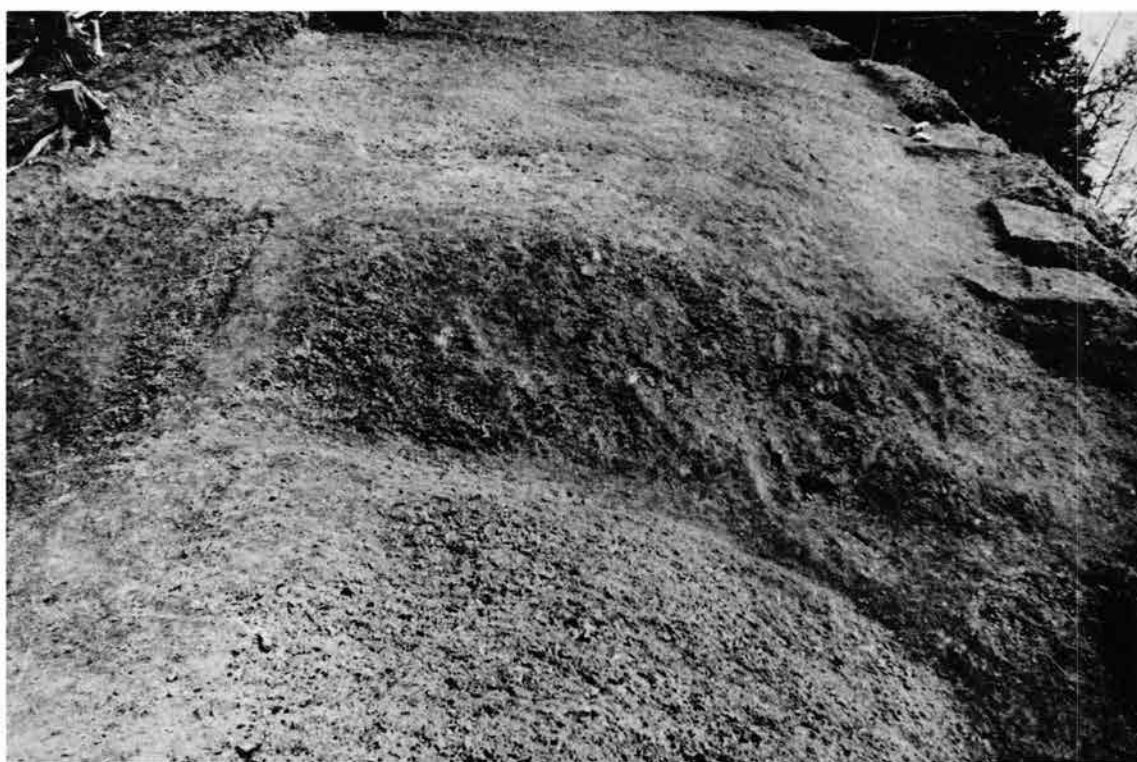
(1) 中山城跡遠景(北西から)



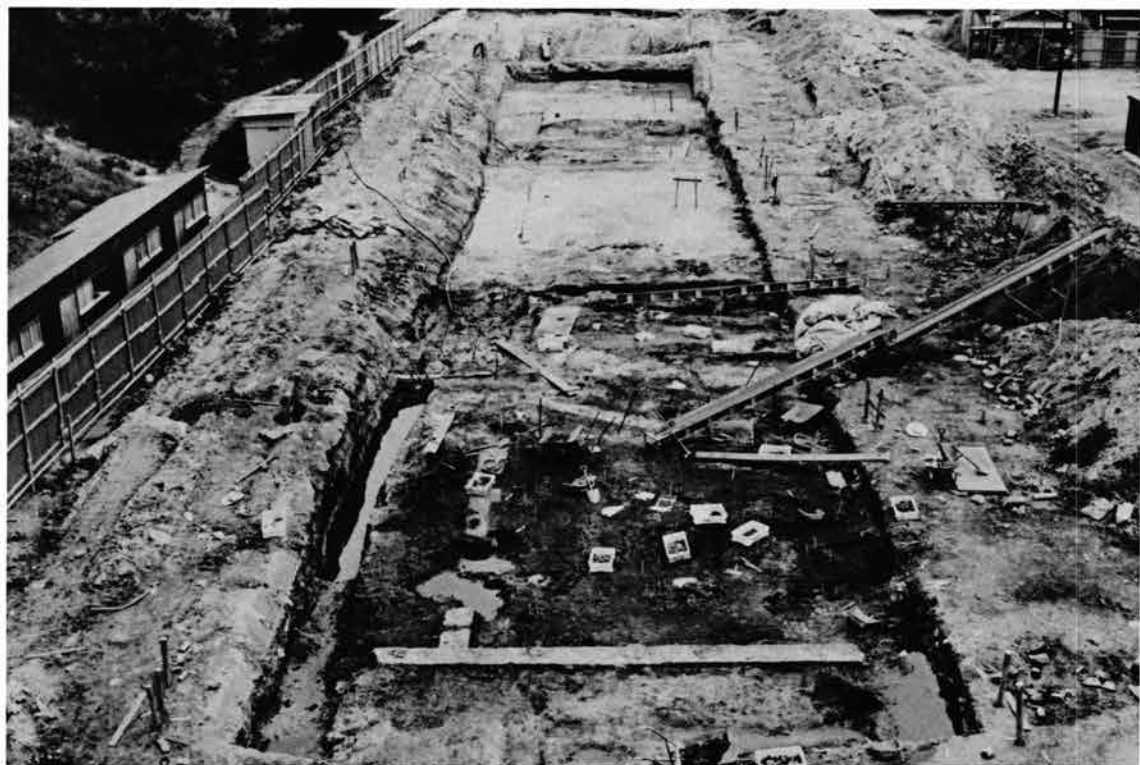
(2) 調査前状況(南東から)



(1) SX02 (北から)



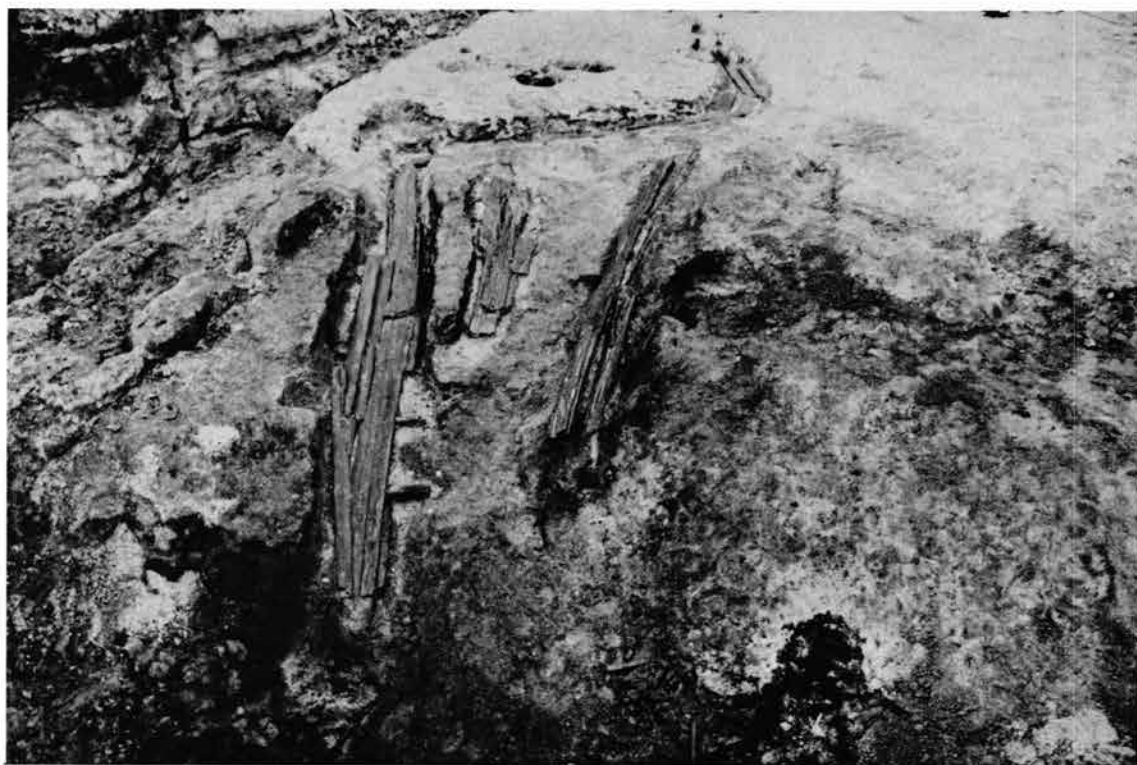
(2) 堀切り (北から)



(1) 第1トレンチ全景 (西から)



(2) SD02 堰検出状況 (東から)



(1) 暗渠施設SX08検出状況①(西から)



(2) 暗渠施設SX08検出状況②(東から)



(1) 第2トレンチ下層遺構検出状況（東から）



(2) 第4トレンチSD21土器出土状況（東から）



(1) 調査地全景 (北東から)



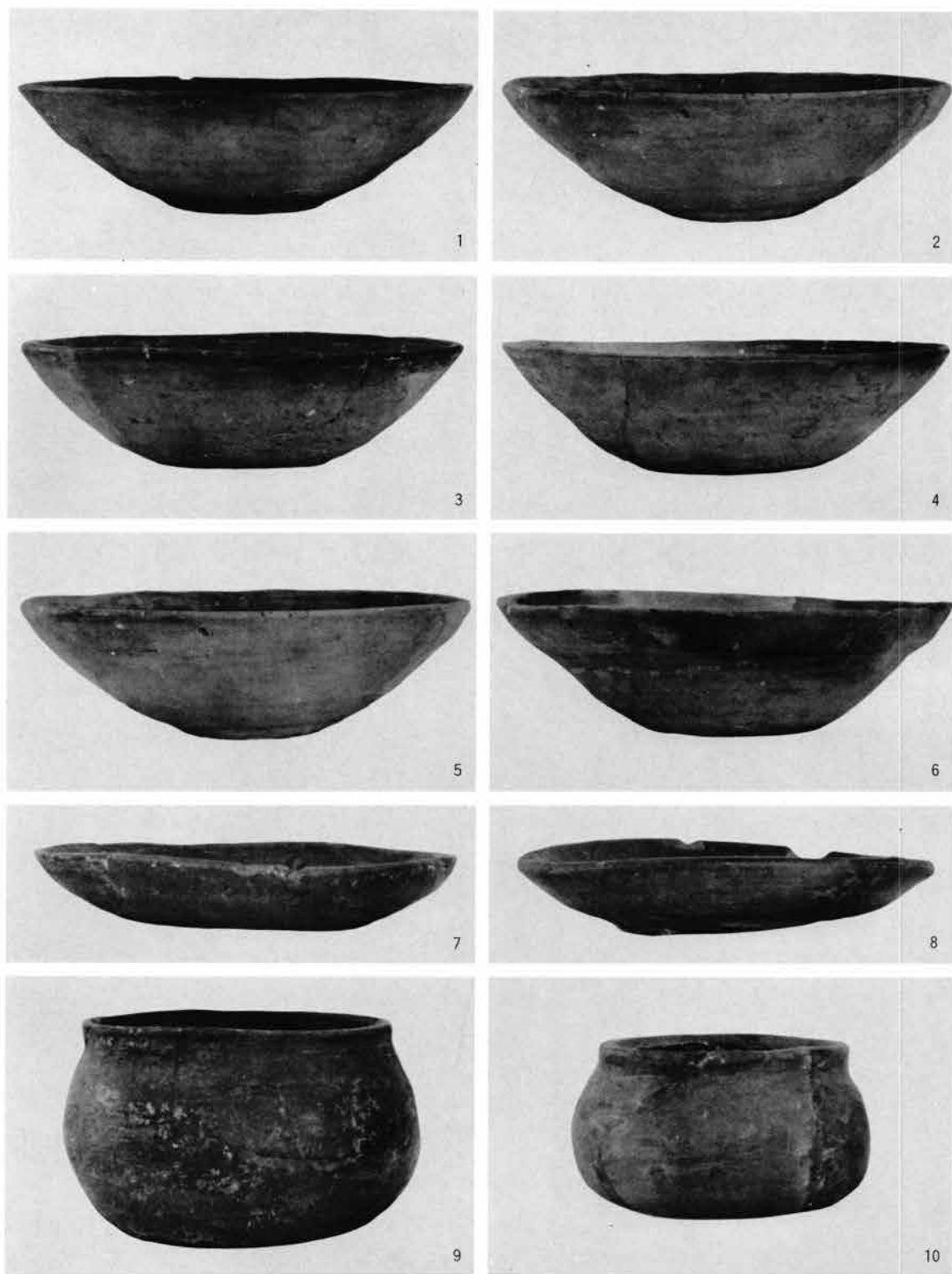
(2) SE01 遺物出土状況① (南東から)



(1) SE01 遺物出土状況② (南東から)

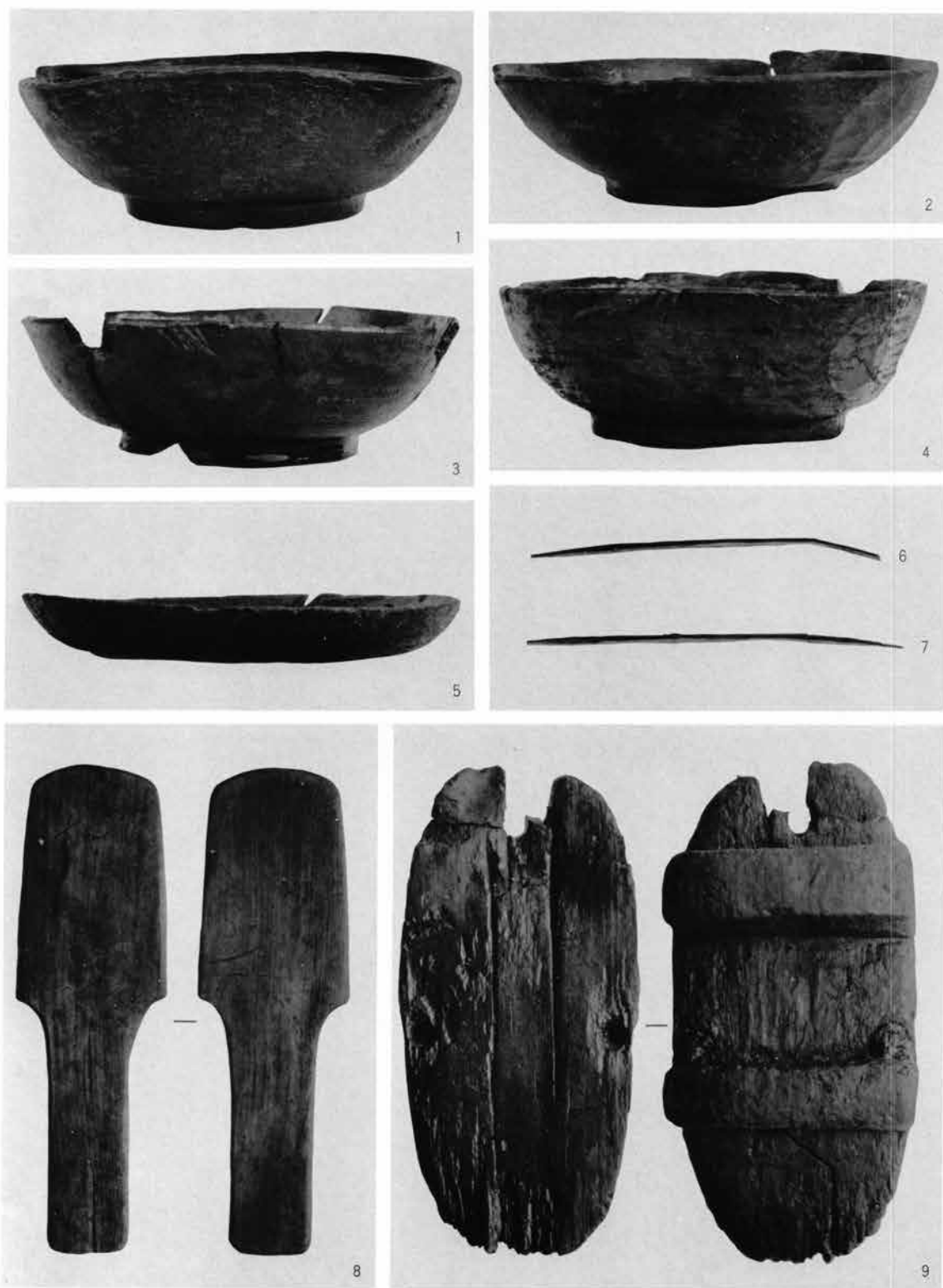


(2) SE01全景 (南東から)



出土遺物(1)

1~6, 黒色土器碗 7・8, 黒色土器皿 9・10, 黒色土器無頸壺



出土遺物(2)

1~4, 漆器碗 5, 漆器皿 6・7, はし 8, 杓子状木製品 9, 下駄



(1) 第1トレンチ (西から)



(2) 第3トレンチ南壁セクション

京都府遺跡調査概報 第6冊

昭和58年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社

代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075) 441-3155 (代)